もくじ

発刊に際して……1
序論・生涯教育時代の幼児教育……4

Ⅰ　本研究の目的と方法……8
1　本調査研究の目的……8
2　今次調査の概要……10

Ⅱ　家庭教育の実態と父母・保育職の意識……16
1　父母と幼児との「ふれあい」の機会……16
2　幼児の各種「おけいこごと」への参加……31
3　幼児教育のための「潜在的経済力」……40

Ⅲ　就学前教育をめぐる父母・保育職の意識……48
1　能力や才能の伸ばし方に関する基本的な考え方……48
2　就学前期における教育の必要性の認識……53
3　家庭と幼稚園との役割分担意識……64
4　家庭および園での教育に対する父母・保育職の意識……68
A　家庭教育に対する評価と期待……68
B　園での教育に対する評価と期待……94

Ⅳ　まとめと今後の課題……136

Ⅴ 資料・基礎データ表 ……139
1 父母編 ……139
Ⅰ 「子育て」に関する基本的な考え方 ……139
Ⅱ 家庭での「子育て」の実際 ……142
Ⅲ 園での「教育・保育」について ……177
Ⅳ あなたご自身とあなたのご家族について ……180

2 保育職編 ……184
Ⅰ 子どもの教育・保育に関する基本的な考え方 ……184
Ⅱ 子どもたちの家庭での「子育て」について ……190
Ⅲ 園での子どもたちに対する「教育・保育」について ……193
Ⅳ 先生ご自身と先生がお勤めの園のことについて ……196

序論・生涯教育時代の幼児教育

日本教材文化研究財団専務理事・帝京大学教授　林部一二

1. 現代における幼児の特性

幼児期を出生から小学校入学までの時期と見るのが一般的である。しかし，教育という面から見て，「物心(ものごころ)」ついてから小学校就学までの時期という人もいる。しかし，その「物心」とは何か，また，物心のつく時期と内容には個人差が大きい，ということを考えると，いわゆる「物心つく説」は難しい問題を含む。ここでは，出生から義務教育の始期までを幼児期と考え，これを「子供」と呼んでおくこととする。

生涯教育時代における幼児教育を考える出発点において，現代の子供が大きく変ったということを認識しなければいけないと言われる。大きく変ったと言われる最大の原因は，概括的に言えば，「社会構造の変化」ということである。社会構造と言えば，物の考え方，人間関係等精神的ないし社会生活的なもののほか，現在，最も著しいものは科学技術の急テンポの進歩に伴う子供達の遊びの方法の変化である。このような社会環境の中で，子供達が変ったということは当然のことでもある。

しかし，いつの時代でも，子供達は，心と体のすべてにおいて変り易いものである。幼児期は，変るのが当然である人生の発達段階の時期であろう。

乳幼児の特性は，心身の急激な発達である。その急激な生長のテンポである。各種の調査によれば，乳児（0.5歳から1.5歳頃まで）は1年で身長は1.5倍，体重は3倍に，3歳となれば脳の重さは成人の約1/3，6歳で約90%に，語彙(い)も著しく増加し，5歳で日常生活に必要な最低限度のものを憶えると言われる。また，性格は3歳でその方向が決定すると言われる。まことに急テンポの発達率である。

ただ，ここで問題とするのは，子供達の考え方と行動である。そこに，従来の子供達に比較して大きな変り方が目につくのである。幼児期のこの現象が，現代の大人達にとって問題の種となるのである。この事実を大人と子供の「断絶」と呼んでもよいであろう。いわゆる世代の断絶と言われるものである。

しかし，世代の断絶は，何時の時代にもあったことであるし，当然のことでもある。それによって社会は進歩するのである。けれども，人間の社会は連続を求めている。それなくしては人間の安心立命はあり得ないし，社会そのものが崩壊してしまうだろうと心配されるからである。教育は，それが幼児教育であろうとも，このような世代の断絶の間に橋をかける仕事と言ってよいであろう。教育という営みは，人間社会の心を伝えることである。

次に，現代の子供達は変ったというが，何時から何をもって変ったと言ってよいのであろう

か。さらに，変ったと言うことは真実であろうか。変ったことも事実であるが，変らないものもあるのではなかろうか。もっと言えば，変らないものを確かめることも必要であろうし，変えてはならないものを見極めることも必要なのではなかろうか。それが，教育の営みの大事な部分であると言ってよいのではなかろうか。

このことに関連して，私は，アメリカの神学者であり，キリスト教社会倫理の権威であったラインホルト・ニーバー師の言葉を思い出す。彼は数年前に逝去されたが，1934年，マサチューセッツ州ヒースの別荘近くの教会で，「変えることのできるものについて，それを変えるだけの勇気を，変えることのできないものについてはそれを受け入れるだけの冷静さを，そして，変えることのできるものと，変えることのできないものとを識別する知恵を，神よ与えたまえ」と祈った。およそ，人間の言葉として，人間を知ること，かくまで深い言葉はないと言ってよいであろう。

現代の生涯教育時代において，幼児教育に限らず，教育と言えば，新しいもの，従って，子供達の変化と大人達の意識の変化に目を奪われて，それをクローズ・アップしようとする傾向があるのではないか。それも必要であるが，子供達の変らないもの，変えてはならないものに着目したいと思う。

そこで，現代の子供達の特性は何であろうか。心身の発達の加速度的現実は子供達が変ってきたということが最も目につき易いところであろうが，変らないという面は，「可塑性」に富むということであろう。子供達は何時の時代の子供達でも，心理的，身体的，社会的に他から影響を敏感に受ける。従って，遊ぶということ，学ぶということ，反応するということについて，適当な刺激が必要なのである。その点において，良いしつけや保育や教育が変らない目で対応していかなければならない。

子供達への対応で，変えてはならないものとして，幼児期の教育は生涯教育の起点であるという認識である。人生というサイクルの中で，幼児期はその出発点であるというばかりではなく，心の教育を始めとして，行動，動作，所作に至るまで，日常生活の中で，「しつけ」ていかなくてはならない。「しつけ」は決して「押しつけ」ではなく，子供一人ひとりの性格や能力と，その子供の置かれている状況の中で，啓発し，誘発していく作用である。「三つ子の魂百までも」という言い習わしは巧みにして妙(たえ)である。性格は3歳にして大よその方向が決定する，ということも通説と考えてよいであろう。

2.　生涯教育の中の幼児教育

「生涯教育と幼児教育」という標題は，解釈の仕方によっては，生涯教育と幼児教育を同一平面上において並列にとらえようとしているように思われる。しかし，言葉の厳密な意味では，学校教育も幼児教育も生涯教育という包括概念の中に入れられるから，並列の概念ではなく，

生涯教育は幼児教育の上位概念と言えよう。よって，私は,「生涯教育の中の幼児教育」という表現にしているのである。

幼児教育の意義は，古来いろいろな思想家や学者によって説明されてきた。その中で，幼児期という人生の発達段階の教育においては何が重要なのか，という課題を説明するのが，いわゆる「人間サイクル論」である。人間はその発達と成長，ないし「年を取る」という宿命の中で，それぞれの時期という区切がある。これを人生の節と言ってよいであろう。その節々において，人それぞれの生活の課題があり，また発達の課題があり，それに対応して教育の課題があると考える。アメリカのエリクソン，ハビガースト等の学者がその説を代表する。

ところで，幼児期の教育課題は何であろうか。人々によって，その答えはさまざまである。しかし，その中でアクセントの違いはあっても，本質的なものには共通点があるはずである。私は，それを２つのものにまとめたい。

１つは，幼児期は他に対する幼児の信頼感を培うことであり，２つには，幼児期は自立性の養成であると思う。幼児期の対人関係の中心はその父母である。幼児は泣くことによって意志表示をするが，その泣き方をいちばん正しく見分ける者は父母である。父母は，幼児の泣き方によってどう措置したらよいのかを学ばなければならない。幼児の心をいちばんよく知っているのが父母であるべきである。その父母の措置によって，幼児としていちばん大事な「信頼感」を身につけるのである。それがなければ，幼児は生長しても人を信ずることを知らなくてしまう。仏典の「父母恩重経」の「廻乾就湿の恩」によって，幼児は母に対して温かい信頼の心を持つことができる。人間の生涯において，この心は，幼児期に対する何物にも勝る贈物と言うべきである。

幼児期の教育やしつけの最も大事なことは,「自分のことは自分でする」「自分のことは自分で考え，解らなくなったら父母や家族や先生に聞く」ということであると思う。まこと当り前のことであり，かつ，至極平凡なことである。これを「自立性」と言ってよいであろう。幼児期は失敗と成功の相交錯する行動を繰り返す時期である。失敗を恐れてはならない。失敗を恐れさせるのは，実は現代の父母である。「しっかりやりなさい」「こんなことができないのですか」「誰誰さんを見なさい」と父母が子供を責めても，子供に何がプラスになるであろうか。父母のひとりよがりが残るだけである。幼児期に，折角培った信頼感も，これで断絶してしまうのである。

子供に対する禁句（言ってはいけない言葉）を５つ考えてみた。①劣等感や自信を失わせる言葉，②自主性を損う言葉，③追いつめてしまうような言葉，④生命の尊重を損うような言葉，⑤好奇心をつみ取るような言葉の５つである。平凡な言葉，すぐ親の口から出るような言葉，幼児期の子供達に対しては，これらの言葉を，両親や大人達の禁句として心がけたいものであ

る。教育は平凡なことの積み上げによってなされるのである。生涯教育の中の幼児期の教育と言っても特別に難しいことではない。信頼と愛情と，そして自分のことは自分でするという平凡な教育が中核であると考えるのである。

次に，生涯教育のための幼児教育は何を目標とし，何を内容とするかが問題となる。

これについては，まず，何よりも幼稚園教育要領がその検討の基準となる。この教育要領は，本年３月15日付，文部省告示第23号で，従来の教育要領（昭和39年，文部省告示第69号）が全面改正されたため，この改正要領を見なければならない。また，周知のように，いわゆる幼児教育は，幼稚園と児童福祉施設としての保育園（所が法律名称）が組織的な教育及び保育を行っている。保育園の保育要領は，幼稚園教育要領の改訂に伴い，その改正作業が進行中であるというが，従前の例によると，実質的には両者に大きな差はないと見てよいであろう。

幼稚園教育要領によれば，幼児教育の基本は，幼児期の特性を踏まえながら彼らの環境を通して行うことであるとされている。保育園の方も大体同様の目標を立てているが，幼児の年齢が幼稚園より低い児童をも保育することになるので，教育・保育措置に多少の相違が見られることは事実である。

以上のような幼稚園教育の基本を実現するために，教師と幼児の信頼関係を築き，また，よりよい教育環境を創造するように努めることとされている。このことは，筆者の私見として既に述べた通りである。そのために，幼児の情緒の安定，主体的な活動，遊びを通しての指導を中心とすること，また，幼児一人ひとりの特性を発見し，それに応じた発達の課題の達成を目指すことである。これを具体的な教育活動の領域として，従前の健康，社会，自然，言語，音楽リズム，絵画製作の六領域を，健康，人間関係，環境，言葉，表現の五領域に整理統合している。理論的にも，今回の改訂は前進したものと思われる。そして，この改訂は，幼，小，中，高を一貫した教育改革の流れに沿い，その出発点としての幼児教育の位置づけがなされたものと見てよいであろう。

しかし，幼児教育は，教育と保育の専門施設で行われれば十分であるという訳にはいかない。家庭と地域の役割が大きいからである。

家庭教育と学校教育の最もスムーズな結びつきは，家庭と幼稚園及び保育園との間においてである。それは，家庭と教育・保育機関(施設)とが最も親近性のある教育機能を持っているからである。その親近性を大きく生かすことは，両者の関係を良好なものにするばかりではなく，生涯教育の出発時の重要な教育的機能を果たすことになるからである。

地域社会は，幼児期において最も重要な遊びの場そのものである。乳児といえども，その年齢の少し上の幼児との交流は心に感じ取るものが多い。現在，その地域社会の教育力の幼児期への展開が不十分である。これは，今後の生涯教育の課題であると思う。

I　本研究の目的と方法

前章において述べられたことをさらに敷衍する意味で，本章では，今回の調査研究の目的および今次使用した調査票の内容・具体的項目，あるいはまた調査方法などについて，その概要をまとめておくこととする。

1　本調査研究の目的

1989(平成元)年3月15日，新しい「幼稚園教育要領」が文部大臣から告示として公示された。周知の通り，この「幼稚園教育要領」は，幼稚園における教育について一定の国家的水準を保つために，そこでおこなわれる教育の内容や方法，あるいはさらに，具体的な指導上の留意点などを述べたものである。幼稚園は，学校教育法第1条に規定される通り，わが国における法律上正式な意味での「学校」の1つである。このことからしても，今回の「幼稚園教育要領」の改訂は，国家のレベルにおける就学前教育改善の重要なエポックあるいはステップであると言わなければなるまい。

「幼稚園教育要領」は，小学校・中学校・高等学校および特殊教育諸学校（盲学校・聾学校・養護学校）における教育課程編成の国家的基準として告示される「学習指導要領」の幼稚園版であるが，この「学習指導要領」は，社会や文化の変化，科学技術の進歩や発展などに裏うちされた国民的レベルでの学校教育に対する要求や期待に対応し，それと歩調を合わせるべく，第二次世界大戦後，既に大きな5回の改訂作業を経てきている。つまり，およそ10年に1回の割合で改訂作業がおこなわれてきたということになる。ところが幼稚園について考えてみると，今回の「幼稚園教育要領」の改訂は，1964(昭和39)年以来，実に25年ぶりの改訂だということになる。

なぜ，「幼稚園教育要領」だけが一種「おきざり」状態にされてきたのであろうか。おそらく，その理由は様々であろう。例えば，国民の側も，あるいは，就学前教育行政担当者の側も，小学校以上の学校教育と比較した場合における就学前教育の「軽視」とまではいかないだろうが，一種のウェイトの軽さを意識的・無意識的とを問わず感じてきたということもあろうし，ただでさえ受験戦争だとか教育に対する過熱した競争がとりざたされる社会風潮の中にあっては，就学前の幼児に対する「教育」といえば，敢えて，それを避けて聖域化しておきたいというような意識がわれわれの間で作用してきたのかもしれない。しかし，ここでは「幼稚園教育要領」改訂作業の遅れを批判したり，その原因を細かく論じたりするつもりはない。それは，また別の場や機会において詳細に論じられるべき問題だとわれわれは考えている。

われわれが今まさに問題としたいのは，むしろ，就学前教育が変化しなければならなくなっ

たという事実そのものであり，何が就学前教育を変える力となっているのかという側面にこそ，研究的な光が当てられるべきだとわれわれは考える。何が就学前教育を変えようとしているかである。

色々なことが考えられるであろう。例えば，よく言われる「子どもが変わった」と言う時の「子どもの変化」がそうである。確かに，子どもは25年前と比べて大きく変わってきている。子どもをとりまくマス・コミやメディアの環境だけでも，テレビ，ファミコン，パソコンの登場と普及など，極めて大きな変化があった。とりわけ都市部の子どもたちからは，遊び場が奪い取られていったし，家庭においては，それを構成する人の数が減った。このような子どもをとりまく諸々の環境の激的変化を考えれば，それによって子どもに何らかの「変化」が生じるであろうことを否定できる人間は，今現在，おそらく一人としていないのではなかろうか。

「子どもには普遍的な部分があり，いくら時代が移ろうと変わらないところがあるのだ」という主張をもつこともできる。しかし，それは「そうあってほしい」という，いわば一種の願望なのであり，冷静に現代の子どもたちを観察してみるならば，やはり，かつての子どもとは異なっている部分の方が大きいと言わざるを得まい。

就学前教育を変え得る大きな力の一つである「子どもの変化」については，既に多くの研究者たちが多様な角度から多様な報告をしている。いわゆる「発達加速現象」だとか「友達とうまく遊べない子どもが増えている」といったトピックスは，そのような先行研究の中から生み出された成果である。

このような状況の中でわれわれは，就学前教育を変える，あるいは変え得る別の大きな力として，改めて，就学前幼児の父母たちの教育意識，すなわち就学前教育に対する期待や要求を中心とする考え方と，幼稚園や保育所などの組織的就学前教育(保育)機関で実際に教育(保育)実践に携わる専門職たち（幼稚園教諭および保育所保母）の教育意識というものにフォーカスを当ててみるべきだと考えたのである。なぜであろうか。要するに，就学前教育の実質的な変化なり改善は，子どもをもつ父母や就学前教育に関する専門職たちの教育意識と教育実践に裏づけられて初めて実現すると考えたからである。例えば，「幼稚園教育要領」や就学時期のくり上げというような就学前教育制度やシステムが変えられたところで，それを実際に動かす人々の意識と実践がともなわなければ，教育の現場には何の変化も改善もおこり得ないとわれわれは考えるのである。

以上のような問題意識に基づいてわれわれは，幼児をもつ父母および幼稚園・保育所における組織的就学前教育の実践家としての幼稚園教諭・保育所保母を対象とし，彼らがもつ就学前教育に対する意識，つまり，それに対する期待や要求を，なるべく多角的な視点から把握・理解するために今回の調査を企画し実施した。

2 今次調査の概要

次に，今次調査の対象，実施方法，あるいは，上記の目的のもとにわれわれが作成し実施した調査票の内容および具体的質問項目などについて，その概要を報告しておくことにする。

1. 調査対象および実施方法

今回の調査を実施するにあたって調査に対する協力のお願いをさせていただいた方々の数は，幼稚園児父母が約1,000名，幼稚園教諭・保母が約400名であった。調査実施に際しては，(財)日本教材文化研究財団および全日本家庭教育研究会の援助と協力を受け，両組織から紹介された調査協力園を通じ，父母・保育職への調査依頼，および調査票の配布・回収をするという形をとった。調査は，1987年10月～11月の予備調査を経た後(予備調査に関しては，「生涯学習体系と幼児教育の開発：(財) 日本教材文化研究財団研究紀要17，1987．12.」に久保田が報告をしている)，1987年12月から1988年1月にかけて実施された。

上のような調査実施方法をとったため，回答の回収率は調査研究としては極めて高く，父母で約8割，幼稚園教諭でも約7割となっている。その反面，本来ならば保育所も含めるべきであった調査の対象が実質的に幼稚園（父母および教諭）に限定されてしまい，この点については今後の課題を残してしまったことになる。ともあれ，調査協力園は，全国に分散しており，データ上の地域的偏りはとりあえず回避できたものと考えている。協力園の名前についてはここでは公表できないが，その所在地だけを以下に示せば，札幌市（北海道），仙台市（宮城県），前橋市（群馬県），保谷市（東京都），大田区・練馬区・新宿区など（東京都），市川市（千葉県），松山市（愛媛県），駿東郡清水町および函南町（静岡県），宇都宮市（栃木県），静岡市（静岡県），浜田市（島根県），筑紫野市（福岡県）ということになる。

次章以降において報告される調査結果に対する理解をより深めていただくために，ここで今回の調査対象に関するデモグラフィック（人口動態学的）な諸特性を概観しておこう。

(1) 父母側回答者の諸特性

父母側回答者における子どもとの続柄(図Ⅰ2—1)をみればわかる通り，今回の回答者は子どもの「母」が98.3%，「父」が1.5%，「祖父母」が0.1%となっている。圧倒的に母親が多い。つまり，この報告書に述べられている調査結果データは，実質的に幼児園児の母親の教育意識と考えることができる。

年齢の分布(図Ⅰ2—2)についてみてみよう。「20～29歳」が11.1%，「30～34歳」が50.7%，「35～39歳」が32.6%，「40～49歳」が5.3%，「50歳以上」が0.3%となっている。したがって，上の事と考え合わせれば，回答者の8割以上は30代の母親ということになってくる。就学前教育に対する考え方が年齢層の違いによってどのように変化するかについては，以下の報告中，

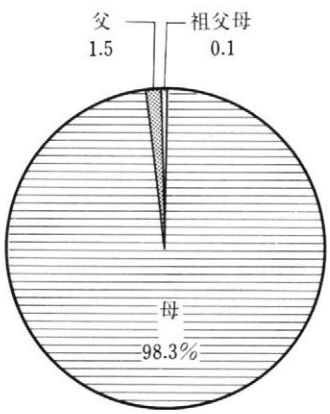
必要に応じて述べられることと思う。

学歴および幼稚園教諭・保母資格の有無についてみる。学歴については，「高等学校卒業」が最も多く51.2%となっており，続いて「短期大学卒業」が18.6%，「専門学校卒業」が13.0%，「四年制大学卒業」が12.5%となっており，「中学校卒業」の3.9%と比較してみた場合，母親の高学歴化傾向を見出すことができよう。また，幼稚園教諭免許（小学校以上の教諭免許も含む）および保母資格の取得率をみると，教諭免許で15.7%が，保母資格で5.1%が「もっている」と回答している（資料：基礎データ表を参照の事）。この数値を高いとみるか低いとみるかは自由だが，少なくとも，最近における女子の短期大学や4年制大学への進学率の高まりを考えれば，「ある程度は就学前教育について勉強した」母親たちがかつてに比べて増加していることをみることができる。このあたりに，最近の母親たちの教育意識のあり方を解く鍵があるのかもしれない。

次に，職の有無をみると，「とくにない」が70.0%で，「パートタイム・内職の仕事をもっている」の16.9%，「家業（お店など）に就いている」の7.4%，「家庭以外に正規の職場をもっている」の6.7%と比べ，回答者の多勢を占めていることがわかる（資料：基礎データ表を参照の事）。

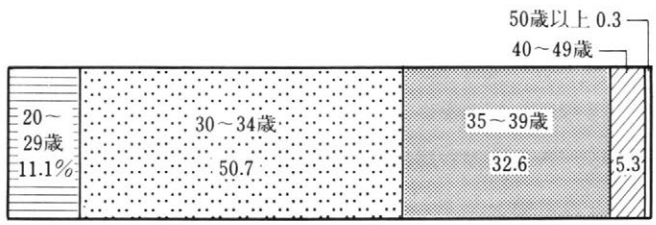
父親の職業についてみておこう（図Ⅰ2—3）。最も回答率が高いのは「一般事務職の会社員・公務員（管理職を含む）」の40.2%であり，続いて「運転手・大工・工場作業員・現場作業員などの技能工・労務作業員」の20.5%，「店員・セールスマン・警官などの販売・サービス・保安職」の12.4%などとなっている。父親の職業は，直接的あるいは間接的に家庭の経済状態と結びつく面があり，それが子どもの教育に対する意識とどのように関連しているかなどは，興味

図Ⅰ2-1　回答者の続柄



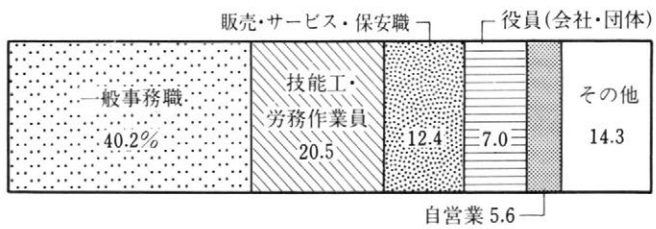
N＝717

図Ⅰ2-2　回答者の年齢層（父母）



N＝718

図Ⅰ2-3　父親の職業



ある論議のテーマとなろう。

最後に，居住地についてみておこう。割合の上で圧倒的に多くなっているのは「住宅や団地（いわゆるベッドタウンなども）」の69.9%であり，以下，「農業や漁業や林業などが盛んな地域」の11.3%，「商店などが多い商業地域」の10.5%と続いている（資料：基礎データ表を参照の事）。

子どもの人数・性別・幼稚園か保育所かの別に関するデータ等については，すべて本報告書巻末の「資料：基礎データ表」を参照されたい。

(2) 幼稚園教諭側の諸特性

今度は，就学前教育に関する専門職側の諸特性について概観しておこう。

まず，勤務先についてであるが，既に述べた通り，今回の調査対象は幼稚園教諭がその大部分を占めており（95.2%），保育所の保母は1割にも満たない比率である（4.8%）。最近，マスコミなどを通じ紹介されることも多くなった男性の保育者の割合はどうかというと，今回の場合には全体の僅かに6.8%となっており，女性保育専門職の93.2%に比べ，まだまだ少数派であるという現実がうかがえる。

公立と私立の比率を調べてみると，公立の園が34.1%であるのに対して，私立は65.9%となっている。これは，文部省などの全国データ（「学校基本調査」など）ともほぼ一致する数値である（以上のデータについては，資料：基礎データ表を参照の事）。

次に，年齢層および保育職経験年数についてみることにしたい（図Ⅰ②—4，図Ⅰ②—5）。

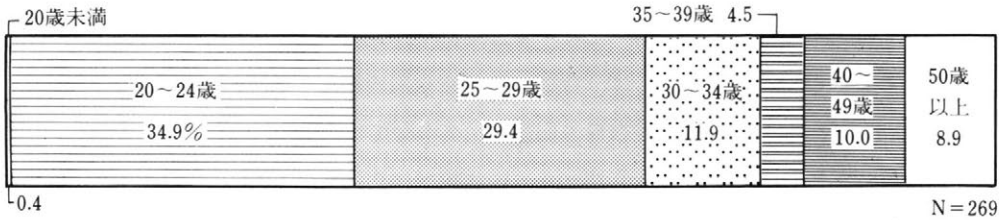
回答者269名についての年齢別内訳は，「20～24歳」が34.9%，「25～29歳」が29.4%，「30～34歳」が11.9%，「35～39歳」が4.5%，「40～49歳」が10.0%，「50歳以上」が8.9%などとなっており，「35～39歳」という層に比率の上で落ち込みがあることが理解できる。保育職自身の子育てが忙しい時期ということがその理由であろうか。

保育職に就いてからの経験年数については，「10年未満」が最も割合的に高く29.4%，次いで「5年未満」の19.7%，「3年未満」の18.2%となっている。「10年以上」の経験者が全体の4分の1程度しかいないところに，女性を中心とする保育職の職業的特色の1つが見出せるとも言えるだろう。保育職経験年数などは，保育職たちの就学前教育に対する意識のあり方に比較的大きな影響を与えるだろうとわれわれは予測していたが，この点についての報告は後程なされるはずである。

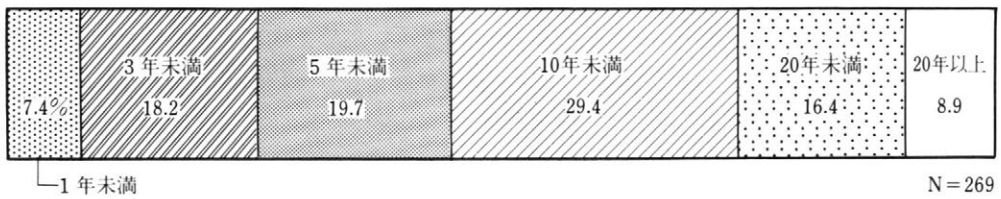
担当する幼児の年齢，および自分自身の子どもの有無に関するデータについては，巻末「資料：基礎データ表」を参照されたい。

また，最近，都市部の幼稚園で多く見かける「○○教室」といったような課外教育を実施している園は，今回の調査協力園については全体のおよそ1割であった。

図Ⅰ2-4　回答者の年齢層(保育職)



図Ⅰ2-5　保育職経験年数



2.　調査票の内容および具体的質問項目

次に，今回用いられた調査票の内容および具体的な質問項目等について説明しておきたい。

調査票は，父母を対象とするものと幼稚園教諭を対象とするものの2種類を作成したが，共通する質問項目も多い。

(1)　父母を対象とする調査票の内容と具体的な質問項目

まず，子育てに関する基本的な意識を把握するために，「子どもの能力や才能の伸し方に関する一般論的な認識」「子どもの様々な側面に関する幼児期における教育の必要性認識」および「家庭および幼稚園・保育所との就学前教育における役割分担の認識」をたずねた。

次に，家庭での子育ての実態を明らかにするため，「負担することが可能な就学前教育費の限度額」「子どもとのふれあいの時間や機会の実態とそれについての評価」「いわゆる『おけいこごと』の実態とそれについての評価」および「家庭における各種の指導・注意の実態とそれについての評価」をたずねた。

さらには，幼稚園や保育所で保育専門職たちによっておこなわれている教育や保育に対する評価，および今後への期待についての質問をした。

(2)　幼稚園教諭を対象とする調査票の内容と具体的な質問項目

まず，就学前教育についての専門職の立場からする子どもの教育・保育に関する基本的な意識を把握するために，「子どもの能力や才能の伸ばし方に関する一般的な認識」「子どもの様々な側面に関する幼児期における教育の必要性認識」「家庭および幼稚園・保育所との就学前教育における役割分担の認識」および「いわゆる家庭での『おけいこごと』に関する意見」をたずねた。

次に，家庭でおこなわれている教育に対する評価，および今後への期待についてたずね，その上で今度は，幼稚園や保育所で自らがおこなっている教育や保育に対する自己評価および今後への姿勢に関する質問をさせていただいた。

調査票そのものの文言については，各章および巻末の資料などを参照されたい。

(3) 今次調査でとりあげた就学前教育の内容領域について

一口に就学前教育と言っても，当然，その内容領域は多種多様である。今次の調査票では，作成当時の「幼稚園教育要領」に掲げられていたいわゆる六領域，すなわち，健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画製作，あるいは「保育所保育指針」に示されている指導項目などを参考としながら，以下の11の項目をもって就学前教育の内容を代表させることとした。なお，カッコ内は本調査報告書において紙幅の制限上便宜的に用いた略記法である。以下の報告を読むにあたり，参考としていただきたい。

「歯磨・洗顔・後かたづけ・挨拶などの基本的生活習慣を身につけさせること（基本的生活習慣)」

「風邪をひきにくい・骨を折りにくいなど健康で丈夫な体を作ること（健康な体)」

「ひらがなや簡単な計算など，基本的な知的能力を身につけさせること（知的能力)」

「絵や音楽などを見聞きして,美しいとか楽しいと感じられるような心を育てる事(情操性)」

「友達と仲よく遊べるというような社会性を育むこと（社会性)」

「はさみが使える・糊が使える・鉛筆で字が書けるなど，日常生活上の基礎的技能を身につけさせること（基礎的生活技能)」

「年少者やお年寄りをいたわるなど，基本的な道徳感覚を育てること（道徳的感覚)」

「けがをせずに遊具や友達と遊べるなど，基礎的な運動能力を身につけさせること（運動能力)」

「明るくて素直な性格を育むこと（明朗な性格)」

「少々のことにはへこたれないようながまんづよさを培うこと（忍耐力)」

「したいこと・してほしいことなどをきちんと言えるような，基本的言語能力を身につけさせること（基礎的言語能力)」

3. 本報告書の構成

この調査報告書は，以下の内容で構成されている。なお，カッコ内は執筆分担者である。

序論・生涯教育時代の幼児教育……（林部一二)
Ⅰ. 本研究の目的と方法……（久保田力)
Ⅱ. 家庭教育の実態と父母・保育職の意識……（藤井穂高)
Ⅲ. 就学前教育をめぐる父母・保育職の意識

1　能力や才能の伸ばし方に関する基本的な考え方
2　就学前期における教育の必要性の認識
3　家庭と幼稚園との役割分担意識……（以上まで久保田力）
4　家庭および園での教育に対する父母・保育職の意識
A　家庭教育に対する評価と期待……（石川洋子）
B　園での教育に対する評価と期待……（倉沢寿之）
Ⅳ．　まとめと今後の課題……（久保田力）
Ⅴ．　資料・基礎データ表……（米沢好子・飯村崇子・久保田力）

4．調査研究プロジェクトについて

ここで，この調査研究報告を生み出す母体となった研究プロジェクト・チームについて，蛇足ながら若干の説明を加えておきたい。

われわれは，(財)日本教材文化研究財団からの就学前教育に関する研究委託を受け，1986年12月，林部一二（帝京大学教授・財団専務理事）を責任者に，久保田力（帝京大学講師）をコーディネーターとして組織されたワーキング・グループである。研究メンバーとしては上記の2名の他，石川洋子（東京成徳短期大学助教授），倉沢寿之（尚美学園短期大学講師），藤井穂高（筑波大学大学院博士課程教育学研究科），米沢好子（前私立幼稚園教諭），飯村崇子（佐野市立城北小学校教諭）らが参加している。

プロジェクト発足後，およそ1年間は先行研究の収集と概観に基づく調査票作成作業にあて，1987年秋に予備調査，1988年はじめに本調査を実施した。本調査から得られたデータは，1988年9月に日本教育学会（名古屋大学）において発表されたほか，（財）日本教材文化研究財団の「研究紀要」第18号（1989．3）に久保田が中間報告として発表している。

（帝京大学講師　久保田力）

II　家庭教育の実態と父母・保育職の意識

幼児にとって，生活や活動の中心的な場はなんといっても父母の形づくる家庭であり，その中で幼児は自己を形成していく。そして，父母は子供の健やかな成長・発達を願いながら，意図的あるいは無意図的な教育を行う。

今日の家庭において，父母は，そうした教育（子育て）をどのように行い，また，それをどのように評価しているのだろうか。父母自らによる幼児の能力・才能の育成といった教育的活動については次章以降で詳しく取り上げられる。本章では，まず以下の３つの側面から家庭の教育（子育て）に迫りたい。

1.　父母と幼児の「ふれあい」度

子育ての中には，明確な教育的意図，例えば，情緒性や知的能力の育成といった意図をもたない働きかけがあり，幼児に接すること，ふれあうことによって，幼児が学び，それが教えることにつながることが多い。

本章では，まず，こうした父母と幼児との「ふれあい」の実態を取り上げ，その特徴を明らかにしたい。

2.　幼児の各種「おけいこごと」への参加

幼児の教育には，家庭教育，幼稚園や保育所での保育とともに，いわゆるおけいこごとも含まれる。次に，このおけいこごとと幼児について検討する。幼児がおけいこごとに通うことについては賛否両論あり，その是非は幼児教育の大きな問題の１つであるが，その前に，おけいこごとの実態を明らかにする必要があろう。幼児をもつ親はどのくらいおけいこごとに通わせているのか，また通わせる理由は何か，あるいは，通わせていないのならばその理由は何かなどの観点からおけいこごとの実態をみてみたい。

3.　幼児教育への「潜在的経済力」

幼稚園やおけいこごとに通わせるにせよ，本やおもちゃを買い与えるにせよ，教育にはいろいろと費用のかかる面があるが，親たちはどの程度の出費を覚悟しているのだろうか。ここでは家庭における子育て（教育）を金銭的側面からみてみたい。

1　父母と幼児との「ふれあい」の機会

家庭生活の中で，父母は幼児との「ふれあい」の時間・機会をどのくらいもっているのだろうか。また，そうした現状を父母はどのように自己評価しているのだろうか。

本調査では,「ふれあい」の機会として，①「一緒にお風呂に入ること」,②「一緒に朝食を食べること」,③「一緒に夕食を食べること」,④「一緒に遊ぶこと」,⑤「本（絵本）を読んであげ

ること」,⑥「一緒に音楽を聴いたり歌を歌ったりすること」,⑦「一緒に買い物など外出すること」の7項目を設定した。そして，実態については，5段階の尺度（①「ほとんど毎日」,②「2・3日に1度」,③「1週間に1度くらい」,④「1か月に1度くらい」,⑤「ほとんどない」）で，それについての感想では4段階の尺度（①「十分だと思う」,②「十分ではないが満足している」,③「もう少し多いとよいと思う」,④「足りないと思う」）で「ふれあい」の度合いを尋ねてみた。

以下では，はじめに，母親と父親を分けて，それぞれの「ふれあい」度を検討する。子供にとっては同じく親であっても，母親と父親では，子育てにおいて果たす役割が，実際として，かなり異なるからである。続いて，母親と父親のふれあい度を比較し，それぞれの特徴を明らかにしたい。

1.　お母さんの「ふれあい」度

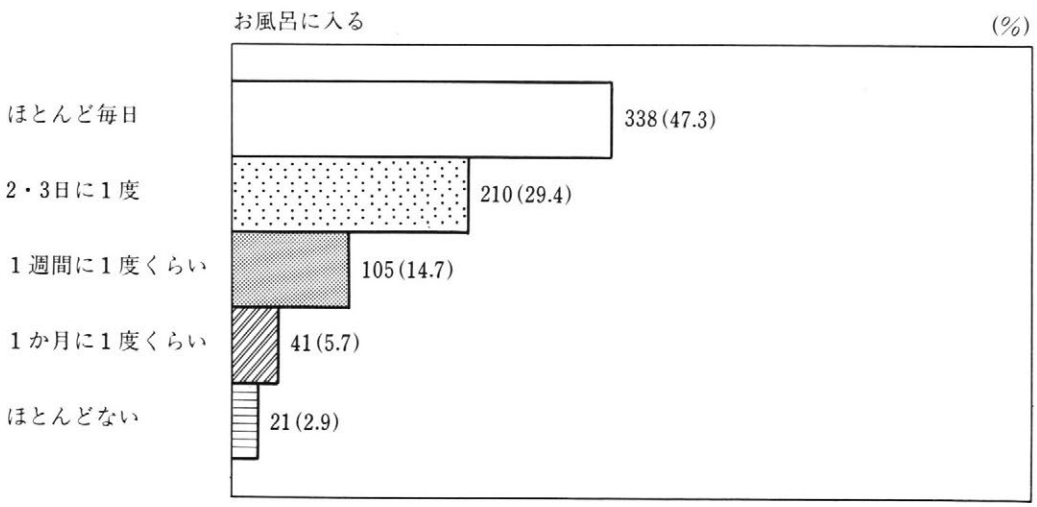
(1)　母親のふれあいの実態

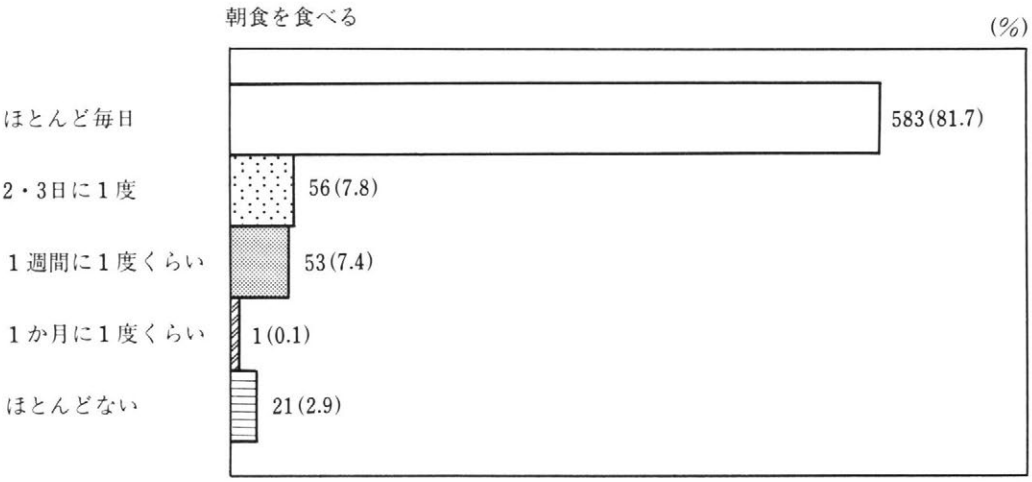
幼児にとって，母親（あるいは母親的存在）が不可欠な存在であることは言うまでもなかろう。家庭での子育てにおいて母親の果たす役割はきわめて大きい。

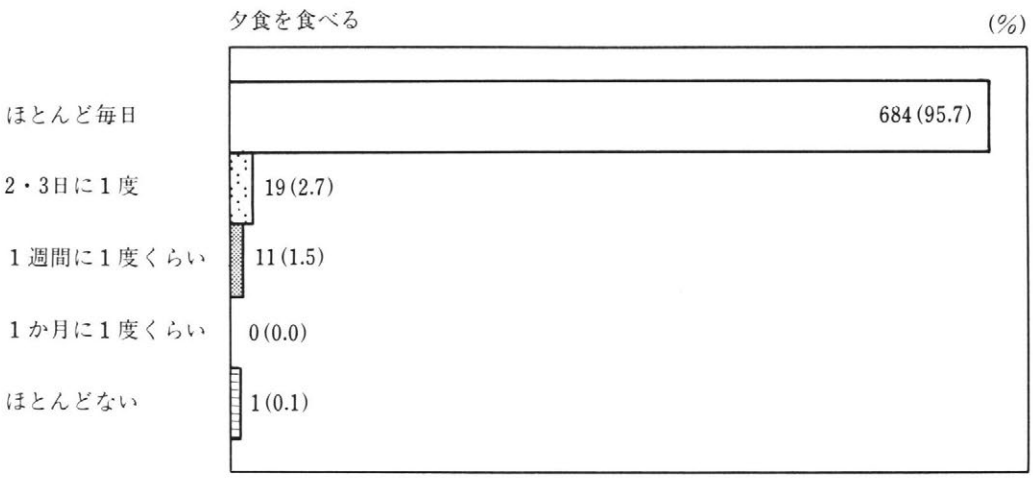
しかし，今日，母親が仕事やパートタイムで働いている家庭がかなり増加しているのも事実である。こうした中で，母親は子供とどのくらいふれあいの機会・時間をもっているのだろうか。

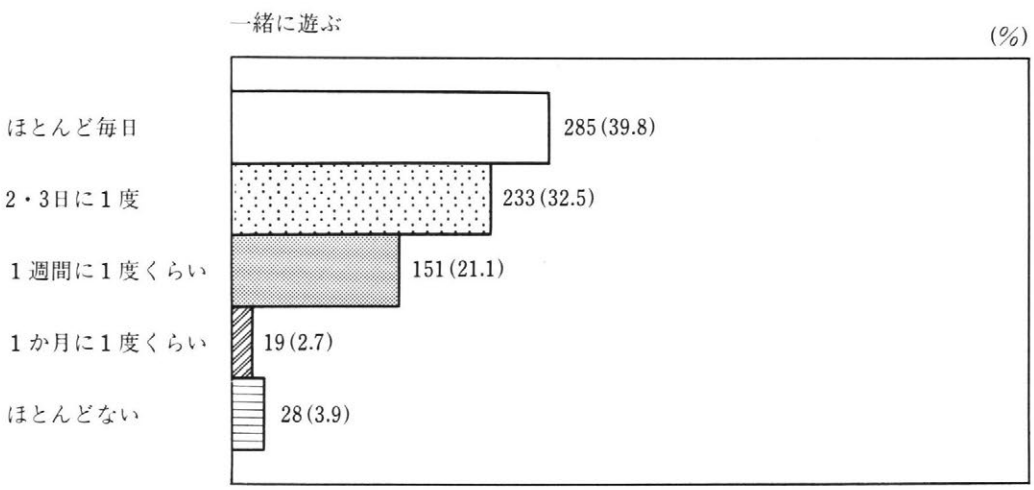
各項目別に棒グラフに表してみると以下のようになる。

図II[1]-1　お母さんのふれあいの実態

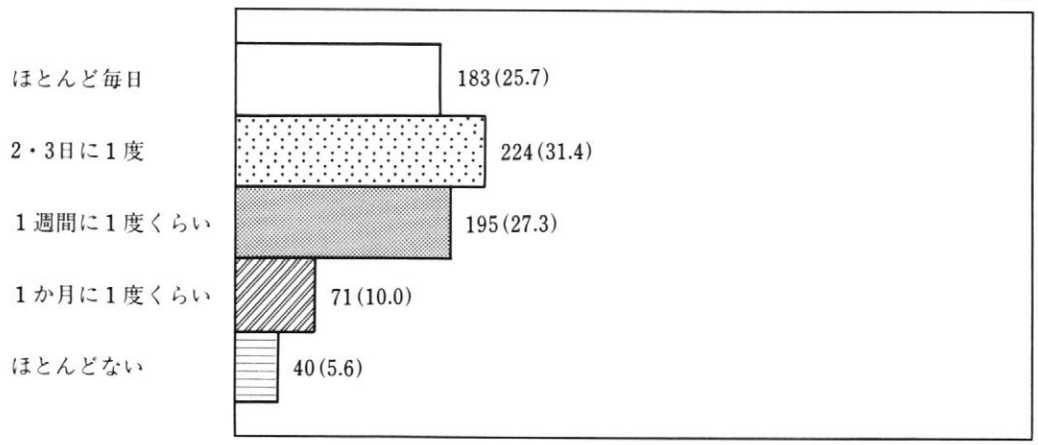



朝食を食べる
(%)
ほとんど毎日
583(81.7)
2・3日に1度
56(7.8)
1週間に1度くらい
53(7.4)
1か月に1度くらい
1(0.1)
ほとんどない
21(2.9)

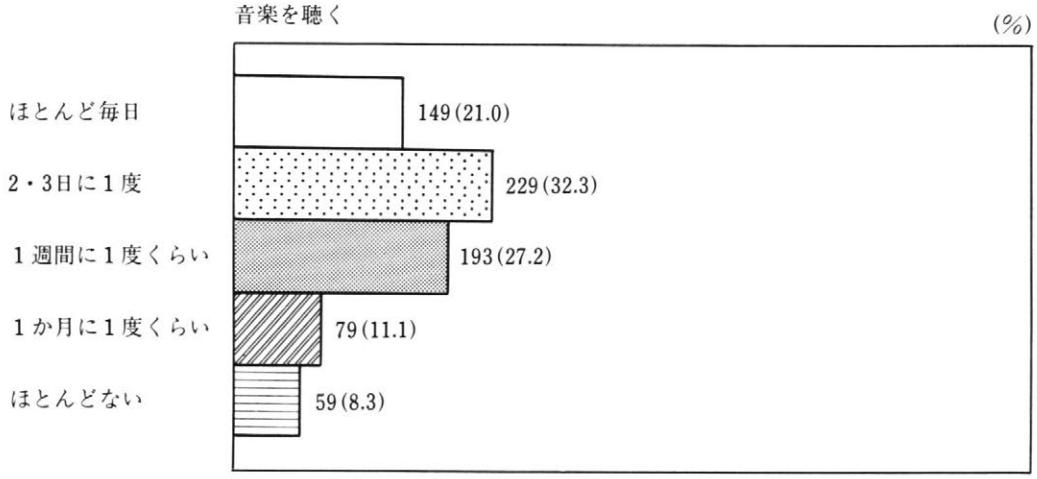

夕食を食べる
(%)
ほとんど毎日
684(95.7)
2・3日に1度
19(2.7)
1週間に1度くらい
11(1.5)
1か月に1度くらい
0(0.0)
ほとんどない
1(0.1)


一緒に遊ぶ
(%)
ほとんど毎日
285(39.8)
2・3日に1度
233(32.5)
1週間に1度くらい
151(21.1)
1か月に1度くらい
19(2.7)
ほとんどない
28(3.9)

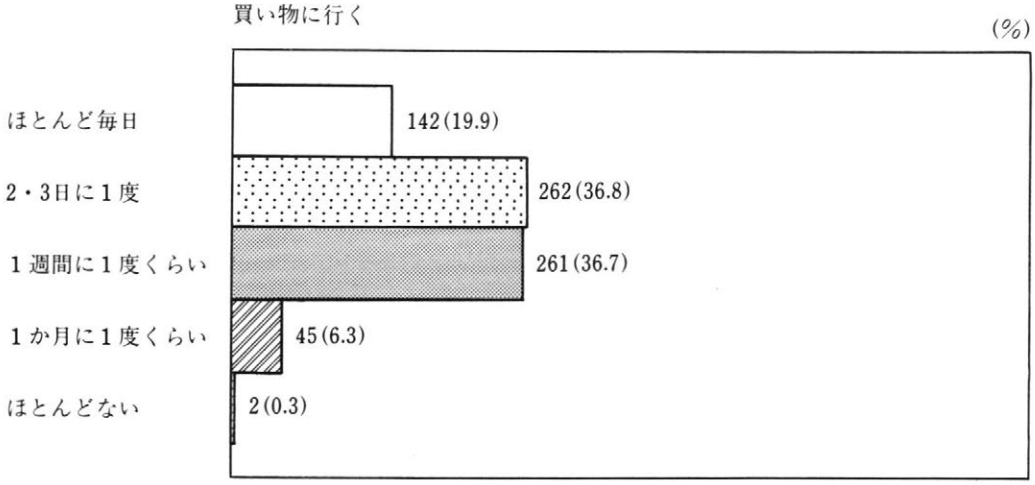
本(絵本)を読む



音楽を聴く



買い物に行く



こうしてグラフを見てみると，これらの項目は，ふれあいの度合いによって，３つのグループに分類できるように思われる。

もっとも度合いの高い項目は,「一緒に朝食を食べる」,「夕食を食べる」,「お風呂に入る」のグループである。「ほとんど毎日」と答える母親の割合が，朝食81.7%，夕食95.7%，お風呂47.3%ときわめて高い。基本的生活習慣に関わるところでは，母親がきちんとおさえているといってよいだろう。

次に度合いの高いものは,「一緒に遊ぶ」という項目である。「ほとんど毎日」と答えるものが39.8%,「２・３日に１度」が32.5%と，前のグループと比べるとやや劣るが，やはりかなり高い。幼児にとっては遊びが仕事であり，遊びを通して成長・発達を遂げていくが，母親の８割は，２・３日に１度以上は，幼児の遊び相手になっている。

第３のグループは,「本（絵本）を読む」,「音楽を聴く」,「買い物など外出する」といった項目である。遊びに比べて，本を読む，音楽を聴くといったことは，より教育的色彩が強いと言えるが，本を読むでは「２・３日に１度」31.4%,「１週間に１度くらい」27.3%，音楽を聴くでも，それぞれ32.3%および27.2%というように，２・３日に１度，１週間に１度くらいが中心となる。買い物に行くでも，それぞれ36.8%，36.7%と同じ程度である。

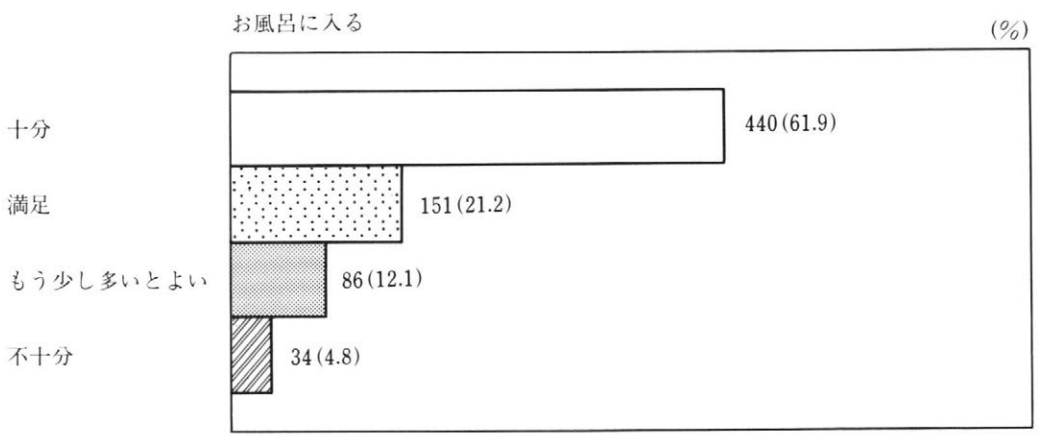
こうしてみると，平均的母親像は，ほとんど毎日，一緒に朝食，夕食をとり，お風呂に入り，２・３日に１度以上は一緒に遊び，本を読んだり，歌を歌ったり，外出するのは，２・３日に１度あるいは１週間に１度くらいということになる。

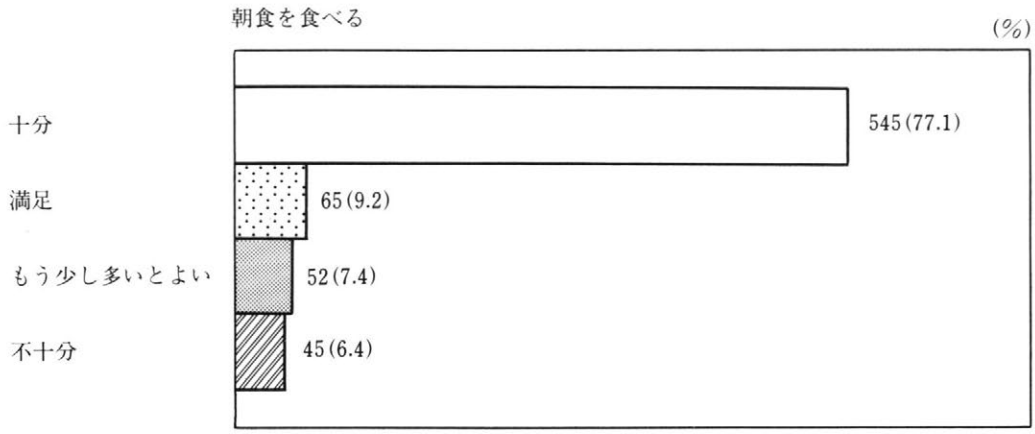
(2)　実態についての感想

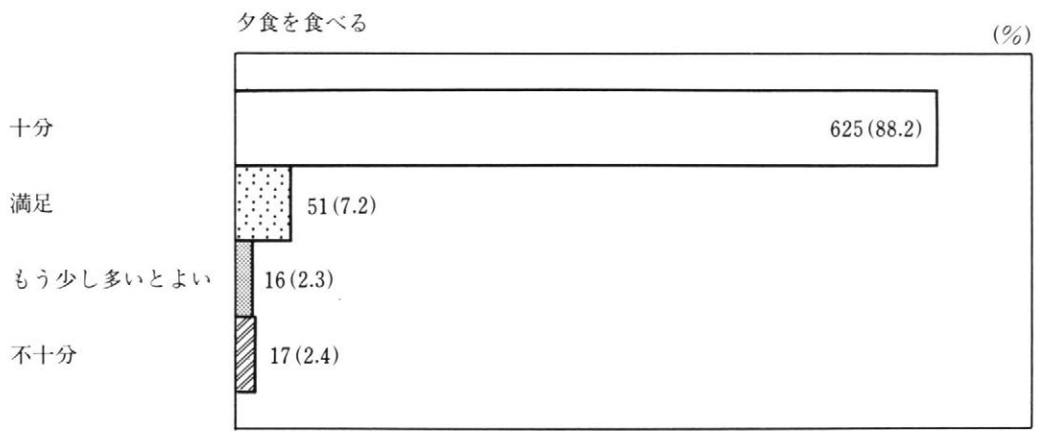
それでは，母親は，自分のそうしたふれあい度をどう自己評価しているのだろうか。

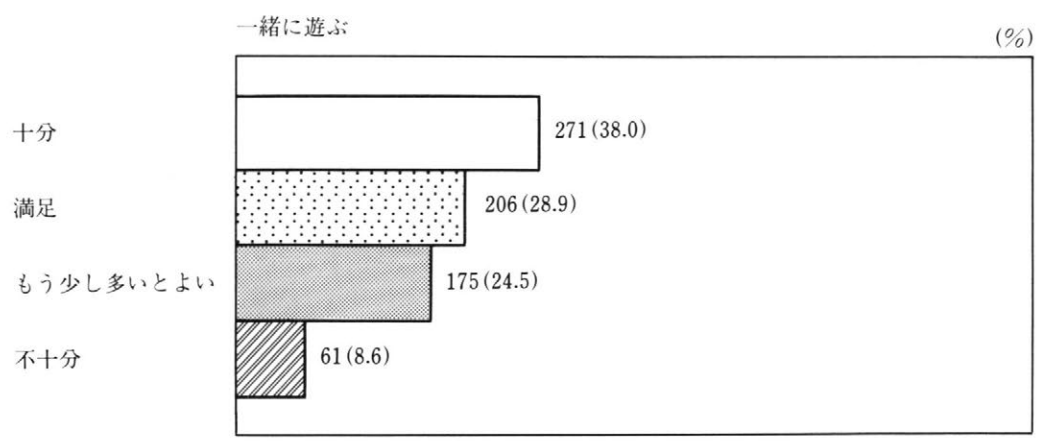
各項目についての評価は，以下のようになっている。

図II[1]-2　お母さんのふれあいについての評価

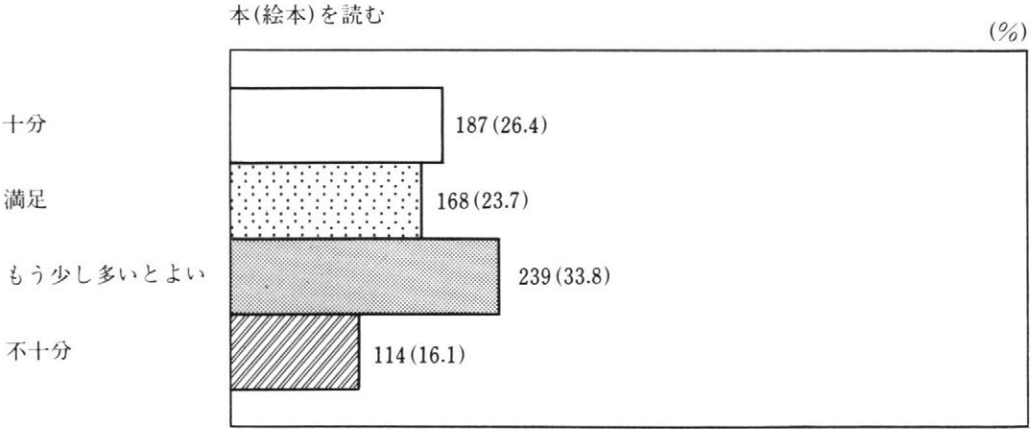



朝食を食べる
(%)
十分
545(77.1)
満足
65(9.2)
もう少し多いとよい
52(7.4)
不十分
45(6.4)

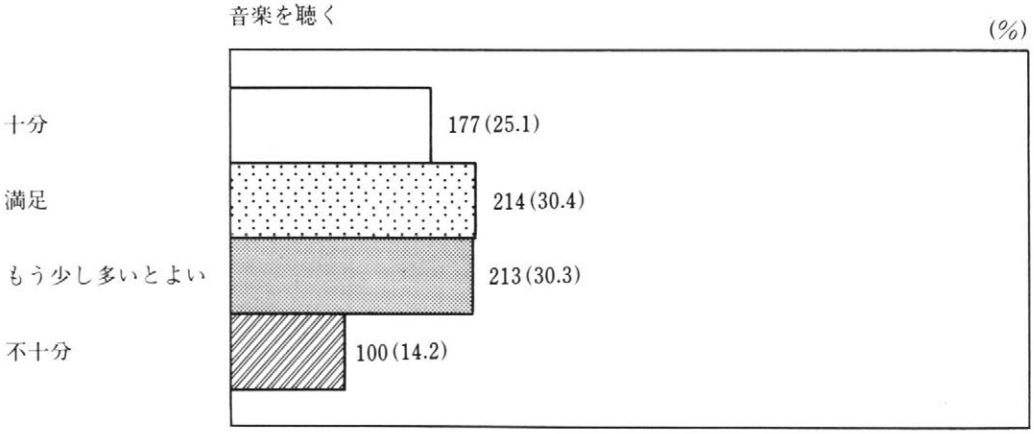

夕食を食べる
(%)
十分
625(88.2)
満足
51(7.2)
もう少し多いとよい
16(2.3)
不十分
17(2.4)


一緒に遊ぶ
(%)
十分
271(38.0)
満足
206(28.9)
もう少し多いとよい
175(24.5)
不十分
61(8.6)

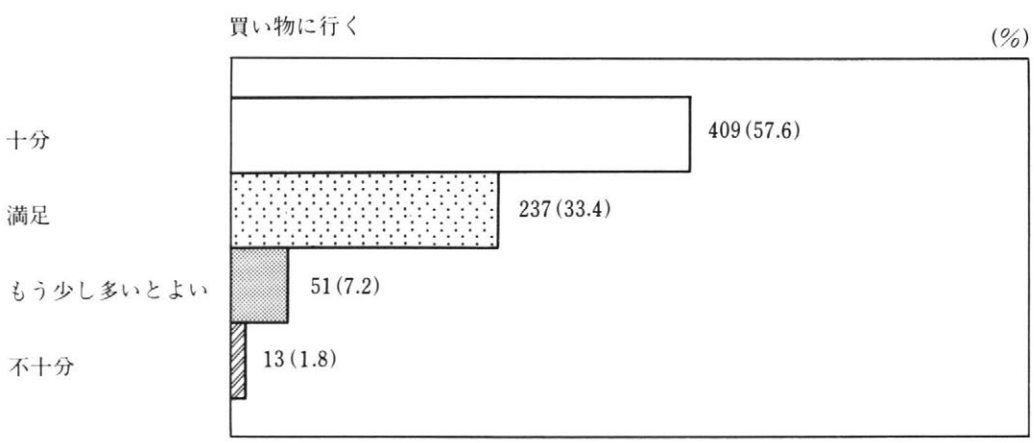
本(絵本)を読む



音楽を聴く



買い物に行く



「十分である」と答えたものが多かったのは,「お風呂に入る」61.9%,「朝食を食べる」77.1%,「夕食を食べる」88.2%といった項目である。そして,「一緒に遊ぶ」では「もう少し多いとよいと思う」が24.5%と高くなり,「本を読む」や「音楽を聴く」では30%を超え,「十分である」と答えるものを上回る。

全体的傾向として，実態において,「ほとんど毎日」と答えたものが多い項目ほど，評価においても,「十分である」と答えるものが多くなる。

逆に，ふれあいの度合いが高くない項目については,「もう少し多いとよいと思う」あるいは「足りないと思う」と答えるものが増えるというように，実態とその評価とは対応関係にあると言える。

2.　お父さんの「ふれあい」度

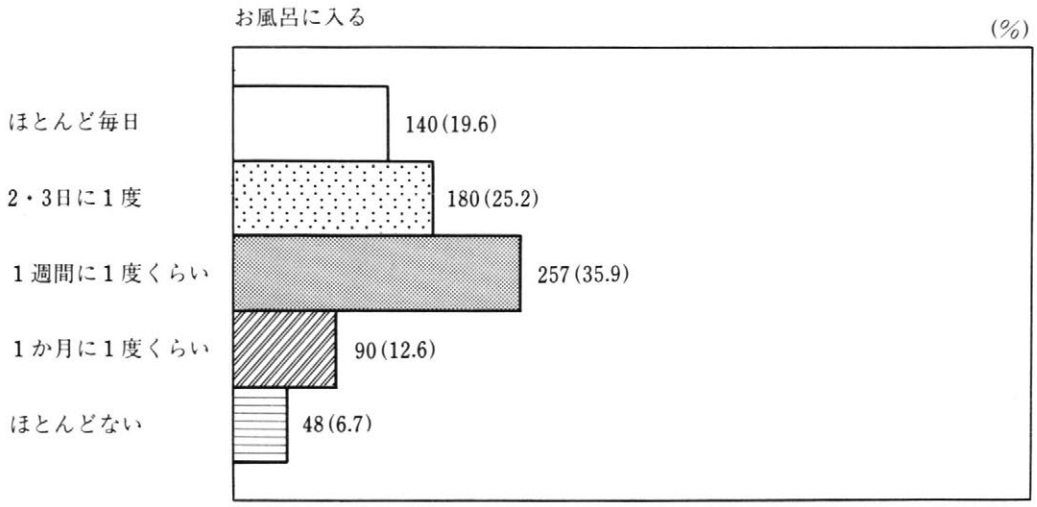
(1)　父親のふれあいの実態

一方，父親は，幼児とどのくらいふれあいの機会をもっているのだろうか。

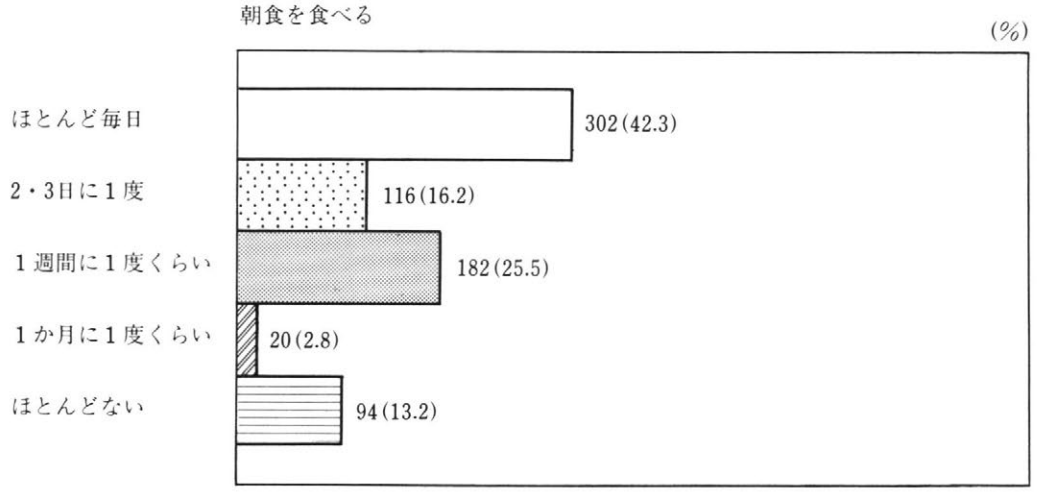
近頃は「主夫」なども現れてきたが，大多数の父親は家庭の外で働いており，母親と比べると，やはり，子供と接する時間も機会も限定される。(本調査の対象者も,「自営業」などの家庭で仕事をするものは10%に満たない。フェイスシートを参照されたい。)

父親のふれあい度について，各項目別にまとめると以下のようになる。

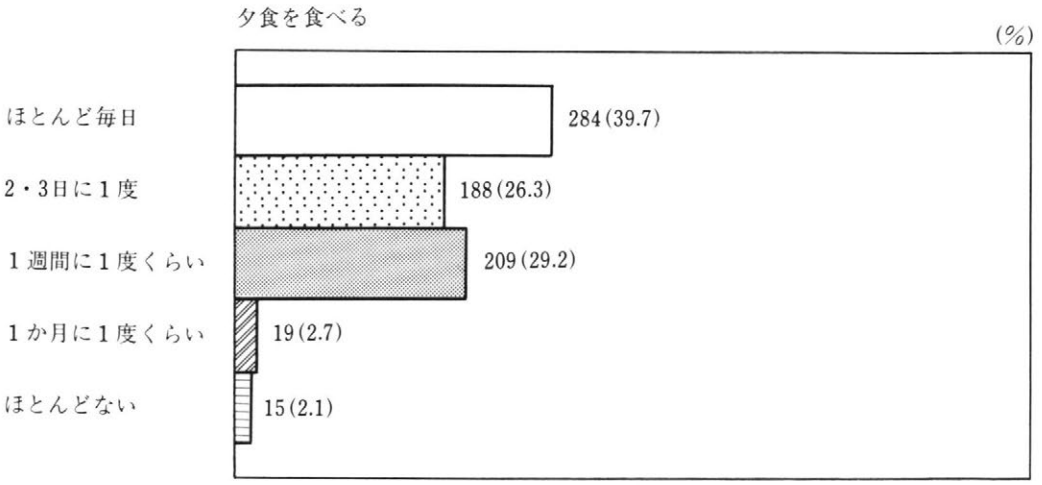
図II[1]-3　お父さんのふれあいの実態



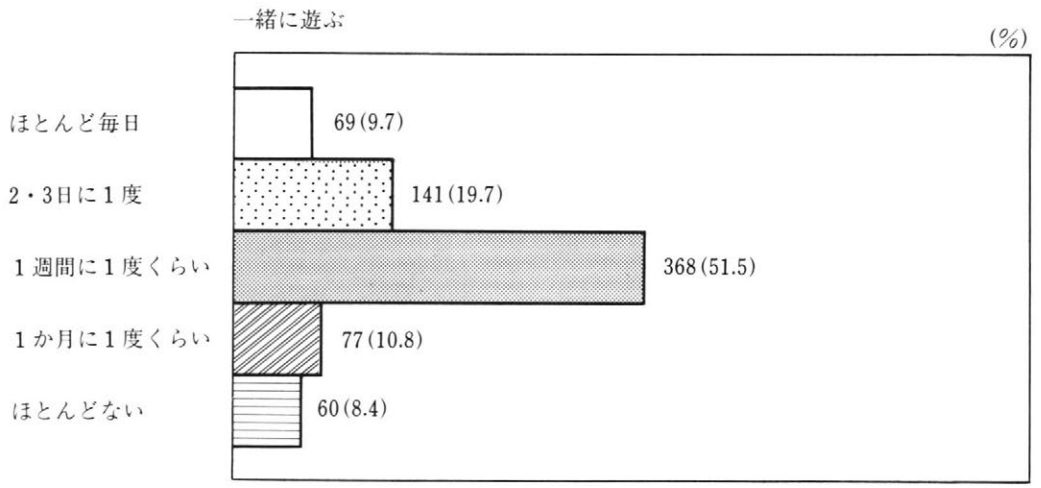
朝食を食べる



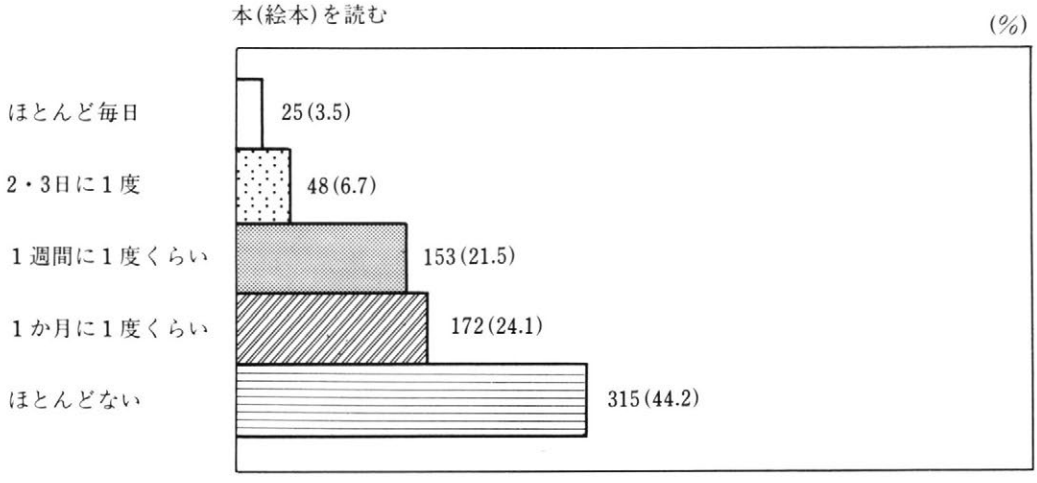
夕食を食べる



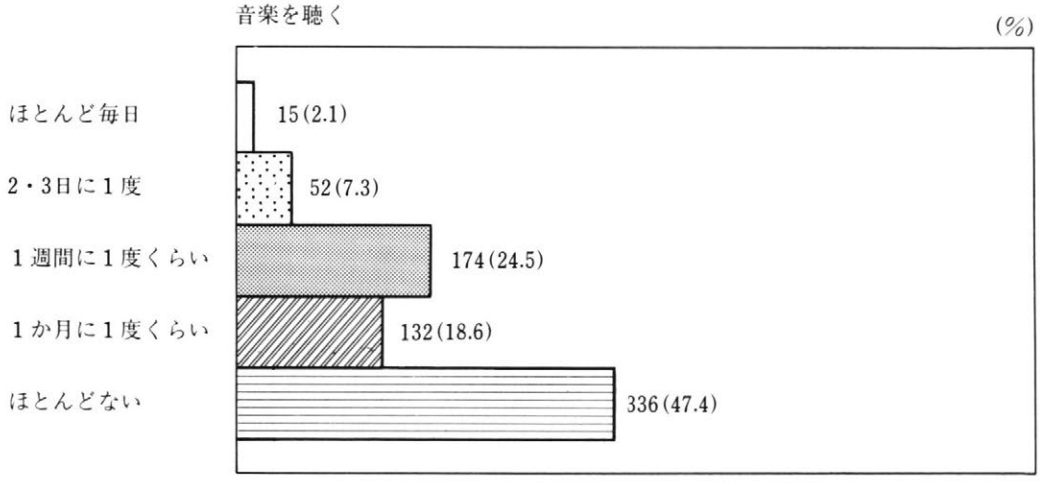
一緒に遊ぶ



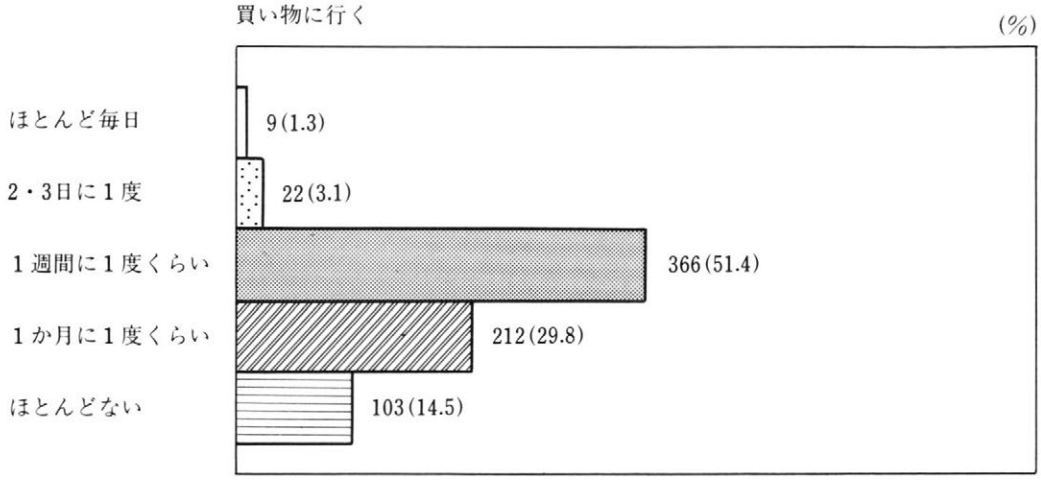
本(絵本)を読む



音楽を聴く



買い物に行く



こうしたグラフから，母親と同様に，度合いによって，３つのグループに分類することが可能である。

第１のグループは,「朝食を食べる」,「夕食を食べる」といった食事に関する項目である。「ほとんど毎日」が，朝食で42.3%，夕食で39.7%,「２・３日に１度」が，同じく，16.2%，26.3%で合計するとそれぞれ６割になり，主流を占める。しかし，朝食に関しては,「１か月に１度」以下も計16%ほどおり，夕食のそれが計５%以下であるのに比べ，目を引く。

第２のグループは,「一緒に遊ぶ」および「外出する」の項目であり,「１週間に１度くらい」が，それぞれ51.5%，51.4%と，ともに半数を超えている。「１週間に１度」とは，おそらく，日曜日であろうが，父親もその程度は幼児の相手になっているのである。また,「お風呂に入る」でも,「１週間に１度くらい」が35.9%でもっとも多い。

上記２グループに対し，第３のグループは，度合いと回答者数がきれいに反比例する傾向をもつもので,「本を読む」と「音楽を聴く」がそれに該当する。「本を読む」では,「１か月に１度くらい」および「ほとんどない」で計68%,「音楽を聴く」でも，同じく計66%に達している。

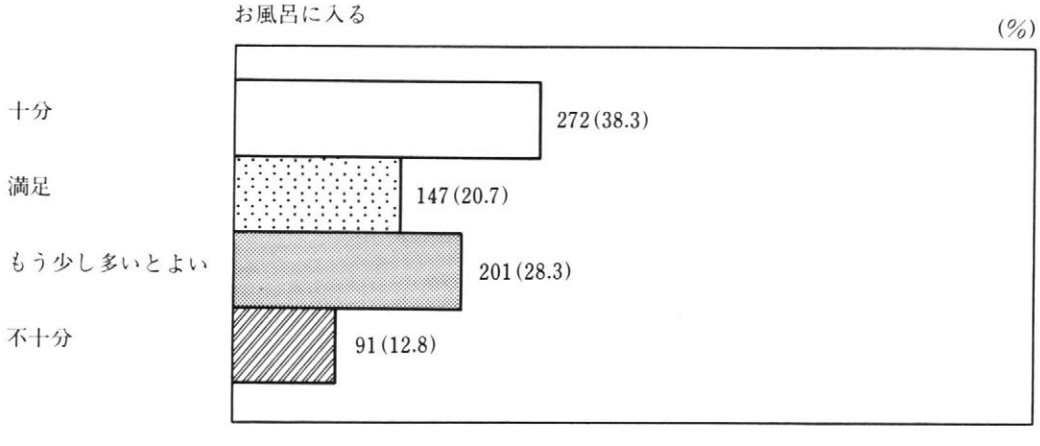
こうしてみると，平均的父親像は，食事は２・３日に１度以上は一緒にするが，遊びや外出となると，１週間に１度程度，本を読んだり，音楽を聴いたりはほとんどしない，ということになろう。

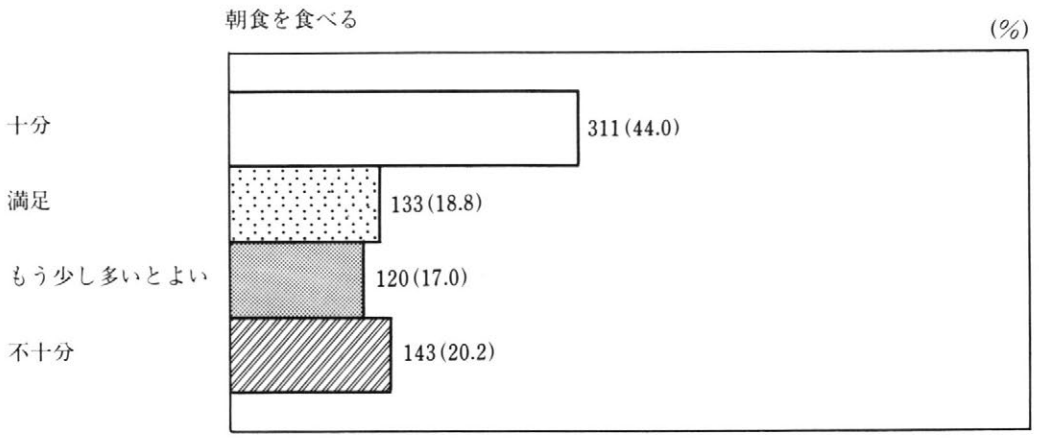
(2) 実態についての感想

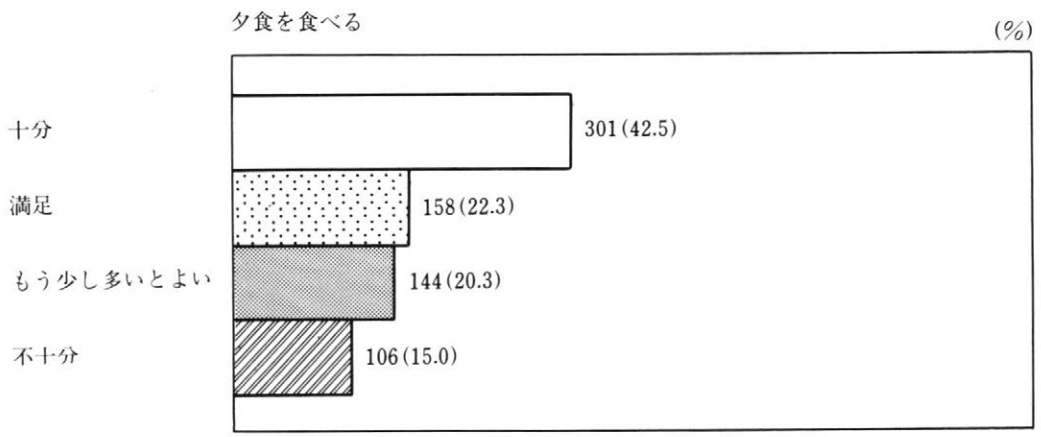
それでは，父親のこうしたふれあい度はどのように評価されているのだろうか。本調査の対象は，フェイスシートから明らかなように，98%が母親であるから，ここでは，母親による父親評価ということになる。

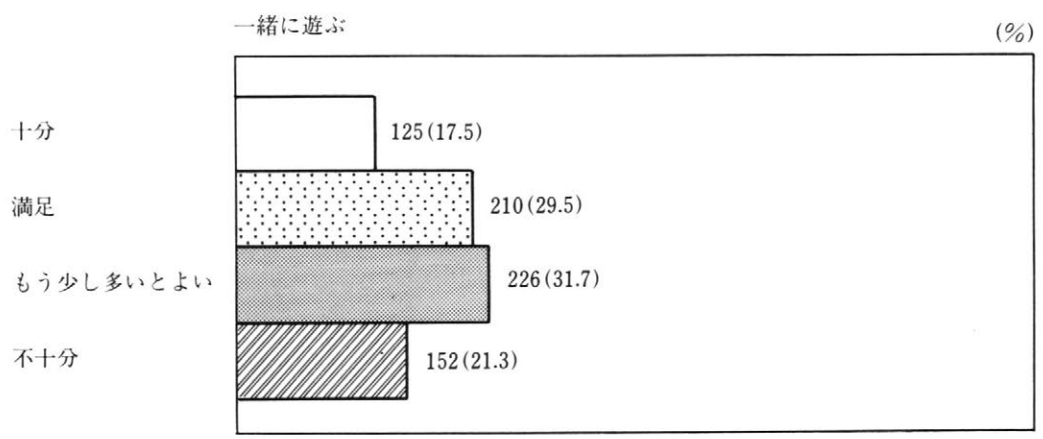
各項目別の評価は以下のようである。

図II[1]-4　お父さんのふれあいについての評価

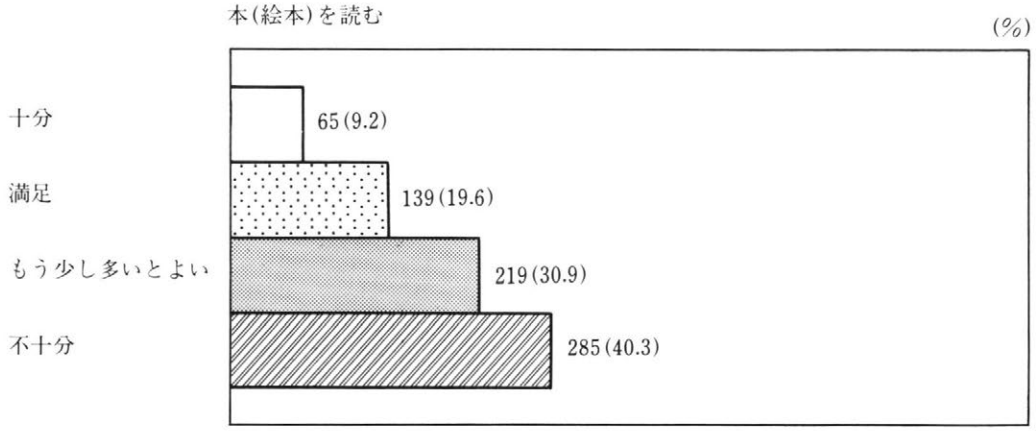



朝食を食べる
(%)
十分
311(44.0)
満足
133(18.8)
もう少し多いとよい
120(17.0)
不十分
143(20.2)

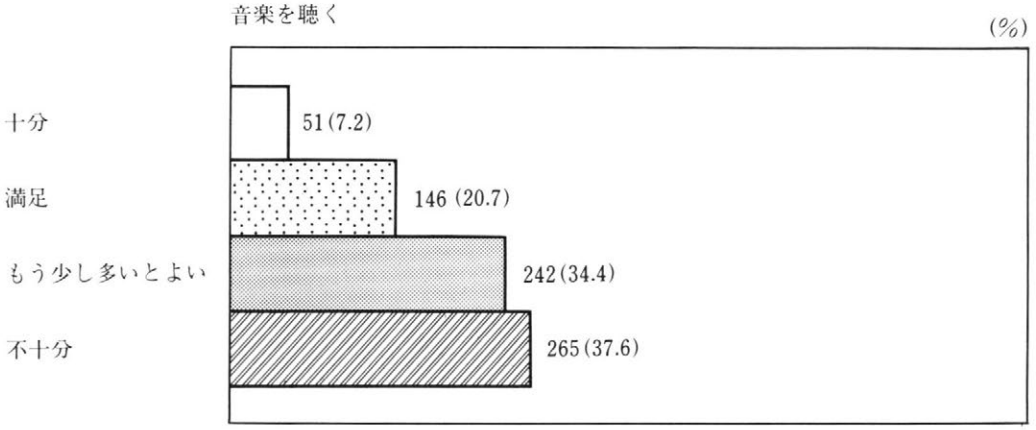

夕食を食べる
(%)
十分
301(42.5)
満足
158(22.3)
もう少し多いとよい
144(20.3)
不十分
106(15.0)


一緒に遊ぶ
(%)
十分
125(17.5)
満足
210(29.5)
もう少し多いとよい
226(31.7)
不十分
152(21.3)

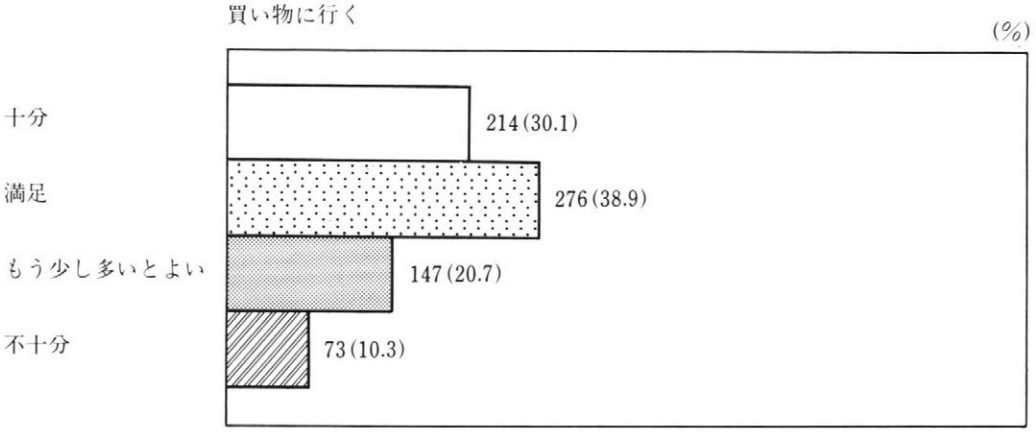
本(絵本)を読む



音楽を聴く



買い物に行く



母親による自己評価と同様に，父親に対する評価でも，実態との対応関係を認めることができる。

例えば,「朝食」,「夕食」,「お風呂」の各項目で,「十分だ」とするものがそれぞれ44.0%，42.5%，38.3%ともっとも多い。しかし，父親の評価では,「十分だ」はこの3項目のみであり,「買い物に行く」で「十分ではないが満足している」が38.9%と多いのを除くと,「一緒に遊ぶ」,「本を読む」,「音楽を聴く」の各項目で,「もう少し多いとよい」あるいは「足りない」と評価されている。とくに「本を読む」では，4割の母親が足りないと考えている。

3.　母親と父親との「ふれあい」度の比較

まず，実態から比較してみよう。

最初に指摘できることは，一見して明らかなように，母親と父親では，子供とのふれあいの機会や時間において，大きな開きがあるということである。家庭において，母親のみに幼児教育を任せること，あるいは，押しつけることの是非論は，また別に論じる必要があるが，実態として，両者の間には厳然たる開きがあるということである。

ほとんど毎日—ほとんどないという尺度で各項目をみるとき，全般的傾向として，母親が，ほとんど毎日，少なくとも，1週間に1度はしていることが，父親では，1週間に1度程度に減り，1か月に1度以下の項目もある。

項目別にみると，朝食や夕食などの食事に関しては，両親そろって，子供と一緒の家庭が多い。次いで，遊びや外出，あるいは，お風呂では，母親が幼児の相手になり，世話をし，父親は日曜日くらい。そして，本を読んだり，音楽を聴いたりとなると，母親の回数も減り，父親はほとんどしないということになる。

次に，評価について比較してみよう。

まずいえることは，母親の自己評価に比べて，父親に対しては,「十分だ」と評価するものの割合がかなり低いということである。「お風呂」,「朝食」,「夕食」の各項目で，それぞれ6割，7割，8割の母親が「十分」と自己評価しているのに対し，父親に対する評価はせいぜい4割程度である。

さらに，母親に対する評価では,「足りない」が一番多い項目は1つもなかったのに対し，父親では,「本を読む」,「音楽を聴く」の各項目でもっとも多い。

ところで，先に，ふれあいの度合いの高いほど評価も高いと述べたが，父母の各人においても，ふれあいの機会が多いものほど，自己評価が高いといえる。その1例として,「一緒に遊ぶ」の実態と感想のクロスを次にあげる。

表II㊀－1　「一緒に遊ぶ」日数×感想（お母さん）

		感想				合計 N (%)
		十分	満足	もう少し多いとよい	不十分	
日数	ほとんど毎日	221 (77.8)	49 (17.3)	12 (4.2)	2 (0.7)	284 (100.0)
	2・3日に1度	38 (16.5)	109 (47.2)	79 (34.2)	5 (2.2)	231 (100.0)
	1週間に1度くらい	10 (6.6)	45 (29.8)	72 (47.7)	24 (15.9)	151 (100.0)
	1か月に1度くらい	1 (5.3)	3 (15.8)	7 (36.8)	8 (42.1)	19 (100.0)
	ほとんどない	1 (3.6)	0 (0.0)	5 (17.9)	22 (78.6)	28 (100.0)

DF＝12

P≦.01

「一緒に遊ぶ」日数×感想（お父さん）

		感想				合計 N (%)
		十分	満足	もう少し多いとよい	不十分	
	ほとんど毎日	58 (84.1)	8 (11.6)	2 (2.9)	1 (1.5)	69 (100.0)

日数	2・3日に1度	40 (28.8)	74 (53.2)	24 (17.3)	1 (0.7)	139 (100.0)
	1週間に1度くらい	24 (6.5)	116 (31.6)	163 (44.4)	64 (17.4)	367 (100.0)
	1か月に1度くらい	2 (2.6)	11 (14.3)	28 (36.4)	36 (46.8)	77 (100.0)
	ほとんどない	1 (1.7)	1 (1.7)	8 (13.3)	50 (83.3)	60 (100.0)

DF＝12

P≦.01

母親，父親ともに，ふれあう機会の多いものほどよい評価を下している。これは遊びのみならず，他の項目でもすべて同じ傾向が認められる。当然といえば当然かもしれないが，数字的に確認しておくことも必要であろう。

2 幼児の各種「おけいこごと」への参加

次に幼児の各種「おけいこごと」への参加状況についてみてみよう。

本調査では，「おけいこごと」の種類として，①「絵画教室」,②「習字」,③「オルガン・ピアノなど(音楽関係)」，④「知能教室・学習塾（知的教育関係)」，⑤「スイミングスクール・体操教室（体育関係)」，⑥「家庭用学習教材」,⑦「その他」を設けた。そして，父母には，各種類ごとに，①参加の有無，通わせている(いた)父母には，②週当たりの回数，③通わせている(いた）期間，④通わせようと考えた理由，⑤子供の反応，⑥今後の予定，⑦やめた場合はその理由を聞き，通わせたことのない親には，⑧通わせない理由，⑨今後の予定を尋ねた。また，保育職に対しても，幼児の「おけいこごと」への参加のあり方を質問した。

以下では，その主な内容について紹介する。

1. 参加の有無

各種別に「おけいこごと」をみていく前に，全体的な参加状況をみてみよう。

何らかの「おけいこごと」に通ったことのあるものは，どのくらいいるのだろうか。「おけいこごと」の調査項目に回答した724人の父母のうち，各種の「おけいこごと」への参加の項に

1つでもマルをつけたものは502人，1つもマルをつけなかったものは222人である。パーセントに直すと，前者が69%，後者が31%となる。この数値はかなり高いとみてよいのではないか。幼児の約7割は，何らかの「おけいこごと」に通っている（いた）ことになる。

それでは，種類ごとの参加状況をみてみよう。それが表II②—1である。

表II②—1　おけいこごとへの参加者数

(%)

	現在通わせている	通わせていたがやめた	通わせたことなし	合計
1. 絵画	55 (8.1)	9 (1.3)	618 (90.6)	682 (100.0)
2. 習字	66 (9.6)	5 (0.7)	617 (89.7)	688 (100.0)
3. 音楽関係	206 (29.6)	17 (2.4)	473 (68.0)	696 (100.0)
4. 知育関係	47 (6.8)	12 (1.7)	630 (91.4)	689 (100.0)
5. 体育関係	202 (28.8)	41 (5.8)	459 (65.4)	702 (100.0)
6. 家庭用学習教材	177 (25.8)	38 (5.5)	472 (68.7)	687 (100.0)
7. その他	39 (88.6)	5 (11.4)		44 (100.0)

これによると，「通わせている」あるいは「使っている」と答えたものがもっとも多いのは，オルガン・ピアノなどの音楽関係(206人，29.6%)，スイミングスクールなどの体育関係（202人，28.8%)，そして家庭用学習教材（177人，25.8%）の順となっている。これらは，「通わせて（使

って）いたが，やめた」をあわせると，すべて30%を超え，3割以上のものが参加・利用の経験をもつことになる。この数値をどの程度一般化できるかは検討の余地を残すが，かなり高い数値であることは間違いない。

反対に，参加の割合が低いものとしては，学習塾などの知育関係（47人，6.8%），絵画（55人，8.1%），習字（66人，9.6%）などがあげられよう。

以下では，まず，「通わせている」と答えた親の回答から取り上げる。

2.「おけいこごと」の回数

通わせているものは，1週間にどのくらい通わせているのだろうか。週当たりの回数をまとめたものが表II②—2である。御覧の通り，週1度というものが多数であり，知育関係と体育関係では，週2回というものもかなりいる（それぞれ38.3%と28.9%）。

表II②—2　週当たり回数

(%)

	1回	2回	3回	4回	5回	合計
1. 絵画	47 (74.6)	10 (15.9)	5 (7.9)	1 (1.6)	0 (0.0)	63 (100.0)
2. 習字	72 (98.6)	0 (0.0)	1 (1.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	73 (100.0)
3. 音楽関係	220 (97.8)	5 (2.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	225 (100.0)
4. 知育関係	35 (58.3)	23 (38.3)	1 (1.7)	1 (1.7)	0 (0.0)	60 (100.0)
5. 体育関係	164 (68.6)	69 (28.9)	3 (1.3)	2 (0.8)	1 (0.4)	239 (100.0)
6. その他	37 (86.0)	6 (14.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	43 (100.0)

（注　家庭用学習教材については，週当たり回数という質問をしていないので，省略してある。）

3. 通わせる理由

それでは，通わせている親は，主にどのような理由により通わせているのか。

ここでは，その理由として，①「子供本位（子供が通いたいと言い出したから)」，②「才能・能力(子供の能力・才能を伸ばそうと思ったから)」，③「友達(子供の友達が通っていたから)」，④「しつけ（子供のしつけのことを考えて)」，⑤「健康・体力（子供の健康や体力づくりのことを考えて)」，⑥「友達見つけ（友達を見つけるため)」，⑦「その他」の選択肢を用意した。

その結果をまとめたのが表II②—3である。(回答は複数回答である。)

表II②—3　通わせる理由（複数回答）

(%)

	子供本位	才能・能力	友達	しつけ	健康・体力	友達見つけ	その他	計
1. 絵画	24 (36.4)	33 (50.0)	7 (10.6)	2 (3.0)	16 (24.2)	2 (3.0)	8 (12.1)	66
2. 習字	45 (62.5)	18 (25.0)	12 (16.7)	13 (18.1)	0 (0.0)	2 (2.8)	11 (15.3)	72
3. 音楽関係	130 (57.8)	118 (52.4)	13 (5.8)	7 (3.1)	0 (0.0)	9 (4.0)	26 (11.6)	225
4. 知育関係	24 (40.0)	36 (60.0)	3 (5.0)	6 (10.0)	0 (0.0)	4 (6.7)	10 (16.7)	60
5. 体育関係	83 (34.4)	28 (11.6)	17 (7.0)	7 (2.9)	200 (83.0)	12 (5.0)	21 (8.7)	241
6. その他	18 (40.9)	8 (18.2)	4 (9.0)	6 (13.6)	16 (36.4)	5 (11.4)	7 (15.9)	44

	子供の意志	才能・能力	友達	しつけ	その他	計
7. 家庭用学習教材	86 (41.1)	94 (45.0)	23 (11.0)	19 (9.1)	32 (15.3)	209

まず，積極的な教育意図をもつ「才能や能力を伸ばす」や「健康・体力づくり」からみてみよう。「才能・能力の伸長」と答えたものの多いのは，知育関係（36人，60.0%），音楽関係（118人，52.4%），絵画（33人，50.0%）で，ともに半数を超えており，これらは，才能・能力重視型とみてよいだろう。こうした観点からは，習字や体育関係の評価は低い。一方，「健康・体力」重視としては，なんといっても体育関係（200人，83.0%）が圧倒的であり，8割を超えている。

次に，「子供が通いたいと言い出したから」という子供本位派が多いものとしては，習字（45人，62.5%）および音楽関係（130人，57.8%）があげられ，子供本位派は他のおけいこごとでもすべて，3割を超えている。おけいこごとへの参加の理由としては，子供自身の意志も1つの大きな理由になるといえる。なお，習字については，「しつけ」(13人，18.1%）や「友達が通っているから」(12人，16.7%)と答えるものもいる。

全体的にみると，通わせる理由としては，子供の能力や体力の伸長をめざす親主導型として，絵画，知育関係，体育関係，親主導と子供本位がほぼ同数の音楽関係，そして，子供本位型として習字というように類型化することも可能であろう。家庭用学習教材については，「才能・能力」(94人，45.0%）と「子供本位」(86人，41.1%）をあげるものがほぼ同数である。

4.　子供の反応

次に，こうした理由により通っている（あるいは通わせられている）子供の反応を親の方はどう見ているのかに移ろう。

ここでは，①「楽しそう（とても楽しんで通っている〈いた〉ように思う)」，②「普通（とりわけ楽しいようでもつまらないようでもない〈なかった〉)」，③「つまらなそう（とてもつまらなそう・やめたがっている〈いた〉ように思えた)」，④「つまらない（実際に『つまらない』などと口にしている〈いた〉)」，⑤「その他」の5つから選んでもらった。

全体を通じていえることは，「楽しそう」と肯定的にとらえられていることである。習字と音楽関係で7割台，家庭用学習教材と体育関係で6割台，知育関係と絵画で5割台のものが「楽しそう」と答えている。逆に，「つまらなそう」と「『つまらない』と口にしている」を合計しても，10%に達するものは皆無である。

先の通わせる理由とつきあわせてみると，子供本位型といえる習字や音楽関係で「楽しそう」と答えるものが7割台ともっとも多く，一方，親主導型の知育関係と絵画では5割台に落ちている。子供の意志と反応が対応している結果と言えよう。しかし，いずれにしても，5割台は維持しているのであり，親にとって（子供当人にとってはいざ知らず)，おけいこごとは，「楽しそう」なことなのである。

表II②—4　子供の反応

(%)

	楽しそう	普通	つまらなそう	つまらない	その他	合計
1. 絵画	36 (55.4)	23 (35.4)	2 (3.1)	3 (4.6)	1 (1.5)	65 (100.0)
2. 習字	50 (71.4)	15 (21.4)	3 (4.3)	2 (2.9)	0 (0.0)	70 (100.0)
3. 音楽関係	159 (71.3)	49 (22.0)	7 (3.1)	1 (0.4)	7 (3.1)	223 (100.0)
4. 知育関係	34 (56.7)	16 (26.7)	2 (3.3)	3 (5.0)	5 (8.3)	60 (100.0)
5. 体育関係	149 (62.3)	58 (24.3)	17 (7.1)	6 (2.5)	9 (3.8)	239 (100.0)
6. 家庭用学習教材	134 (64.4)	68 (32.7)	3 (1.4)	1 (0.5)	2 (1.0)	208 (100.0)
7. その他	35 (83.3)	6 (14.3)	0 (0.0)	1 (2.4)	0 (0.0)	42 (100.0)

5.　通わせない理由

次に「通わせない」と答えた親の回答をみてみよう。

まず，通わせない親はなぜ通わせないのか，その理由を検討する。ここでは，①「必要なし(通わせる必要がないと思うから)」,②「適当なところなし(家の近くに適当なところがみつからないから)」，③「子供本位（子供が『通いたくない』と言うので)」,④「経済的負担（経済的な負担が大きくなるので)」，⑤「その他」の５つの選択肢を設け，尋ねてみた。その結果は以下の通りである。

表II②—5　通わせない理由（複数回答）

(%)

	必要なし	適当なところなし	子供本位	経済的負担	その他	合計
1. 絵画	374 (60.8)	102 (16.6)	83 (13.5)	116 (18.9)	60 (9.8)	615
2. 習字	341 (56.7)	82 (13.6)	89 (14.8)	74 (12.3)	73 (12.1)	601
3. 音楽関係	191 (41.6)	58 (12.6)	99 (21.6)	108 (23.5)	47 (10.2)	459
4. 知育関係	496 (80.1)	44 (7.1)	40 (6.5)	72 (11.6)	21 (3.4)	619
5. 体育関係	157 (35.2)	71 (15.9)	114 (25.6)	94 (21.1)	47 (10.5)	446
6. 家庭用学習教材	347 (74.9)	79 (17.1)	17 (3.7)	45 (9.7)	20 (4.3)	463

これをみると，通わせない理由は,「必要なし」,つまり，幼児にとってそうしたおけいこごとに通う必要がないという親の判断に基づくものが，すべての種類において，もっとも多い。しかし，その割合にはかなりのばらつきがみられる。知育関係(80.1%)と家庭用学習教材（74.9%）でもっとも多く，次いで，絵画（60.8%）と習字（56.7%),そして，音楽関係（41.6%）と体育関係（35.2%）の順である。知的教育に関する2つが，ともに必要なしと判断される割合が最も高いということは注目すべきであろう。

次に,「通いたくない」あるいは「使いたくない」という子供の意志によるところが大きいものとしては，体育関係（25.6%）と音楽関係（21.6%）があげられる。この回答は「必要なし」の回答と表裏の関係にあると言ってよいだろう。つまり，この2つのおけいこごとでは,「必要なし」とする回答がもっとも少なく，その必要を感じている親が多いとしても，子供の意志によって通わせていないということである。したがって,「必要なし」の割合が高い知育関係と家

庭用学習教材については，子供の意志の割合が低いが，これは，子供の意志を聞く前に，すでに親が必要なしと判断しているためであろう。

その他に「経済的負担」をあげるものも音楽関係（23.5%）と体育関係（21.1%）に多い。また,「適当なところがない」というものも，知育関係を除いて，10%から20%程度いる。

6. 通わせていない親の今後の予定

それでは，おけいこごとに通わせていない親は，このまま通わせないつもりなのだろうか。今後の予定については，①「予定なし（今のところ通わせる予定はない)」，②「大きくなったら（もう少し子供が大きくなったら通わせたいと思う)」，③「子供の意志（子供が『通いたい』と言い出したら通わせたいと思う)」，④「適当なところ（家の近くに適当なところが見つかったら通わせたいと思う)」,⑤「経済的余裕(経済的な余裕ができれば通わせたいと思う)」，⑥「その他」の6つから選択してもらった。

表II⑵－6　通わせていない親の今後の予定

(%)

	予定なし	大きくなったら	子供本位	適当なところ	経済的余裕	その他	合計
1. 絵画	338 (55.0)	48 (7.8)	188 (30.6)	21 (3.4)	16 (2.6)	3 (0.5)	614 (100.0)
2. 習字	198 (32.4)	191 (31.3)	177 (29.0)	24 (3.9)	13 (2.1)	8 (1.3)	611 (100.0)
3. 音楽関係	189 (40.5)	68 (14.6)	157 (33.6)	19 (4.1)	25 (5.4)	9 (1.9)	467 (100.0)
4. 知育関係	424 (68.4)	75 (12.1)	103 (16.6)	6 (1.0)	10 (1.6)	2 (0.3)	620 (100.0)
5. 体育関係	133 (29.4)	94 (20.8)	161 (35.5)	22 (4.9)	35 (7.7)	8 (1.8)	453 (100.0)
6. 家庭用学習教材	296 (63.5)	56 (12.0)	70 (15.0)	37 (7.9)	5 (1.1)	2 (0.4)	466 (100.0)

回答では,「予定なし」とそれ以外，つまり，何らかの理由により「通わせたい」と考えているものの，2つに大別されよう。

先ず,「予定なし」と答えた親が多いものとしては，知育関係(68.4%),家庭用学習教材(63.5%),絵画（55.0%）があり，半数を超えている。やはり，知育に関するおけいこごとで多い。

一方，その他のおけいこごとでは，何らかの理由により,「通わせたい」と思う親が多いわけだが，その理由としては,「もう少し大きくなったら」が習字で一番多い（31.3%）ほかは，絵画，音楽関係，体育関係のいずれも「通いたい」という子供の意志を第1にあげている。(それぞれ30.6%，33.6%，35.5%)

7.　保育者の意識

一方，保育者の側では，こうしたおけいこごとについてどのように考えているのだろうか。

ここでは，①「子供本位(子供が興味や関心をもっているのならばやらせてもよいと思う)」，②「消極的賛成（やらないよりはやった方がよいのではないかと思う)」，③「父母主導（父母がやらせようと思っているのならば，やらせればよいと思う)」，④「幼稚園で十分（この時期の子供にとっては，幼稚園や保育所での活動で十分であると思う)」，⑤「是非必要（是非ともやらせておくべきものだと思う)」，⑥「有害（やらせることによって害になる部分が多いと思う)」の選択肢を立てて聞いてみた。

保育者の意識では，おけいこごとは，大きく3つに分けることができよう。1つのグループは，子供が興味や関心をもっているのならばという子供本位派が多数を占めるもので，音楽関係（88.5%),体育関係（81.3%),絵画（62.2%),習字（50.9%）で半数を超えている。第2は幼稚園で十分と答えるものが多いもので，知育関係では，62.1%のものがこの意見に賛成している。第3のグループは子供本位派と幼稚園で十分派がほぼ同数を占めるもので，習字と家庭用学習教材がそれに該当する。

これらの項目以外で目立つものは，知育関係と家庭用学習教材といった知的なおけいこごとについて,「有害」と考えるものが10%から20%もいるということである。他のおけいこごとで有害と答えたものはほとんどいないことと比較しても，この数字の高さは注目に値しよう。

また，保育者にとって，この時期に是非必要と考えられているものはほとんどない。消極的賛成もほとんどない。「父母がやらせようと思うならば」という父母主導型に賛成するものもほとんどいない。

おけいこごとに関する保育者の考えとしては，基本的には，子供本位であり，子供がやりたいと思えばやらせ，あとは幼稚園で十分，知的なものについては，有害であると考えるものもかなりいるということになろう。

表II②－7　保育者の意識

(%)

	子供本位	消極的賛成	父母主導	幼稚園で十分	是非必要	有害	合計
1. 絵画	168 (62.2)	5 (1.9)	6 (2.2)	82 (30.4)	1 (0.4)	8 (3.0)	270 (100.0)
2. 習字	137 (50.9)	0 (0.0)	10 (3.7)	116 (43.1)	0 (0.0)	6 (2.2)	269 (100.0)
3. 音楽関係	238 (88.5)	9 (3.3)	7 (2.6)	10 (3.7)	5 (1.9)	0 (0.0)	269 (100.0)
4. 知育関係	46 (17.1)	2 (0.7)	10 (3.7)	167 (62.1)	0 (0.0)	44 (16.4)	269 (100.0)
5. 体育関係	218 (81.3)	11 (4.1)	16 (6.0)	18 (6.7)	3 (1.1)	2 (0.7)	268 (100.0)
6. 家庭用学習教材	93 (34.6)	5 (1.9)	19 (7.1)	118 (43.9)	0 (0.0)	34 (12.6)	269 (100.0)

③ 幼児教育のための「潜在的経済力」

教育にはいろいろとお金のかかる面もあるが，父母たちはどの程度の出費まで可能と考えているのだろうか。ここで尋ねたのは，実際にかかっている費用ではなく，「負担に感じない」あるいは「経済的にも無理はない」と感じる出費・金額であり，幼児のための「潜在的経済力」といったものである。まず，定期的な出費からみてみよう。

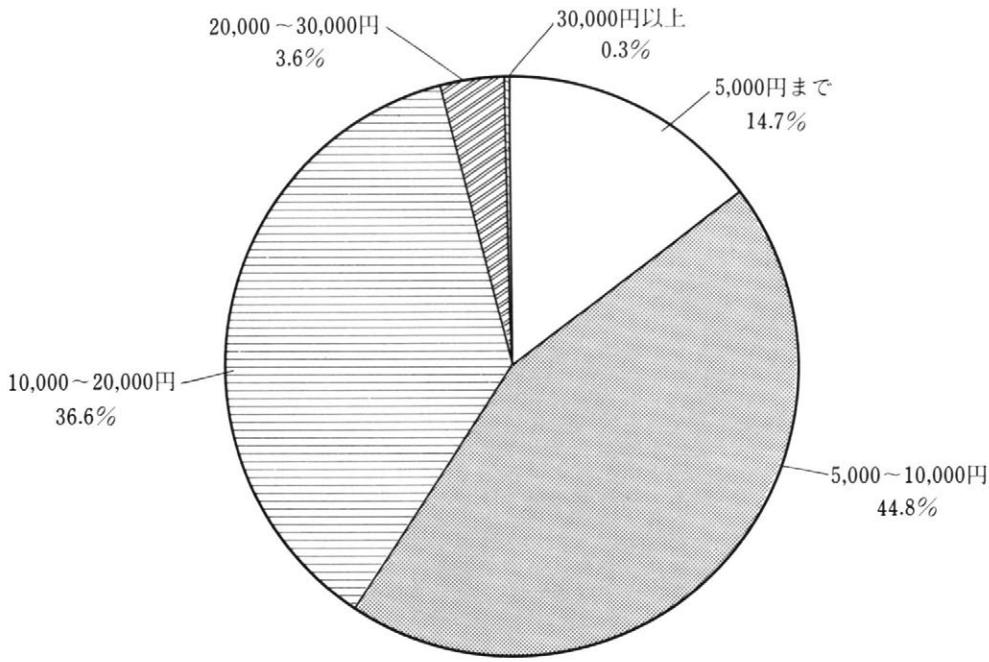
1.　定期的な出費

定期的な出費として，①「幼稚園・保育所の保育料(給食費など含む)」，②「ならいごと(ピアノ・そろばんなど）の謝礼」，③「定期購読の本や雑誌代金（1か月当たり)」，④「定期的な家庭用学習教材（1か月当たり)」をとりあげ，月額で考えてもらった。

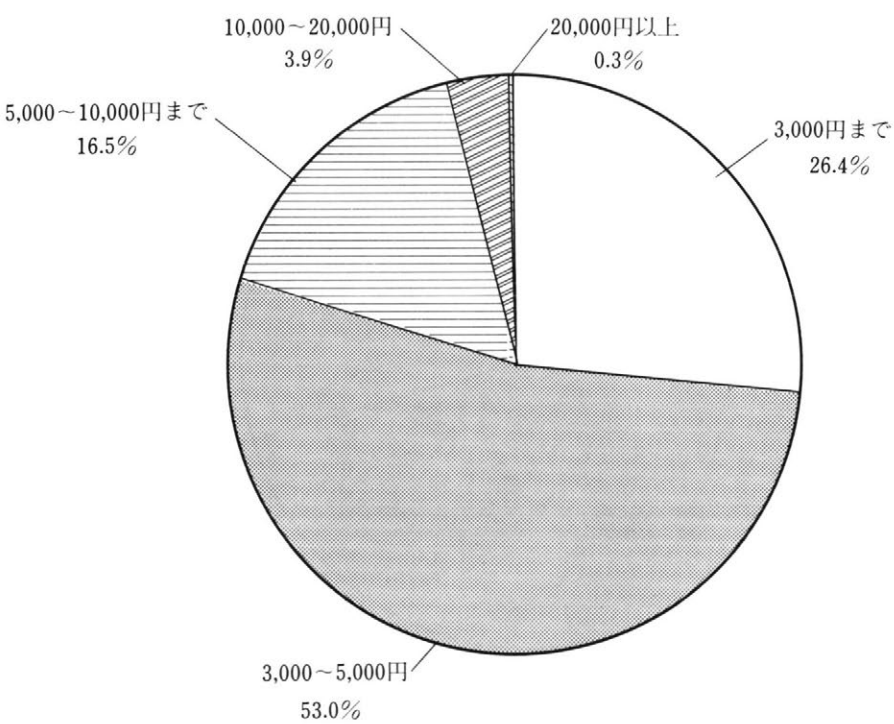
各項目についてまとめたのが，以下のグラフである。

図II3-1　定期的出費

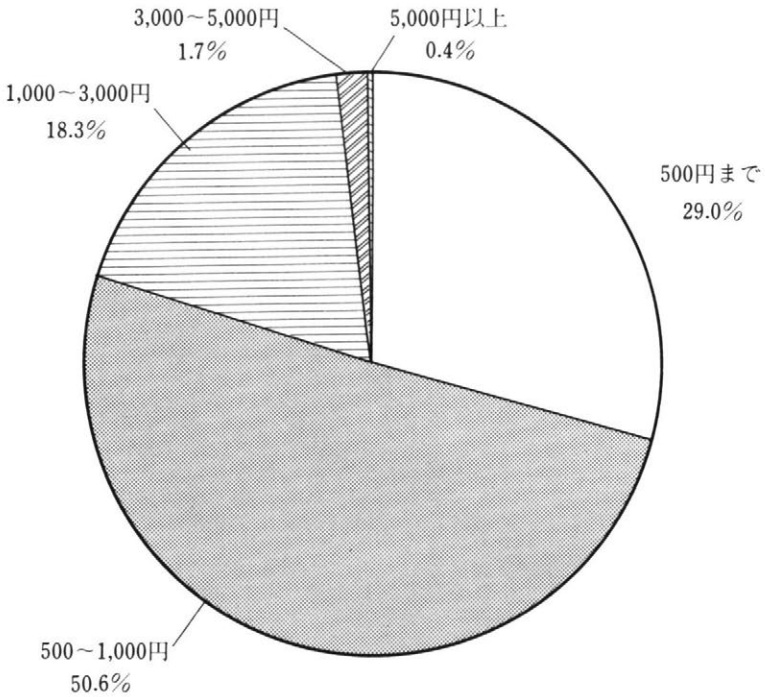
幼稚園・保育所の保育料(給食費など含む)



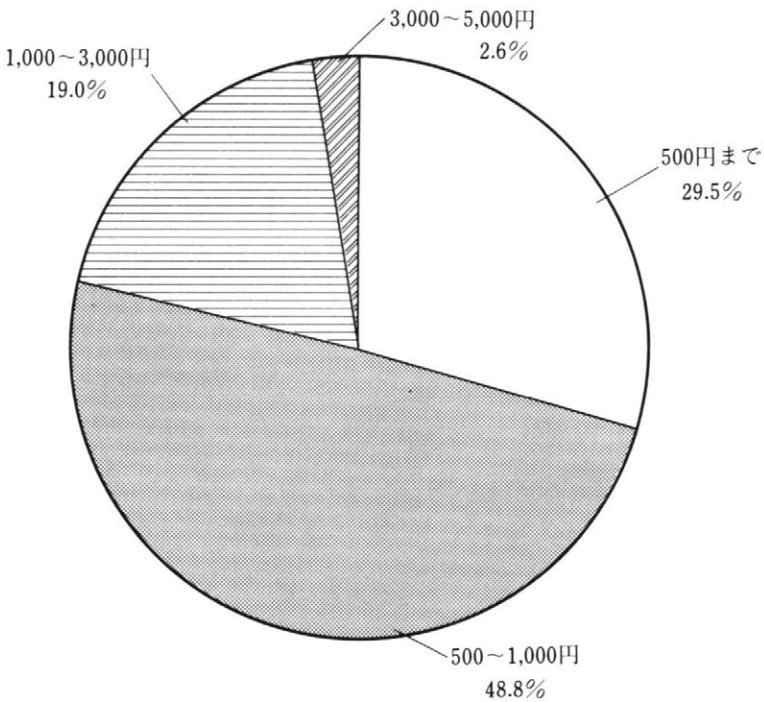
ならいごと(ピアノ・そろばんなど)の謝礼



定期講読の本や雑誌代金(1か月当たり)



定期的な家庭用学習教材(1か月当たり)



まず，保育料をみると，5,000～10,000円（44.8%）および10,000～20,000円(36.6%)と答えるもので全体の8割を占め，20,000円以上と答えるものは，ほとんどいない。

ならいごとの謝礼では，3,000～5,000円が53.0%と半数を超え，3,000円までが3割弱，5,000～10,000円が2割弱で続いている。

1か月当たりの本や雑誌代，および，家庭用学習教材では，ともに，500～1,000円が5割前後を占め，500円までが3割弱，1,000～3,000円が2割弱となっている。

したがって，保育料には5,000～20,000円，ならいごとには3,000～5,000円，本や雑誌および家庭用学習教材については，500～1,000円程度なら「負担に感じない」というのが，金銭的にみた平均的家庭像ということになろうか。

ところで，保育料と本・雑誌，および，ならいごとと本・雑誌でクロス集計してみると，いずれも以下のように相関関係があることがわかる。

表II③—1　保育料×本・雑誌代金

		本・雑誌代金					合計 N (%)
		500円まで	500～1,000	1,000～3,000	3,000～5,000	5,000以上	
保育料	5,000円まで	46 (43.8)	56 (53.3)	3 (2.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	105 (100.0)
	5,000～10,000	95 (29.7)	170 (53.1)	53 (16.6)	1 (0.3)	1 (0.3)	320 (100.0)
	10,000～20,000～	63 (24.5)	118 (45.9)	64 (24.9)	11 (4.3)	1 (0.4)	257 (100.0)
	20,000～30,000～	1 (4.0)	13 (52.0)	10 (40.0)	0 (0.0)	1 (4.0)	25 (100.0)
	30,000以上	0 (0.0)	2 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)

DF＝16

P≦.01

表II③—2　ならいごと×本・雑誌代金

		本・雑誌代金					合計 N (%)
		500円まで	500～ 1,000	1,000～ 3,000	3,000～ 5,000	5,000以上	
ならいごと	3,000円まで	84 (46.4)	83 (45.9)	12 (6.6)	1 (0.6)	1 (0.6)	181 (100.0)
	3,000～ 5,000	88 (24.1)	204 (55.9)	70 (19.2)	3 (0.8)	0 (0.0)	365 (100.0)
	5,000～ 10,000～	19 (17.0)	54 (48.2)	37 (33.0)	2 (1.8)	0 (0.0)	112 (100.0)
	10,000～ 20,000～	6 (22.2)	7 (25.9)	8 (29.6)	6 (22.2)	0 (0.0)	27 (100.0)
	20,000以上	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)	2 (100.0)

DF＝16

P≦ .01

保育料が高くてもよいと考える親は高い本や雑誌を幼児に与えてもよいと考える傾向があり，この傾向は学習教材とのクロスの結果にもみられる。教育にお金をかける親はいろいろなものにお金を費やし，お金を使わない親は何に対しても財布の紐が堅いということになる。

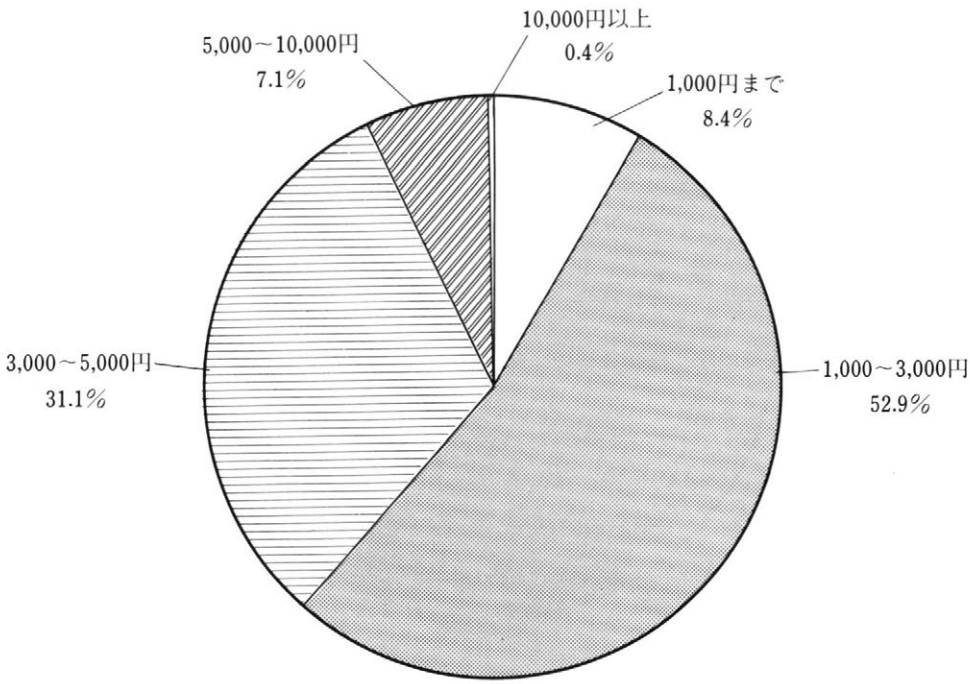
しかし，職業とのクロスでは，有意差はほとんど認められなかった。職業によって教育に費やす金額が異なるということはないようだ。

2.　不定期な出費

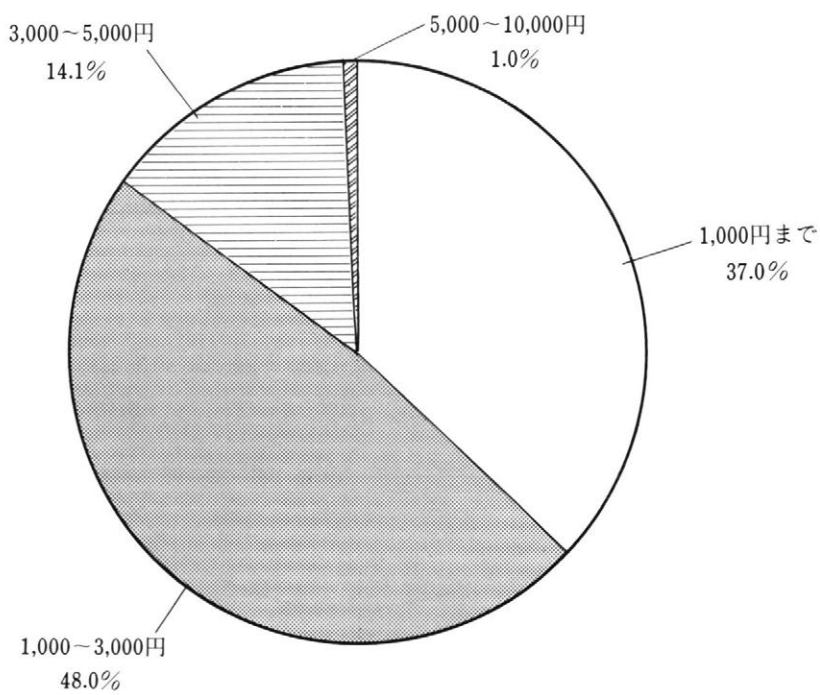
不定期の出費としては，①「洋服などの代金（1着について)」，②「おもちゃの代金（1品について)」，③「本・絵本の代金（1冊について)」，④「家庭用学習教材（1セット)」の4項目について尋ねた。

図II3-2　不定期の出費

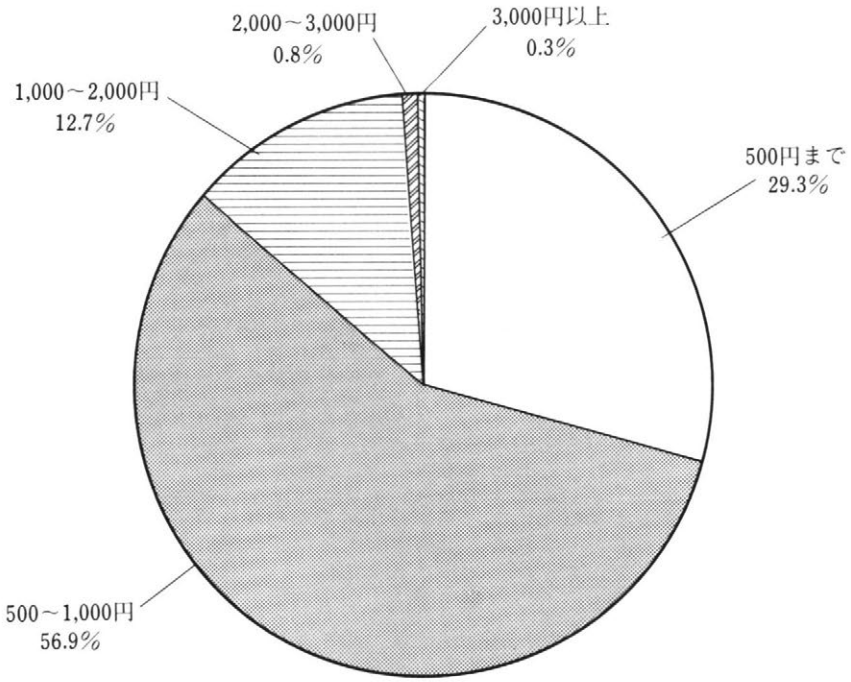
洋服などの代金(1着について)



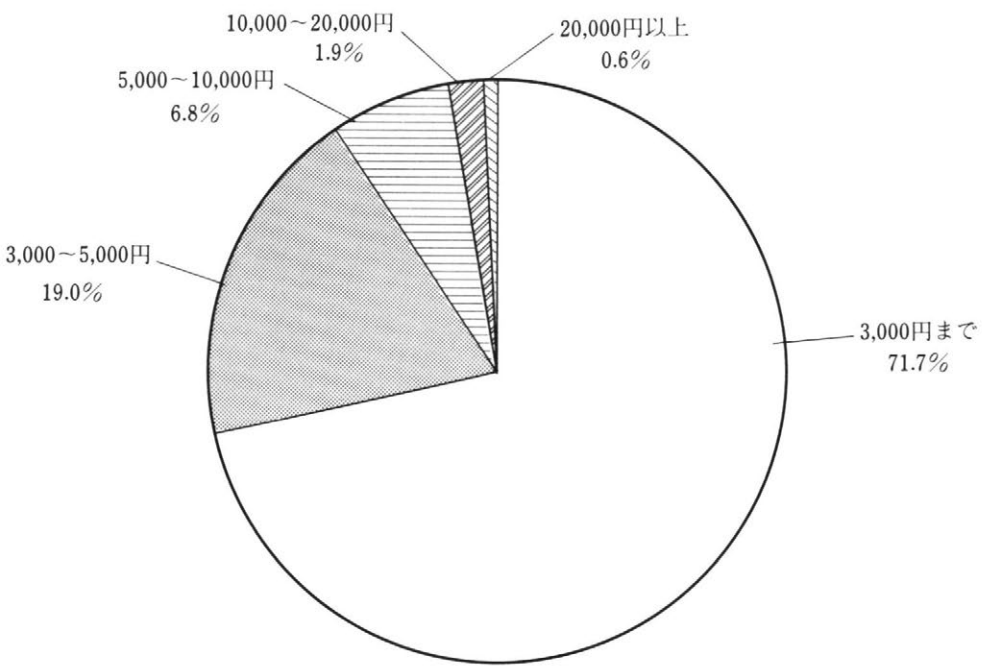
おもちゃの代金(1品について)



本・絵本の代金(1冊について)



家庭用の学習教材(1セット)



洋服１着の代金では，1,000～3,000円と答えるものが半数を超える。

おもちゃ１品の代金では，5,000円までほとんど100％になる。

本・絵本の代金でも，定期的な出費と同様，500～1,000円と答えるものが半数を超える。

家庭用学習教材では，3,000円までに７割が集中している。

こうしてみると，不定期の出費については，洋服とおもちゃで1,000～3,000円，本・絵本で500～1,000円，家庭用学習教材で3,000円以下というのが平均のようだ。

（筑波大学大学院博士課程教育学研究科生　藤井穂高）

III　就学前教育をめぐる父母・保育職の意識

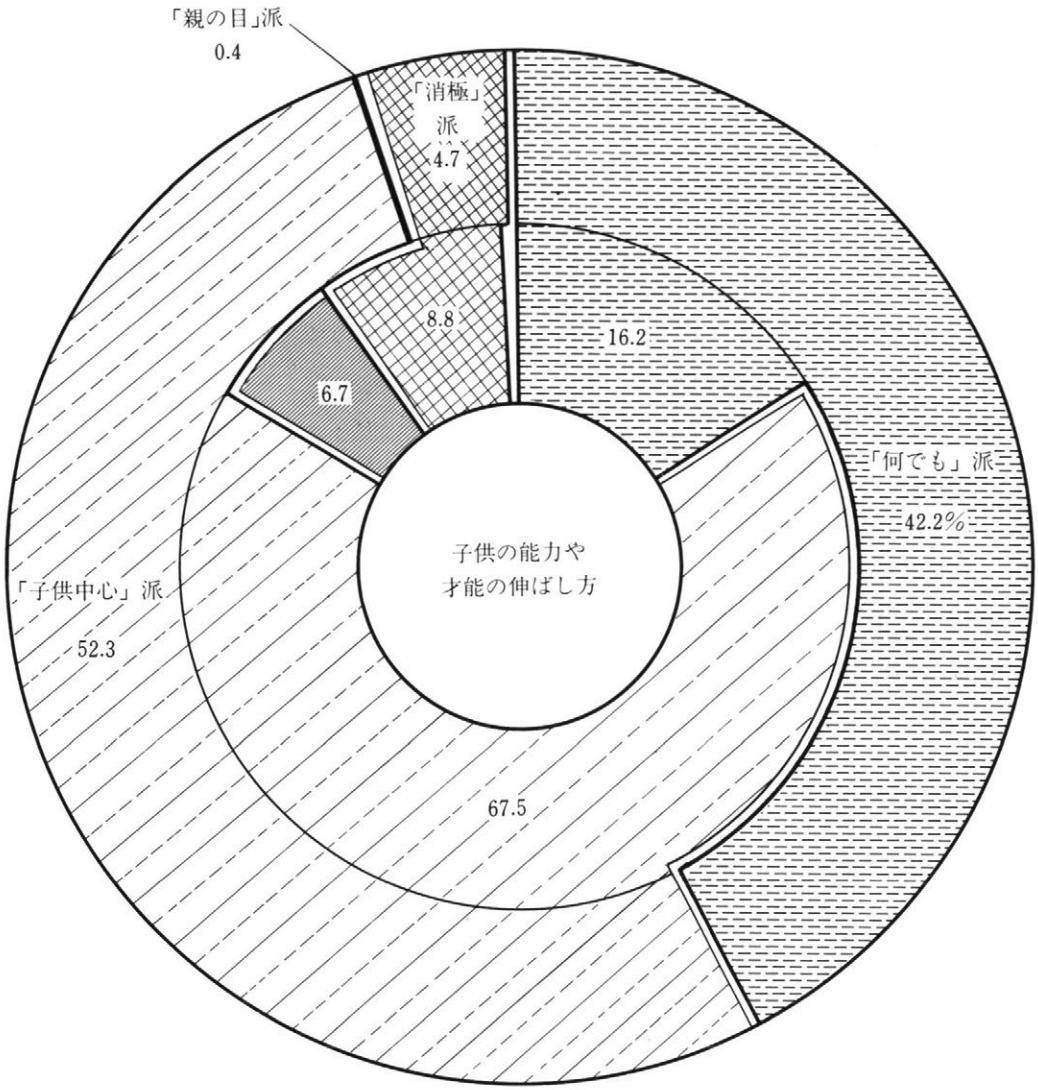
この章では，幼稚園児の父母(既に述べた通り，今回の調査対象はほとんどが母親である)，および就学前教育を組織的に展開している幼稚園の教諭たちがもつ，就学前期の子供たちに対する教育についての基本的考え方を明らかにしていきたい。そのための方法としてここでは，第1に「子供の能力や才能の伸ばし方に関する基本的とらえ方」，第2に「就学前期における教育の必要性に関する基本的認識のあり方」，第3に「子供の教育をめぐる家庭と幼稚園との役割分担に関するとらえ方」，第4に「家庭での教育に対する評価と今後への期待および展望」，さらに，第5に「幼稚園での教育に対する評価と今後への期待および展望」などを紹介していくことにする。そして，その報告の過程において，父母と保育職との間での意識構造の違い，あるいはまた，両者の意識のあり方をある意味において規定している回答者の諸特性などについて，必要に応じ補足的な説明を試みたい。

1　能力や才能の伸ばし方に関する基本的な考え方

就学前期(ここでは，とりわけ幼稚園の教育対象である3～5歳児)にある子供の能力や才能の伸ばし方については，当然のことながら様々な考え方があるだろう。われわれは，それについて，「いろいろなことをとにかく1通り1度は経験させてみて，子供の能力・才能を引き出してやりたい」という，いわば，「積極派」の立場，「子供自身が興味や関心を示しているならば，それについての能力や才能を伸ばしてやるのがいい」という，いわば，「子供中心派」の立場，「親の目から見て『必要だ』『むいている』と思われるならば，そのことについての能力や才能を伸ばしてやるのがいい」とする，いわば，「親中心派」の立場，それに加えて，「子供の能力や才能は自然に育ってくるものであるから，それを無理に伸ばしてやろうとは思わない」という，いわば，「消極派」という4つの意識のタイプ(立場)を準備し，幼稚園児の父母と幼稚園教諭たちに対して自分の意見としてあてはまるものを1つ選択してもらった。

その回答結果をグラフ化したものが，図III1－1である。内側の円は父母の回答傾向を，外側の円は幼稚園教諭のそれを表している。

図III[1]-1　子供の能力や才能の伸ばし方（父母・保育職）



内円：父母

外円：保育職

ここでの回答傾向を特徴づけているのは，まず，父母，保育職そろって「子供中心」的な考え方をする人が過半数を超えていることと言えるだろう。そしてこの傾向は，父母側により一層顕著に見出せるのである。就学前期にある子供を対象とする教育のあり方を考える際，その立場のいかんを問わず，被教育者である子供の興味や関心がとりわけ重要なポイントとして位置づけられるという現実を示唆するものである。

第2の特徴，いや，むしろ第1の特徴以上にわれわれの目を引くのは，「積極派」，つまり「何でも1通り1度は経験させるのがよい」と考える人の割合が，保育職の側に父母側の3倍の比率で見られるという点である。このデータは，「消極派」，すなわち「無理に子供の能力や才能を伸ばそうとする必要はない」と考える人の割合が，今とは反対に，父母の側に高く表れる事実と合わせて考えてみた場合，保育専門職たちがもつ就学前教育一般に対する積極姿勢を予想させるものであるといえる。言い方を換えるならば，子供が潜在的にもつ能力や才能を，あるいは，その発達の可能性をより一層大きなものとしてとらえ，それを開花させるためのチャンスであれば積極的に経験させるべきだという考え方は，当の子供の父母よりも，むしろ就学前教育を専門とする幼稚園教諭の側に強くみられるということである。

第3の特徴として指摘できるのは，「親の目からみて適性があると思われるならば」という意見に対する父母および保育職両者における考え方の相違である。父母が自分自身の親としての「目」を信じようとするのは当たり前のことではあるのだろうが，グラフからも看て取れるように，保育職でそのような考え方を受容し肯定しようとする人はわずかに0.4%しかおらず，最近取りざたされることの多くなった子供の教育をめぐる「親のエゴ」というものに対する保育職からの一種の警告のようにも筆者には思われるのである。

1. 父母側意識の分析

以上でみてきた就学前教育に対する父母側の意識傾向に関連し，ここでは，回答者特性や他の質問項目への回答傾向とつき合わせる形をとりながら，補足的説明を加えておくことにしよう。なお，ここで紹介するデータは，統計学的意味をもつ(5%水準で)ものに限定させていただくことを予めおことわりしておきたい。

(1) 父母の年齢層と「能力・才能の伸ばし方」意識との関係について

子供の能力や才能の伸ばし方についての考え方は，父母の年齢層により変化するものなのであろうか。ここでは，「積極派」と「消極派」という特徴的かつ対立的な2つの意見・立場に対する支持率の違いから，この問題を考えてみることにしよう。

「いろいろなことをとにかく1通り1度は経験させてみたい」という意見に対する支持率は，20～29歳層で17.7%，30～34歳層で15.4%，35～39歳層で17.9%，40～49歳層で11.4%というぐあいに，それほど明確ではないにしても，父母の年齢が高まるにつれて低下していく傾向が

見出せる。その反面,「能力や才能は自然に育ってくるものであるから，それを無理に伸ばしてやろうとする必要もない」という意見に対する支持率は,20～29歳層で3.8%，30～34歳層で7.7%，35～39歳層で11.0%，40～49歳層で20.0%と，父母の年齢が高まるにしたがって上がってくる。このようなデータからは，就学前教育に対する積極的態度と消極的態度との対立的構造が年齢層の違いによって生じていることが明らかにされるだろう。

今回の調査結果からだけでは，このような意識の傾向や構造がどうして生じるかを論じることはできないし，その原因を探ることは，また別の調査研究の機会に取り上げるべき課題として残しておかねばならないわけであるが，例えば，受験戦争だとか早期英才教育だとかが盛んに論じられる，いささか過熱ぎみのわが国の学校教育の現状を眺めるにつけ，年齢の高い父母ほどそのような傾向に対して否定的な，あるいは批判的な考え方をもっていることを予想させるデータではないだろうか。

(2)　父母の学歴と「能力・才能の伸ばし方」意識との関係について

父母の学歴が子供の能力・才能の伸ばし方をめぐる考え方におよぼす影響に関して報告すべきことは,「何でも１通り１度は経験させたい」とする「積極派」が,父母の学歴が高くなるにつれて増えていること(各学歴層におけるこの意見・立場に対する支持率を以下に示してみると,「中学校卒業」が14.3%,「高等学校卒業」が15.4%,「短期大学卒業」が18.6%,「４年制大学卒業」が19.3%という結果になる。),および,その反対に,「子供の興味や関心を中心に考える」という「子供中心派」の数は父母の学歴の高まりとともに減っていること(各学歴層における当該意見の支持率は,「中学校卒業」が71.4%,「高等学校卒業」が68.1%,「短期大学卒業」が68.6%,「４年制大学卒業」が65.1%)の２点であろう。これらのデータからは，高い学歴をもつ父母ほど親として，自ら積極的に子供の教育に参加・介入していこうとする意識傾向をもつことが読み取れそうである。

(3)　家庭での「ふれあいの機会」と「能力・才能の伸ばし方」意識との関係について

前章において報告された家庭における父母と子供との「ふれあいの機会」の実態と，子供の能力・才能の伸ばし方に関する考え方との関連について簡単に述べておこう。

先に述べたように，その因果関係については，今回の調査結果から直接的に明らかにすることはできないまでも子供と一緒に遊ぶ機会を多くもっている母親ほど,「子供が興味や関心を示しているならば」という意見や立場に対する支持を強め，それとは反対に，そのような機会を少ししかもつことができない母親であればあるほど,「子供の能力や才能を無理に伸ばす必要はない」とする意見への肯定率を高めている。

このような，子供とのふれあいの機会を日常生活の中でもつことができる母親ほど「子供中心」的発想をしやすいという傾向は,「子供に本(絵本)を読んであげる」機会の多少と子供の能

力・才能の伸ばし方に関する意識との関わりを問うた場合にも，同様に見出すことができる。また,「無理に能力や才能を伸ばしてやることもない」とする「消極派」への支持率が「(子供に本・絵本を読んであげることは)ほとんどない」で27.5%,「1か月に1度くらい」で14.4%,「1週間に1度くらい」で8.0%,「2・3日に1度くらい」で8.0%,「ほとんど毎日」で8.1%というぐあいに，その機会の頻度が高まるにしたがって次第に減少していくというデータも，上に指摘した傾向をまた裏側から示すものといえるだろう。

(4) 「ふれあいの機会」への自己評価と「能力・才能の伸ばし方」意識との関係について

次に，家庭における子供との「ふれあいの機会」に対する父母の自己評価と,「才能・能力の伸ばし方」をめぐる意識との関係についてみておくことにしよう。

結論を先取りして述べるならば，総じて，子供とのふれあいの機会にある程度の満足感をもつ父母のグループに，いわゆる「積極派」が多くみられた。逆に,「(そのような子供とのふれあいの機会が)もう少し多いとよい」とか「今のままでは足りない」と考えている父母のグループの方に，いわゆる「消極派」が多いという基本的傾向を見出せるのである。

例えば,「積極派」的意見への支持率は,「子供と一緒に遊ぶ」という機会を「足りない」とする父母で13.3%,「もう少し多ければ」という父母で14.4%,「十分とはいえないまでも満足」とする父母で14.6%,「十分である」という父母で19.0%というぐあいに,徐々に増加しているし，反対に,「消極派」的意見への支持率は,そのような機会が「足りない」と自己評価する父母で23.3%,「もう少し多ければ」という父母で5.4%,「十分とはいえないまでも満足」という父母が6.8%,「十分である」とする父母で8.8%と，次第に減少しているのである。

これと同様の傾向は,「子供と一緒に遊ぶ(父親)」という機会に対する自己評価,および「子供に本・絵本を読んであげる(母親)」という機会に対する自己評価に関するデータの上にも，統計学的意味をもつものとして表れている。

(5) 家庭での教育に関する展望と「能力・才能の伸ばし方」意識との関係について

本項のしめくくりとして，家庭での教育の将来に対する展望と子供の能力・才能の伸ばし方に関する基本的意識との関わりをみておくことにしよう。(家庭における教育に対する父母自身の展望の詳細については，本章の後続節を参照のこと)

例によってここでも，特徴的・対立的な意見や立場である「積極派」と「消極派」との対比という方法をとりながらデータを眺めていくこととする。当然予想された結果ではあるが,「積極派」の父母には今後も家庭での教育に積極的に力を入れていこうとする意向が強くみられ，また，逆に「消極派」には，「これまで通りに」とか「今までほど力を入れるつもりはない」などといった考え方が多くなるという基本的傾向を見出すことができる。

この傾向が明確な形と数値で表れているのが,「絵や音楽などを見聴きして，美しいとか楽し

いと感じられるような心をもたせること(情操性)」および「はさみ・糊・鉛筆などが使えるなど，日常生活上の基礎的な技能を身につけさせること(基礎的生活技能)」というような内容項目についての家庭での教育をめぐる将来展望に関するデータであった。

ここまで1つの結論として，「子供の能力・才能の伸ばし方」に関する「積極派」および「消極派」という意見や立場の違いは，家庭での子供とのふれあいの機会という観点からしても，家庭における指導の実態あるいはそれに対する将来展望という観点からしても，幼稚園児の父母を特徴的な二極の構造に分化させているのではないか，という仮説を提示できると思われる。

2.　保育職側における意識の分析

ここで，保育職たちの就学前教育に対する基本的な意識傾向について，回答者特性や他の質問項目への回答傾向とつき合わせながら補足的説明をしておかなければならないのだが，今次の調査結果からは統計的意味をもつようなデータを得られなかった関係上，それはまた別の機会に譲りたい。

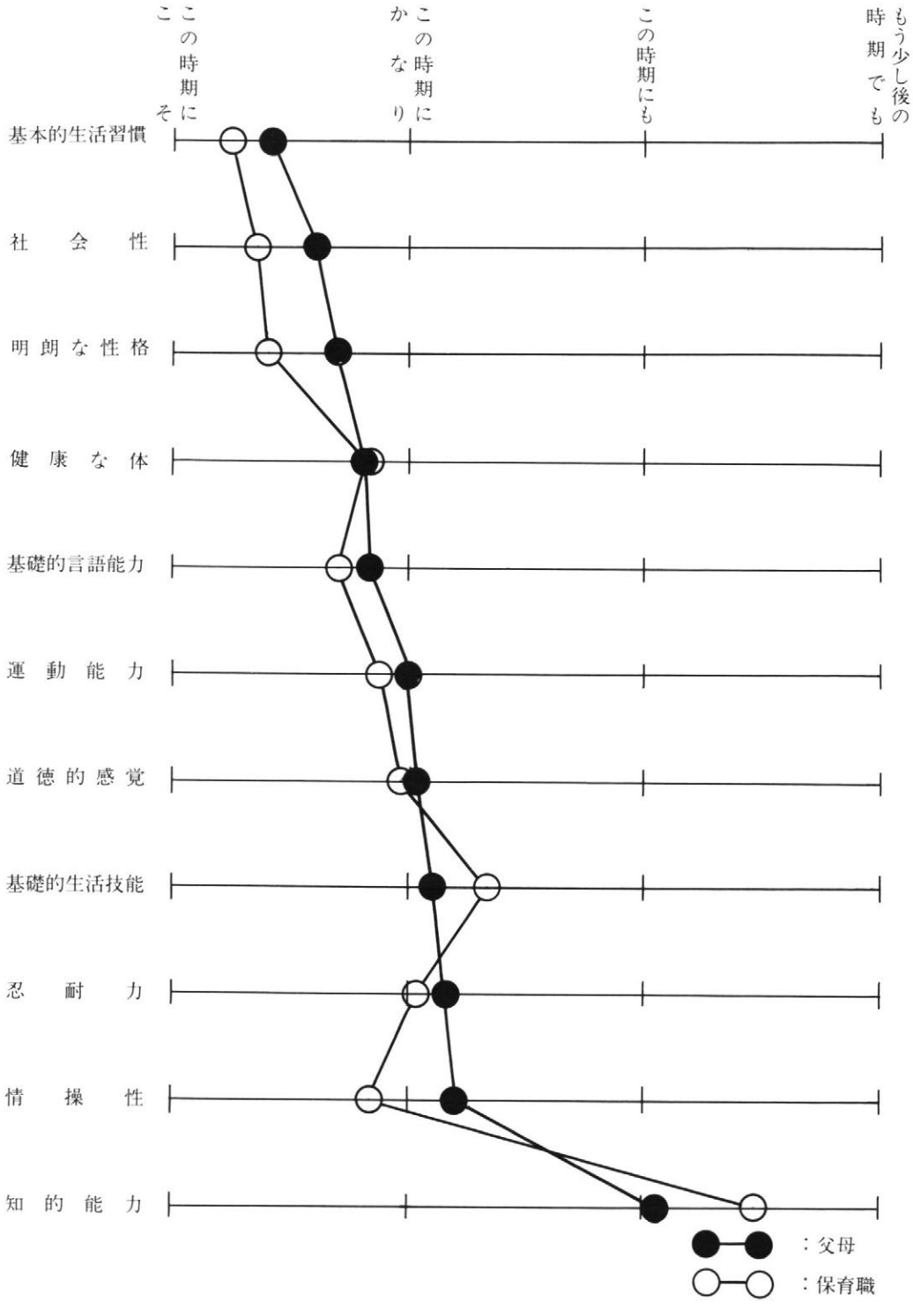
2　就学前期における教育の必要性の認識

幼稚園児の父母や幼稚園教諭たちは，一体どのような内容の教育・指導がこの時期の子供に必要と考えているのであろうか。

既に述べた通り，われわれの今回の調査では便宜的に設定した11の就学前教育の内容領域を用い，それら各々の教育や指導に関して，「この時期にこそ必要である」「この時期にかなり必要である」「この時期にもある程度は必要である」「もう少し後の時期でもよいと思う」という4つの考え方の選択肢から，自分の意見に最も近いものを1つ選択してもらうという方法でこの問題についての解明を試みた。詳細な数値データについては，本報告書巻末にある「資料：基礎データ表」を参照していただくこととして，ここでは，そこに表れた大まかな傾向の把握および紹介をしてみたい。

図III2－1は，幼稚園児父母および幼稚園教諭がもつ各内容領域項目に対する教育の必要性認識をまとめてみたものである。このグラフは，「この時期にこそ必要である」という意見に4点，「この時期にかなり必要である」に3点，「この時期にもある程度は必要である」に2点，「もう少し後の時期でもよいと思う」に1点というぐあいに仮の得点を与え(人間の意識は，もともと得点化できるという性格のものではないが)，各々の意見に対する支持者の数を調べながら平均値を算出してその値を数直線上にプロットするという方法で作成したものである。図表中，●―●が父母の意識傾向を，○―○が保育職の意識傾向を表している。

図Ⅲ2-1　就学前教育に対する必要性認識（父母・保育職）



まず，父母側においてその教育の必要性が強く認識されている内容領域の項目をおってみることにしよう。要するに,「この時期にこそ必要である」という考え方に近い場所に位置づけられる指導内容の領域についてである。

父母の側において最も強くその教育や指導の必要性が認識されているのは,「歯磨・洗顔・後かたづけ・挨拶などの基本的生活習慣を身につけさせること(以下,基本的生活習慣)」であり，以下,「友達と仲よく遊べるというような社会性を育むこと(以下，社会性)」「明るくて素直な性格を望むこと(以下，明朗な性格)」「風邪をひきにくい・骨を折りにくいなど健康で丈夫な体を作ること(以下，健康な体)」「したいこと・してほしいことなどをきちんと言えるような，基本的言語能力を身につけさせること(以下，基礎的言語能力)」「ケガをせずに遊具や友達と遊べるなど,基礎的な運動能力を身につけさせること(以下,運動能力)」「年少者やお年寄りをいたわるなど，基本的な道徳的感覚を育てること(以下，道徳的感覚)」「はさみが使える・糊が使える・鉛筆で字が書けるなど,日常生活上の基礎的技能を身につけさせること(以下，基礎的生活技能)」「少々のことにはへこたれないようながまんづよさを培うこと(以下,忍耐力)」「絵や音楽などを見聴きして，美しいとか楽しいと感じられるような心を育てること(以下,情操性)」と続いている。このような全体的傾向は，保育職の側にもまったく同様に見出されるが,特記すべきこととして,「健康な体」と「基礎的生活技能」の２つの項目以外は,いずれも保育職の方により強い教育の必要性認識が見受けられたという点である。

いずれにせよ，ここにあげた10の内容領域項目は，少なくとも「この時期にかなり」,あるいはそれ以上の教育の必要性を父母・保育職の両者に認識されているものであるが，これらとの対比において明らかに異なる必要性認識の傾向をもたれている項目が１つだけある。それがすなわち「知的能力」,つまり,「ひらがなや簡単な計算など,基本的な知的能力を身につけさせること」というのがそれである。

「ひらがな」あるいは「計算」などということばを質問紙上で用いたために，ある面において回答者の反発を招いてしまったというきらいがなきにしもあらずの感もするが，わが国の幼児教育界においては，伝統的かつ一般的にこのような知的教育領域の指導に関する抵抗感のようなものが広くもたれてきているのも事実であるように思われる。先の臨時教育審議会，あるいは,新しい幼稚園教育要領(1989.３.15.告示)を生み出す契機となった教育課程審議会などにおける諸論議においても，就学前期における知的・体系的教育のあり方については重要なテーマとされてはみたものの，やはり，その結果としては従前と大きく異なるような新たな考え方を見出すことはできずじまいに終わっている。ここでの価値判断は絶対に避けるべきであろうが,やはり，子供は「遊び」が中心という思想が広くいきわたっているのである。

父母と保育職との間における考え方の差としてとくに目立つ内容領域としては,「情操性」「明

朗な性格」「社会性」(いずれも,保育職側の教育必要性認識の方が強い)および「知的能力」がある。とりわけ，父母以上の「知的能力」の育成に対する抵抗感のようなものを幼稚園教諭たちがもっているようだという点に，ここでは注目しておくことにしたいと思う。

1. 父母側意識の分析

1における考察と同様，ここでも就学前教育に対する必要性認識のあり方を規定していると考えられる諸要因について，回答者特性や他の質問項目に対する回答の傾向と関わらせながら，ごく簡単に紹介論議していくことにしよう。

(1) 「基本的生活習慣」について

まず,最もその必要性が認識されているということから,「基本的生活習慣」に関する指導についてみておこう。

この内容領域の指導のあり方に関する意識と，家庭と園との間での「役割分担」意識との関わり方を探ってみたところ,「この時期にこそ」というようにその教育の必要性を強く認識する回答者の間に「主に家庭で指導するべきである」という意見をもつ人が多いという傾向が見出せた。つまり，歯を磨くことや後かたづけや挨拶などというような日常生活上の基本となる習慣については，家庭において，しかも，就学前からしっかりと父母が身につけさせるべきだという一種の二重構造をもった考え方が父母の側にみられるということである。反対に，この領域に関する指導の必要性を軽く考える母親ほど，基本的生活習慣に関する指導は「園で」という考え方をもちやすい。

このような傾向は，若い世代の親の子育て態度として少々問題なのではないか，と幼稚園児の父親である筆者自身は思うがどのように思われるであろうか。

最近，幼稚園・保育所の保育職だけではなく,小学生以上の教員からも「父母が子供の教育の何でもかんでもを学校や教員に押しつけてくる」という訴えを聞くことが多くなった。それは，まさに上述したような父母たちの意識傾向を反映する1つのエピソードではないだろうか。

調査報告書としてふさわしくないかもしれないが，個人的なコメントをさしはさませていただくと，筆者自身は，基本的生活習慣の形成と確立こそが家庭における教育の中核であって，これを家庭が放棄したり軽視したりするようなことがあるのならば，子供に対する教育を考える上での家庭の意味は消滅してしまうとまで考えているのだが，果たして，これをお読みになっておられる読者はどのようにお考えだろうか。

次に家庭でのこの内容領域の指導についての父母の自己評価と，教育必要性の認識のあり方との関わりをみてみよう。

予想されたこととはいえ,かなり明確に,「この時期にこそ」という高い教育必要性を認識している回答者ほど「(家庭においては)とてもよく・わりとよく指導している」と答える割合が高く，

「この時期にもある程度は必要」というような，いわば消極的な肯定意見にとどまっている父母の多くが「あまり家庭での指導はしていない」という自己評価をなしているという傾向を見出すことができた。「必要だ」と思っているからこそ「(家庭において)熱心に指導している」父母の群と，「たいして必要とは思わない」から「あまり指導をしていない」父母の群とが二極に分化していることを予想させるデータの表れ方といえる。

何はともあれ，基本的生活習慣を身につけさせることがあるからこそ「家庭教育」なのであり，それを軽視・看過あるいは放棄することは，親としての基本的な教育責任を放棄すること以外のなにものでもない，と１人の親である筆者は思うのである。

(2)　「社会性」について

友だちと仲よく遊べるというような「社会性」に関する教育や指導については，「この時期にこそ」それが必要だとする父母の群に，「(家庭において)熱心に指導している」と回答する割合が高いという傾向が見出されている。

(3)　「明朗な性格」について

「明るくて素直な性格を育む」ための指導については，「この時期にこそ・この時期にかなり」そのような指導が必要であると考えている父母ほど，その指導がおこなわれるべき場は「家庭である」と認識している傾向があることがわかる。「基本的生活習慣」などと並び，この「明朗な性格」形成のための指導は，父母たちにとって家庭における教育の主要な部分をなすものとしてとらえられているのであろう。(本章後続節の「役割分担意識」に関するパートでもこの点については述べてみたい)

一方，このような内容の教育や指導を「もう少し後の時期でも」と考える父母においては，「園で」という意見が多く見出され，その因果関係については明確にすることができないまでも，この内容領域に対する教育・指導をめぐる父母の「消極性」と「園まかせ」的態度が，何らかの相互関係性あるいは相互関連性をもつことが予想される。

(4)　「健康な体」について

報告しておくべき点として，「この時期にこそ・この時期にかなり」指導が必要であるとする回答者の群に，それを「主に家庭において指導すべき」事柄であると考える人の割合が高いということ，また，家庭における現時点での教育・指導に対する自己評価との関わりをみた場合，「とてもよく指導している」と答える比率が統計的に高くなっていること，の２つをあげておくことができる。

(5)　「基礎的言語能力」について

「したいこと・してほしいこと等をきちんと言えるなど，基本的な言語能力を身につけさせる」ための教育と指導のあり方に関する父母の意識についてみてみよう。

ここでは,他の内容領域項目の多くに見られている「『消極性』→『園まかせ』」,あるいは,「『積極性』→『家庭で』」というような,いわば意識の二重構造性を明確に看て取ることができない。ただし,「この時期にこそ」このような内容領域についての教育や指導が必要であると考える父母の中には「家庭で熱心な指導をおこなっている」という高い自己評価をくだす割合が高く,逆に「後の時期でも」という父母には「あまり熱心な指導はしていない・ほとんど指導らしいものはしていない」とする回答率が高くなっている。少なくとも家庭においては,父母の「考え方」と指導の実際とがある程度は結びついていることをうかがわせるようなデータだといえよう。

(6) 「運動能力」について

この領域についての教育や指導の必要性を強く認識している父母の群には,家庭での指導の重要性を強調する回答者の割合が高く,それほど高い教育の必要性を感じていないグループには,「主に園で指導すべき」だという意見が多くみられている。

(7) 「道徳的感覚」について

続いて「道徳的感覚」の育成に関する教育・指導についてであるが,この節における共通した傾向である「『高い教育必要性認識』→『家庭で』派」「『低い教育必要性認識』→『園まかせ』派」という意識の構造が,この内容領域についても見出せる。

また,家庭での実際の指導に対する自己評価とのクロス・データをとってみると,「この時期にこそ」とする回答者には「(家庭において)とてもよく指導している」とする割合が高くなり,また逆に,「もう少し後の時期でもよい」と考えている父母の中には「あまり(家庭での)指導をしていない」という割合が高くなっていることがわかる。

さらに,家庭における指導の将来展望とのクロス・データをとってみると,「この時期にこそ」と考える父母の中に,「(これからは)今までよりも・おおいに」力を入れてこの領域の指導をしていきたいという積極姿勢の回答者が多くみられ,「必要性認識」と「将来展望」との間の相互関連性を見出すことができる。

(8) 「忍耐力」について

「『高い教育必要性認識』→『家庭で』意識」および「『低い教育必要性認識』→『園まかせ』意識」という意識の構造や,あるいは,「『この時期にこそ必要だと思う』からこそ『家庭において熱心に指導している』」のであり,「もう少し後でもよい」と思っているから「あまり・ほとんど」家庭では指導をしていない,という傾向や状態が,やはりここでも浮き彫りにされている。

(9) 「情操性」について

「『この時期にこそ必要』と思うから,『家庭において熱心に指導している』」という基本的傾向を裏打ちする意味において,子供との「ふれあいの機会」に関するデータとのクロス分析をしてみると,そこにおもしろい結果がでている。

それは，母親が「子供と一緒に音楽を聴いたり歌を歌ったりすること」の実態に関するものであり，すなわち，「情操性」の育成が「この時期にこそ必要である」とする父母のグループには，「少なくとも2・3日に1度以上は子供と一緒に音楽を聴いたり歌を歌ったりする」機会をもっているという回答者の割合が高くなるのであり，「ほとんど毎日」そのような機会にめぐまれているとする回答者のうち，36.2%は「この時期にこそ」派，27.5%は「この時期にもかなり」派が占めている。家庭での指導についての将来展望とのクロス・データをとってみると，この内容領域の教育・指導の必要性を強く認識している群には，「(これからは)おいおいに・今までよりは」力を入れていきたいと考えている父母の割合が高いという傾向を見出すことができる。

この「情操性」の育成に関しては，家庭での指導に対する自己評価や子供とのふれ合いの機会の多少などに関するデータなどから考えて，ある意味において「恵まれている」家庭と，そうでない家庭とが分極化しているかのように思われる部分が多い。この点についての論究は，今後の研究課題の1つとしておきたい。

(10)　「知的能力」について

図Ⅲ②—1から明らかにされたように，この「知的能力」という内容領域に関する指導については，他の項目と比較し，父母および保育職の双方からあまり高い教育必要性を認識されていない。とりわけ，幼稚園教諭側の意識に着目してみると，「もう少し後の時期でも」というカテゴリーに極めて近いポイントに彼女たちの考え方がプロットされている事実がわかる。しかし，それでもやはり，既に述べてきたような全体に共通する基本的傾向はこの「知的能力」という項目についてもあてはまり，「役割分担」に関する意識(積極派には家庭の役割を強調する人が多い)，「家庭での現在の指導に対する自己評価（積極派には家庭での指導が盛んとする人が多い)」，および「将来展望（積極派にはこれからも家庭での指導をしっかりやっていきたいとする人が多い)」などとのクロス・データ上にそれが表れている。

また，他の教育内容領域についての項目では残念ながら統計的意味をもつデータは得られなかったわけだが，定期的な家庭用学習教材に対して，父母が支出できる(しよう)と思っている金額の多少との間に，興味あるデータがみられている。すなわち，「知的能力」の育成・指導が「この時期にこそ・この時期にかなり必要である」と考えている父母の群に，子供の家庭用学習教材のために多額の金額をかけられる(かけようとする)人の割合が増えていく傾向が見出せそうなのである。例えば，「この時期にこそ(知的教育が)必要だ」とする父母が，子供の家庭用学習教材にかけられる金額（1か月あたり）としてあげた額は，次のような割合になっている。すなわち，「500円まで」という人が6.4%，「500～1,000円」というのが5.4%，「1,000～3,000円」が6.1%，「3,000～5,000円」が22.2%というぐあいである。これが「もう少し後でよい」という父母の群になると，上の比率はそれぞれ41.6%，22.3%，28.2%，16.7%ということになり，ほぼ逆の傾

向を示すことになるわけである。

それにしても，就学前の子供の家庭用学習教材費として月額3,000円以上も支出できる父母というのは，筆者の感覚からすれば羨ましい限りである。(私事で誠に恐縮であるが)

2. 保育職側における意識の分析

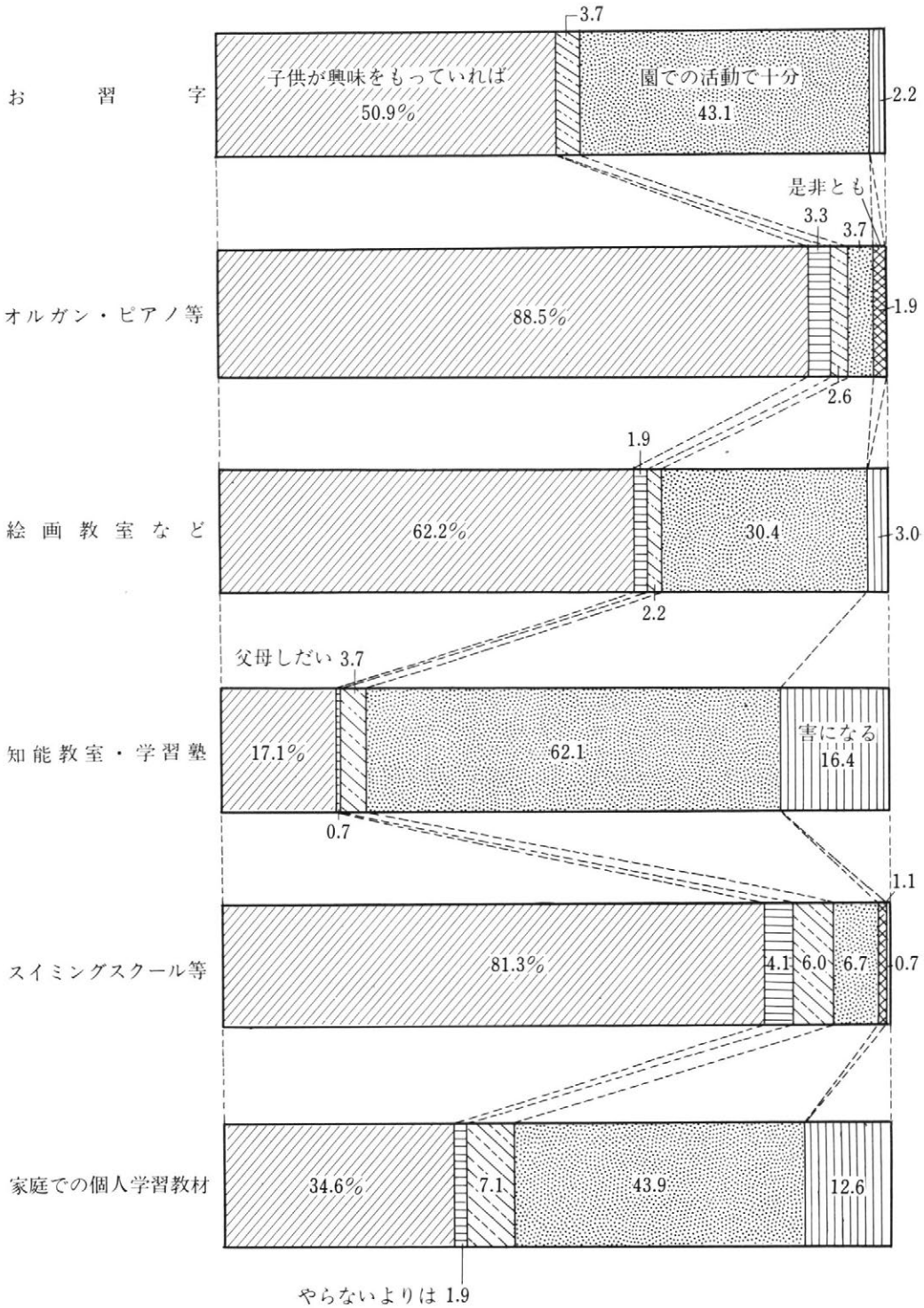
次に，保育職側がもつ就学前期の教育に対する必要性の認識のあり方と，彼女たちの諸特性，および，他の質問項目への回答傾向との間のクロス・データについて紹介しておかなければならないが，とくに報告しておく必要があると思われるものは見当たらないので，本報告書においては省略させていただくことにする。

3. 保育職にみる子供の「おけいこごと・ならいごと」への反応

図Ⅲ[2]—2は，「お習字」「オルガン・ピアノ」「スイミング教室」など，子供を対象とする，いわゆる，各種の「おけいこごと・ならいごと」に対して保育職たちがもつ反応・意識をまとめてみたものである。このデータもまた，保育職たちの就学前期における教育必要性の認識を示す資料の1つとしてとらえることができる。

まず，全体を概観してわかることは，「子供が興味や関心をもっているのならばやらせてもよいと思う」という考え方の強さである。図Ⅲ[1]—1でみた，「能力・才能の伸ばし方」に関する意識のあり方においても，保育職たちは，その約半数が「子供が興味や関心を示すならば」という意見を支持していたわけであるが，このように，具体的な「おけいこごと・ならいごと」の名前をあげられると，より一層そのような「子供中心」的な感を強めるようである。この「子供自身が興味や関心をもっているのならばやらせてもよい」という考え方への支持率が高いものを順番にあげてみると，「オルガン・ピアノなど (88.5%)」「スイミング教室など(81.3%)」「絵画教室など(62.2%)」ということになる。

図III2-2 「おけいこごと・ならいごと」に対する意識(保育職)



次に，どちらかというと否定的な意見，つまり,「この時期の子供にとっては，幼稚園や保育所での活動で十分であると思う」という意見への支持率をみてみよう。

保育職から，相対的に批判的な目をもってとらえられている子供の「おけいこごと・ならいごと」としては,「知能教室や学習塾などの知的教育関係(上記にならい意見支持率をあげてみると,62.1%である)」「家庭での個人学習教材(43.9%)」「お習字(43.1%)」「絵画教室などの芸術関係(30.4%)」などがあげられる。音楽関係,および体育関係のおけいこごと・ならいごとに対する保育職の回答傾向(「資料：基礎データ表」参照のこと)と比べると，これら知的側面の教育に対する消極的な態度は目立っている。図Ⅲ2—1で明らかにされた就学前期における教育必要性の認識のあり方からも予想される通り，保育職たちは，子供の知的側面におけるこの時期の教育を，やはりどこかで否定的にとらえているという傾向が見出せるのである。この時期の子供にとっての「お習字」は，むしろ，おちつきやお行儀を身につけさせる，あるいは，基本的な運筆の訓練をおこなうという目的や効果が期待されるのではないかとも思われるのであるが，もう一方においてそれがもつ「ひらがななどの字を覚えさせる」という側面に注目してみるならば，やはりその「知的教育」的側面の存在は否定できない。このようなことから「お習字」も,「知能教室」や「家庭用学習教材」と同様の回答傾向を生じてしまうのだと思われる。

さらに，最も否定的な意見,つまり,「やらせることによって『害』になる部分が多いと思う」という，極めて強い抵抗感を保育職たちによって示されるものをあげてみよう。

さすがに「『害』になる」とまで言い切ってしまうような回答者は多くないが，それでも,「知能教室・学習塾」に対する反対意見への16.4%，および,「家庭での個人学習教材」に対する反対意見への12.6%という支持率の高さには注目を要するであろう。就学前のこの時期における教育の必要性認識の項においても，父母および保育職の両者が「知的教育」に対する消極的態度を示していることが指摘されたが，その場合でも保育職は，父母以上にそのような態度をもっていたことを想起していただきたい。

なぜなのか，それを今回の調査結果のみから詳らかにすることはできない。子供に対する教育の本質を「遊び」にあるとする考え方は，わが国の幼児教育界に伝統的にあるわけだが，そのような幼児教育観は，保育を専門の職とする人々の中に，当の子どもの父母以上に強いものとして意識されているからなのかもしれない。

その他，筆者自身が個人的に興味をもったデータは，オルガン・ピアノなどの音楽関係のおけいこごと・ならいごとに対する保育者たちの一種の寛容さである。否，むしろ，積極的とでも言い得るような態度である。「『害』になる」という意見は，300名近い保育者側回答者の中に1人としてみられていないのである。これと似たような回答傾向は，体育関係のスイミング教室などにもみられている。

以上に示したような保育職たちの意識構造は一体どのような要因によって規定されているのだろうか。保育職がもつ諸特性や他項目への回答の傾向から，その一端について明らかにしておくことにしよう。

まず,「お習字」について述べておくと，保育職の年齢が高くなるにつれ,「園での活動だけで十分」という意見が強くなる。これは，保育職経験年数の長さとのクロス・データをとった場合でも同様であり，年齢と保育職経験年数のどちらがより強い影響をおよぼしているのかは明確にできないが，ご年配の保育職の中に「お習字」に対するより消極的な態度が存在していることは確かなようである。

次に「オルガン・ピアノ」などの音楽関係の「おけいこごと」についてみると，若い層の保育職に「是非ともやらせておくべきものだと思う」という，積極的かつ肯定的な意見を特徴的に見出すことができる。若干解釈に苦しむのだが，若い保育職ほど，日常の保育実践の中でピアノや各種の楽器に対する親しみ等をもっていたり，あるいは，自分自身が子供時代から現在までを通じてそれらを習っていた経験を多くもっていたりするから，ということでもあるのだろう。確かに,幼稚園の先生というと筆者自身,「ピアノ」という連想をもちやすいのである。

「スイミング・スクール」など，体育関係のおけいこごと・ならいごとについてはどうであろうか。保育職の経験が長くなればなるほど「園での活動だけで十分である」とか「むしろ『害』になる」というような消極的意見が目立つようになる。それぞれの教室における具体的な指導の内容や方法は千差万別，多種多様なのであろうが，経験のある保育職ほどこのような体育関係のならいごとに対する消極的姿勢を失っていくというのは，少し興味のあるデータであるとはいえないだろうか。

最後に,「家庭用の個人学習教材」についてみておくことにしよう。

やはり保育職の年齢が高まると,「園での活動で十分」とか「むしろ『害』になる部分が大きい」という消極的な意見が多く見られるようになり,「やらないよりはやった方がよい」というような消極的肯定意見だけではなく,「子供が興味や関心をもっているのであれば」というような「子供中心」的な考え方をとる人も，比率の上で減ってくるのである。それだけ，就学前期における「知的教育」に対する抵抗感には根強いものがあるということなのであろうか。

なお，反対意見の多かったここでの「知的能力」という質問項目について,「この時期にこそ」という積極的な肯定意見をもっている保育職には,「父母がやらせようと思っているのならば」という条件つきの考え方をする人が多く，また,「もう少し後の時期でもよい」と思っている人には,「『害』になる」「園での活動で十分」といった考え方をする人が多いという結果が表れている。また,「家庭用個人学習教材」についても，これと全く同様の傾向が見出されている。

総じて，年齢の高い，あるいは保育職経験年数の長い保育職の群に,子供の「おけいこごと・

ならいごと」に対する消極的姿勢が比較的明確に看取できたということを，ここでのポイントとして指摘しておきたいと思う。

ルソー．J.J.という有名な幼児教育思想家は，幼児期の子供にとってまず必要なものは，健康な体であり，次いで感性であると説いている。保育職たちの意識や感覚の中にも，おそらくそれに近いものがあるようだ。ただ，どうしても過熱しているとしか言いようのない現在の学校教育の状況と，それに惑わされるような形にある父母たちの教育意識や教育要求などにさらされながら，ひとり保育職たちがそのような考え方を純粋な形でどこまで守っていけるかどうかは，残念ながら筆者にはわからない。

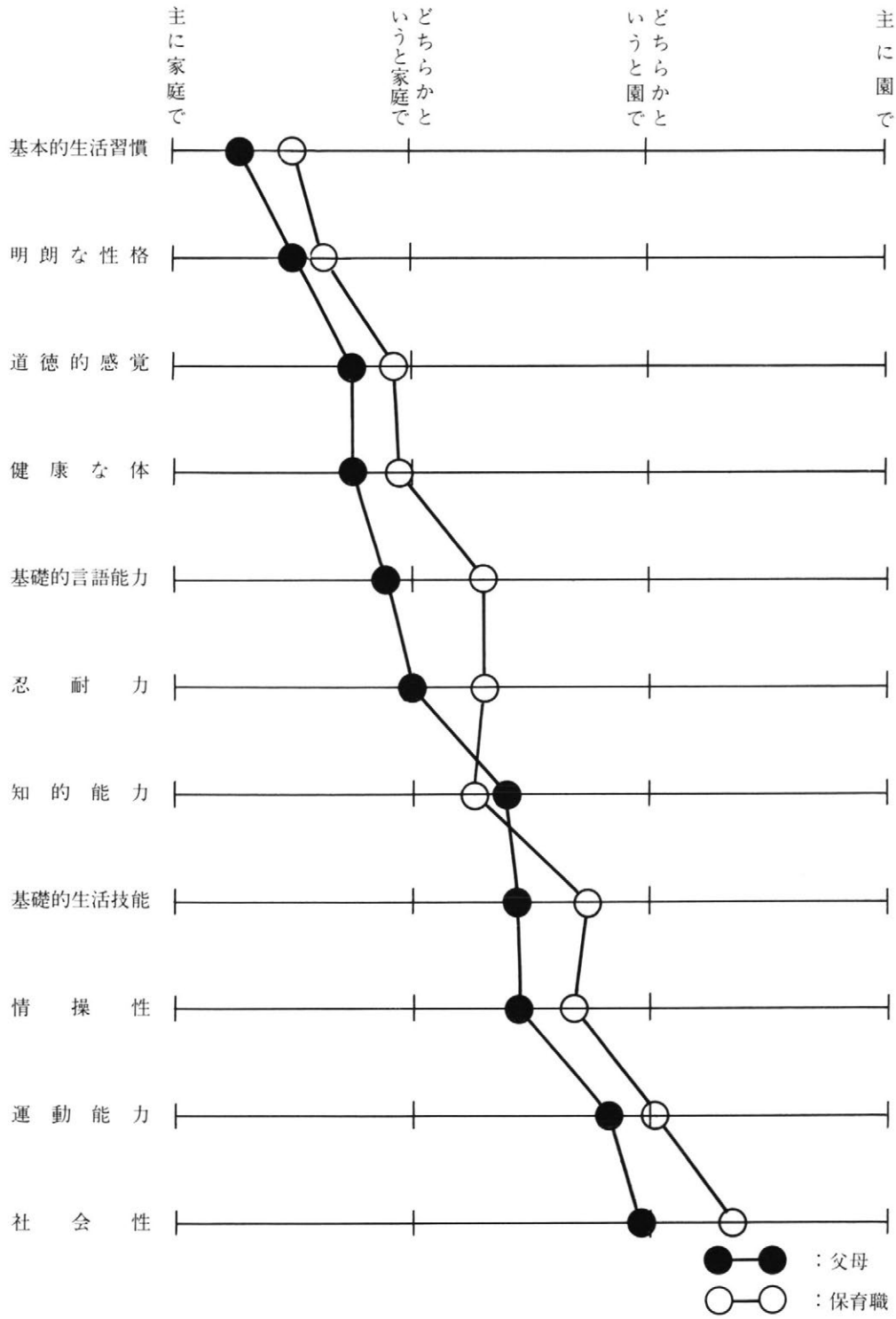
3 家庭と幼稚園との役割分担意識

就学前期にある子供に対する教育の場の中心は，何といっても「家庭」であろう。しかし，5歳児における幼稚園あるいは保育所への在籍率が9割をはるかに超える，世界でも最高水準の就学前教育システムをもつわが国では，その幼稚園・保育所が子供の就学前教育に対してもつ位置づけというか重要性には絶対無視できないものがある。つまり，現在のわが国では，就学前教育は家庭と幼稚園・保育所との両者のバランスの上に成り立っておこなわれていると考えなければならない。ここでは，父母や幼稚園教諭たちが，子供の教育をめぐって，どのような「家庭と園との役割分担」の認識をもっているかについて明らかにしていくこととする。

図Ⅲ3—1は，既に述べてある今次の調査において採用した11の教育内容領域項目について，それらが「主に家庭において」指導されるべきものと考えるのか，「どちらかというと家庭において」指導されるべきものと考えるのか，「どちらかというと園において」指導されるべきものと考えるのか，あるいはまた，「主に園において」指導されるべきものと考えるのかを答えてもらった結果を図表化・グラフ化したものである。それぞれの意見や考え方に対して便宜的に4点，3点，2点，1点という点数を与え，それぞれの平均値を算出するという方法を用いて，グラフを作成した。図Ⅲ2—1にあるのと同様に，●—●は父母の，そして○—○は保育職の回答(意識)傾向を表している。

このグラフ全体を眺めてみてわかることは，総じて，父母の方が，就学前教育における家庭の役割を大きなものとしてとらえているということであろう。ほとんど全ての教育内容項目について，保育職たちの意識得点よりも「主に家庭で」側の位置に得点結果(平均点)がプロットされている。そのような傾向の唯一の例外は「知的教育」，つまり「ひらがなや簡単な計算など，基本的な知的能力を身につけさせること」という項目についてのデータであって，保育職たちの方が「家庭で」とする意識を強くもっていることが理解できる。父母側と保育職側との間での「『家庭で』意識」のバランスが，ここで唯一崩れている。

図Ⅲ3-1　就学前教育をめぐる「役割分担」意識（父母・保育職）



11の項目中,「家庭で」と回答される比率の高い教育内容領域は,「基本的生活習慣」「明朗な性格」「道徳的感覚」「健康な体」「基礎的言語能力」「忍耐力」「知的能力」などである。きわどい中間的段階に位置しているのが「基礎的生活技能」「情操性」であり,「運動能力」と「社会性」については,明らかに「園で」という役割分担意識を父母・保育職両者からもたれていることが理解できると思う。とくに,家庭という基本的(第1次的)な人間関係から外に一歩踏み出し,2次的人間関係(社会)を形成・発展させ始めた幼稚園児たちにとって,幼稚園における友だちや先生との関係は,そのような新たな人間関係を維持していく能力や技能を獲得する重要な場であり機会である。そのような意味においても,とりわけ「社会性」などという領域については「園で」というとらえ方がなされて当然なのだと思われる。

1. 父母側における「役割分担」意識の分析

まず,父母の側における家庭および園との役割分担意識を規定する諸要因について探っていくこととしよう。

(1) 「基本的生活習慣」について

「主に家庭において指導されるべきもの」という考えの人には,家庭での指導に対して「とても力を入れている」と自己評価する割合が高く,逆に,「園で」とするグループには「普通・あまり指導していない」と自己評価する割合が高くなる。その因果関係については,ここでは棚上げさせていただくことにしておいて,まずは,基本的に,「『家庭においてすべきこと』→『家庭でおこなう』」という一種の構造が存在することを指摘しておくことにしよう。

(2) 「道徳性」について

(1)と全く同様の傾向にある。

(3) 「健康な体」について

統計的意味をもつデータとしては,「主に家庭において指導されるべきもの」という考え方をもつグループの中に,「(家庭で)とてもよく指導している」との高い自己評価をくだす回答者の割合が高くなっていることを示すものがある。

(4) 「基礎的言語能力」について

(1)と同様の傾向を見出せる。

(5) 「忍耐力」について

どのような理由によるのかは明確でないが,「主に園において」指導されるべきものと考えるグループ,および「主に家庭において」指導されるべきものと考えるグループの双方において,「(家庭において)とてもよく指導している」という自己評価に対する支持率が高くなっている。この内容領域に関しては,「家庭で」と考えるにしろ「園で」と考えるにしろ,父母においてその必要性が意識されているならば,家庭における何らかの指導がおこなわれているということなの

であろうか。

また，将来展望とのクロス・データをとってみると，「園で」派の中に，「今まで以上に力を入れたい」とする回答者の割合が多いという結果になっている。

(6)　「知的能力」について

「園で」派の中に「(家庭では)あまり指導はしていない」という人が多くみられるという傾向が見出せる。また，将来展望との関係を見てみると，「園で」派には「今まで以上に力を入れる」という回答者が少なく，逆に，「家庭で」派には「今まで以上に力を入れよう」としている人が多い傾向にあることがわかる。

「知的能力」に関する指導をめぐる「役割分担」意識の全体像では，むしろ「園で」というイメージを形成していたわけであるが，もう少し詳細に眺めていくと，家庭での積極的な指導を考えるグループが特徴的な性格をもつ集団としてクローズ・アップされてきそうである。

(7)　「基礎的生活技能」について

「主に園で」派の中に「あまり指導していない」という回答者が多くみられ典型的な「園まかせ」的意識構造を形成していると予想される。この傾向は，家庭における指導の将来展望とのクロス・データをとってみると，また違った形で目にすることができる。すなわち，「主に園で」派には「力を入れるつもりはない」という意見が多くなっているのである。

その反面，「主に家庭で」派の回答者の中には「今まで以上に指導に力を入れたい」という意見が多く，「園まかせ」派の消極的態度および「家庭で」派の積極的態度といった二極構造を指摘できると思う。

(8)　「情操性」について

「主に家庭で」と考えている父母は家庭における指導も熱心におこなっていると自己評価しているし，「主に園で」という父母には，「(家庭では)あまり熱心な指導をしていない」と答える人が多い。

2.　保育職における意識の分析

統計的な意味を見出せ，かつ，何らかの解釈が可能であるようなデータは見つからなかった。本報告書では省略させていただきたい。

(帝京大学講師　久保田力)

4 家庭および園での教育に対する父母・保育職の意識

A 家庭教育に対する評価と期待

1. 本節の調査のねらい

最近の家庭における子育てに関しては，さまざまな見解が述べられている。一人かせいぜい二人程度しかいない我が子への，過剰な期待があるとか，子供をペット化しているとか，また他方では，子育てを知らない親が増えたなどということもよく聞かれる言葉である。

一方，親の側からは，就学前教育への要求が高くなったとされたりなど，各立場からいろいろな声が出ているが，実際には，その子育ての中身はどうなのであろうか。そして，その家庭教育（子育て）に対して，親自身はどう思っているのであろう。そのあたりの親の意識を知ることが，本調査の大きなねらいである。

ちなみに，本調査の親に配布した調査表では，家庭での「教育」という言葉を用いている。この家庭における「教育」としては，親自身，何を意識するであろう。もちろん，家庭の教育と子育てとは，不可分なものであると思われるが，特に，教育に近いものとしては，何を指すと思うのであろう。家庭でなるべく話をするとか，いい音楽を聴くとかいったことを，教育の延長上にあるものとしてとらえているのであろうか。それともお金を出してどこかへ通わせることを教育と思っているのであろうか。

この辺の親の意識を区別し，見定めていくことはむずかしいと思われるが，親が家庭での教育として何をどの程度に意識し，その実践に対しての自己評価はどうなのかを中心に分析をすすめていきたい。

また，子供を日々預かっている幼稚園などの保育者側が，家庭における「教育（子育て）」をどんな目で見守っているかも知りたいところである。本調査では，保育者に対しては家庭での「子育て」という言葉を用いているが，この保育者側からの意見も分析してみたい。

本節では，以上のような目的のもとに，家庭における教育（子育て）に対する，親と保育者の意識を次のような柱のもとに分析・検討をしてみた。

2 —(1) 親の自己評価（家庭でよく指導していると思うか）
　(2) 親の今後の意向（今後力を入れていきたいか）
　(3) 親の自己評価と今後の意向との関連
3 —(1) 保育者の家庭教育に対する評価（熱心な指導をしている家庭が多いか）
　(2) 保育者の親への今後の期待（今後家庭で力を入れてほしいか）
4 　親と保育者の意識のずれ

2.　親の意識

(1)　親の自己評価（家庭でよく指導していると思うか）

①　11項目についての親の自己評価

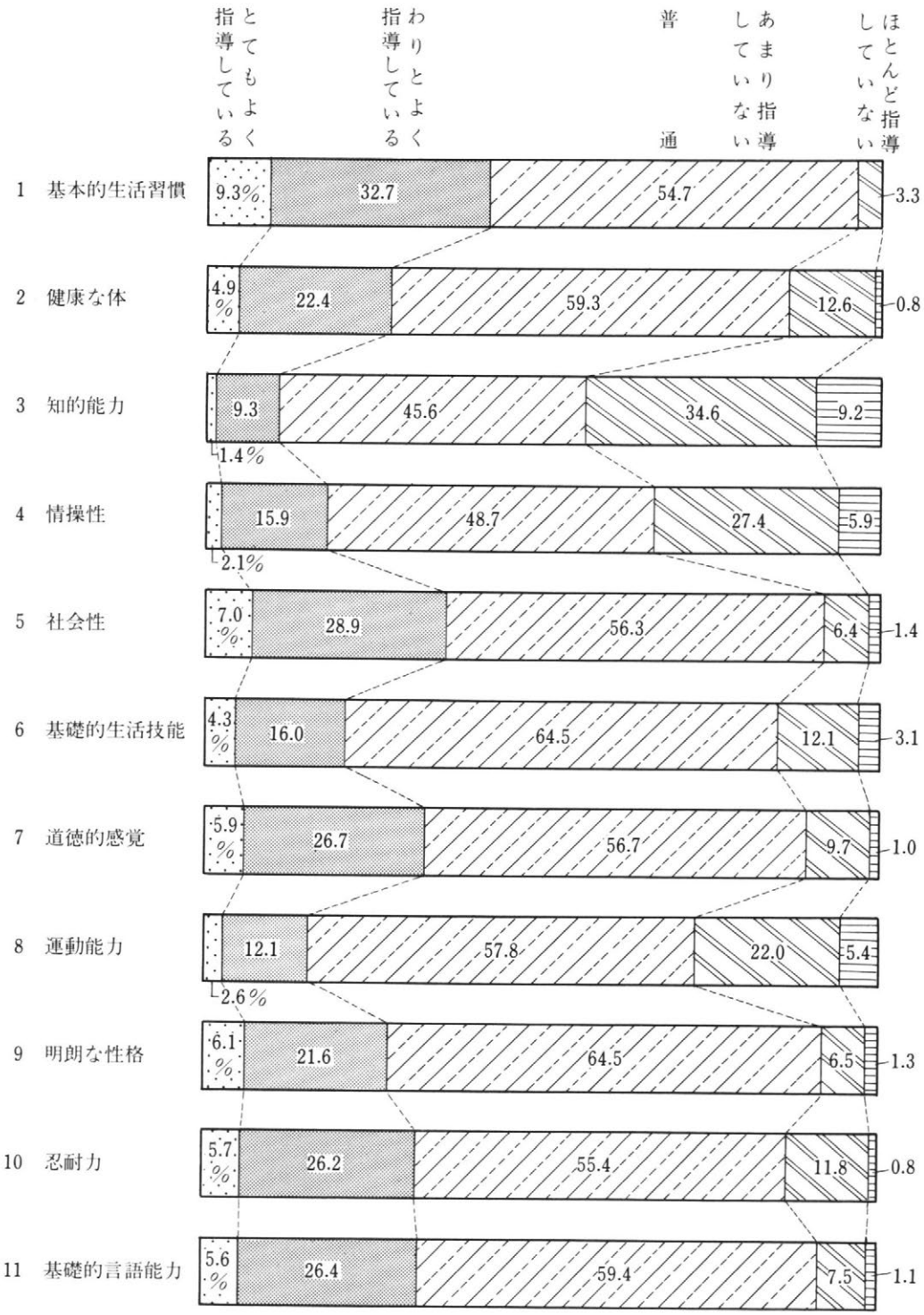
前節などで既出の，幼児の教育において基本的と思われる11項目について，親自身が家庭でどう指導しているかの自己評価を，「とてもよく指導している」「わりとよく指導している」「普通」「あまり指導していない」「ほとんど指導していない」まで，５段階評定してもらったものが，図Ⅲ④－Ａ－１である。

これを見ると，ほとんどの項目において，10～40％の割合で，自分は「とてもよく」「わりとよく」指導している，或いは，50～60％前後の者は，まあ「普通」であるとする結果であった。

しかしその中でも少し差があり，３－ひらがなや計算などの知的能力をつけること，４－絵や音楽などを見聞きして情操性を養うこと，８－基本的な運動能力を身につけることは，家庭での指導に少し欠けるきらいがあると答えている。

３－知的能力の項目が指導に欠けるとしているのは，未だ子供には必要ないと思っている者もいるであろうし，建前論が出てきてしまっているのもあるかもしれない。他の２項目は，家庭でも十分にできることのようにも思えるが，親にとってみれば，他の項目とは少し異なるものと映るのかもしれない。また，これを指導するのは，年齢がもう少し上がってからとか，親が指導するものではないととらえているのかもしれない。

図Ⅲ4-A-1　親の自己評価(家庭でよく指導していると思うか)



② 「この時期の指導の必要性」を感じている親の自己評価

前節で，この11項目がこの時期にどのくらい必要と思うかを尋ねた。そこでは，全般的にはどの項目もまあ必要と答えていたが，特に，1―基本的生活習慣，2―健康な体，5―社会性，9―明朗な性格，11―基礎的言語能力，の項目で必要性が高いとみなされていた。逆に，3―知的能力の項目は必要性をあまり感じてはおらず，29%の者はもう少し後で，と答えていた結果であった。

この前節のデータと，家庭での指導の自己評価とのクロス集計をしてみた。表Ⅲ④―A―1，表Ⅲ④―A―2には，4―情操性と，3―知的能力のクロス結果をあげてある。4―情操性は，この時期の指導の必要性が,「まあある」とされていた項目，3―知的能力は，必要性があまりないとされた項目である。いずれの場合でも,「この時期こそ必要」と思っている者が，自分は家庭では「とてもよく」「わりとよく」指導しているとしているのがわかる。

また，その他，大多数の者がこの時期の必要性を認めていた，1―基本的生活習慣など多くの項目で，いずれも,「この時期に必要」と思う者ほど，家庭での指導の自己評価がよくなっている。当然の結果と言えるかもしれないが，これらのデータを見ていると，個々の家庭の「必要性」の意識の違いにより，親の自己評価ばかりでなく，実際の家庭教育の内容にも，大分差が出てくるようにも思われる。

表Ⅲ④―A―1　この時期の必要性×親の指導の自己評価

4―情操性

%

		親の自己評価			合計 (N)
		わりと・とてもよく指導	普通	ほとんど・あまり指導していない	
必要性	この時期こそ	35.0	43.5	21.5	100.0 (177)
	この時期かなり	15.4	58.1	26.6	100.0 (241)
	この時期ある程度	11.3	46.7	42.0	100.0 (257)
	もう少し後の時期	2.6	28.2	69.2	100.0 (39)

DF＝6
P≦.01

表Ⅲ④－A－2　この時期の必要性×親の指導の自己評価

3－知的能力

%

		親の自己評価			合計 (N)
		わりと・とてもよく指導	普通	ほとんど・あまり指導していない	
必要性	この時期こそ	15.9	54.6	29.6	100.0 (44)
	この時期かなり	30.0	52.9	17.1	100.0 (70)
	この時期ある程度	11.3	51.1	37.5	100.0 (397)
	もう少し後の時期	1.9	30.4	67.6	100.0 (207)

DF＝6
P≦.01

③「家庭で指導すべき」と考えている親の自己評価

やはり前節で，11項目をそれぞれ，家庭と園のどちらですべきかを尋ねている。1－基本的生活習慣，2－健康な体，7－道徳的感覚，9－明朗な性格，10－忍耐力，11－基礎的言語能力，の項目は，80～90％にわたり，家庭ですべきと答えていた。また，3－知的能力，4－情操性，6－基礎的生活技能は，家庭派と園派が相半ばし，5－社会性，8－運動能力は，77～83％の者が園ですべきと答えていた結果であった。

これらの結果と，家庭での指導の自己評価とのクロス集計をしてみたのであるが，表Ⅲ④－A－3は，6－基礎的生活技能についての結果である。この項目は，どちらで指導すべきかで，家庭派と園派が，相半ばしていた項目であるが，この基礎的生活技能を教えるのは，「主に」「どちらかといえば」家庭で，と答えていた家庭派の者の，自分の家庭での指導の自己評価が高い結果であった。

また，園で指導すべきと答えている者が多かった，5－社会性と，8－運動能力の項目では，この両者に関連は認められなかったが，その他，家庭で指導すべきとされていた多くの項目でも同様に，「家庭ですべき」と思う者ほど，家庭での指導の自己評価が高い結果が出ている。家庭ですべきと思う者の，家庭での実際の指導内容は定かではないが，自己評価に関する限りでは，よしとされているようである。

表Ⅲ④—A—3　家庭か園か×親の指導の自己評価

6—基礎的生活技能

%

		親の自己評価			合計 (N)
		とても・わりと指導	普通	ほとんど・あまり指導していない	
家庭と園のどちらで	主に家庭で	36.4	51.1	12.5	100.0 (88)
	どちらかといえば家庭	23.4	64.8	11.9	100.0 (261)
	どちらかといえば園	13.6	67.6	18.8	100.0 (330)
	主に園で	17.7	67.7	14.7	100.0 (34)

DF＝6
P≦.01

④「学習教材」を使用している親や,「習いごと」をさせている親の自己評価

第2章において，家庭教育の実態として，習いごとの有無を尋ねているが，その結果と家庭での指導の自己評価の結果とのクロス集計をしてみた。表Ⅲ④—A—4は，学習教材を使用している者の，家庭での知的能力の指導に関する親の自己評価のクロス表である。データとしては，あまりクリアなものとはなっていないが，学習教材を現在，或いは以前に使用していた者は，使ったことのない者に比して，家庭での知的能力指導の自己評価はやや高いものとなっている。

表Ⅲ④—A—5は，オルガン・ピアノの習いごとと，家庭での情操性指導の自己評価のクロスである。こちらの方は，学習教材よりも，クリアな結果となっている。オルガン・ピアノへ通わせている者は，家庭での情操性指導を,「とても」「わりと」よくしていると答え，通わせたことのない者は，情操性指導をしていないと答えている。

その他，絵画教室へ通わせている者は，情操性を家庭でよく指導しているという結果も出ている。

これらの結果をみると，親たちは，情操性を養うのは家庭では無理だと思う者が多いようである。しかし逆に，習いごとをしていれば，情操性は養われるであろうか。このあたりには，問題点を感じざるを得ない。

表Ⅲ④—A—4　学習教材の使用×親の指導の自己評価

3—知的能力

%

		親の自己評価			合計(N)
		わりと・とてもよく指導	普通	ほとんど・あまり指導していない	
学習教材の使用	現在使用	17.5	52.5	29.9	100.0 (177)
	以前使用	23.6	39.5	36.8	100.0 (38)
	使ったことはない	7.4	43.0	49.5	100.0 (472)

DF＝4
P≦.01

表Ⅲ④—A—5　オルガン・ピアノの習いごと×親の指導の自己評価

4—情操性

%

		親の自己評価			合計(N)
		わりと・とてもよく指導	普通	ほとんど・あまり指導していない	
オルガン・ピアノ	現在通わせている	29.1	52.4	18.4	100.0 (206)
	以前通わせていた	23.5	52.9	23.5	100.0 (17)
	通わせたことはない	12.6	46.8	40.6	100.0 (468)

DF＝4
P≦.01

また，スイミングを習わせている者と，運動能力を家庭で指導しているかどうかの自己評価の結果もクロス集計してみたが，こちらの方の関連は認められなかった。スイミングを習わせることは，親にとっては，運動能力を高める目的でのことではないのかもしれない。

以上，家庭教育にも，さまざまなものがあると考えられるが，こと，知的能力を高め，情操を養うのは，外部の機関に委託することであるという意識があるようである。幼児の知的能力や情操を養うのに，親のかける言葉や親の感性の大切さを思うとき，この結果は少し寂しいようにも思えるのである。

その他，この親の家庭での指導の自己評価の結果と，親の年齢や学歴などとの関連は，認められなかった。特に知的能力指導に関しては，地域性などもあるのではないかとも思われるが，今回の調査ではそこまでの分析はしきれなかった。一部の親の行動の傾向が，親全体のものであるように言われることも，割合に多いように思われる。そのことを考えれば，もう少し詳しい分析ができなかったことは，今後の課題として残るであろう。

以上，親の家庭教育に対する自己評価の結果をみてきたわけであるが，全体的に言えば，自己評価は普通かそれ以上というものであった。そして，この時期の指導の必要性を感じ，または家庭での指導の大切さを感じるなど，家庭教育に対して意識の高い親は，自分の指導に対する自己評価も高いようである。しかし，自分はよく指導しているといっても，実際にどんな家庭教育がなされているかは，定かではない。親は，自分が育てられたように我が子を育てる，とはよく言われることであるが，よく指導していると思っている家庭の中にも，また，さまざまな「教育」があるのかもしれない。

(2)　親の今後の意向（これからどのくらい，力を入れていきたいか）

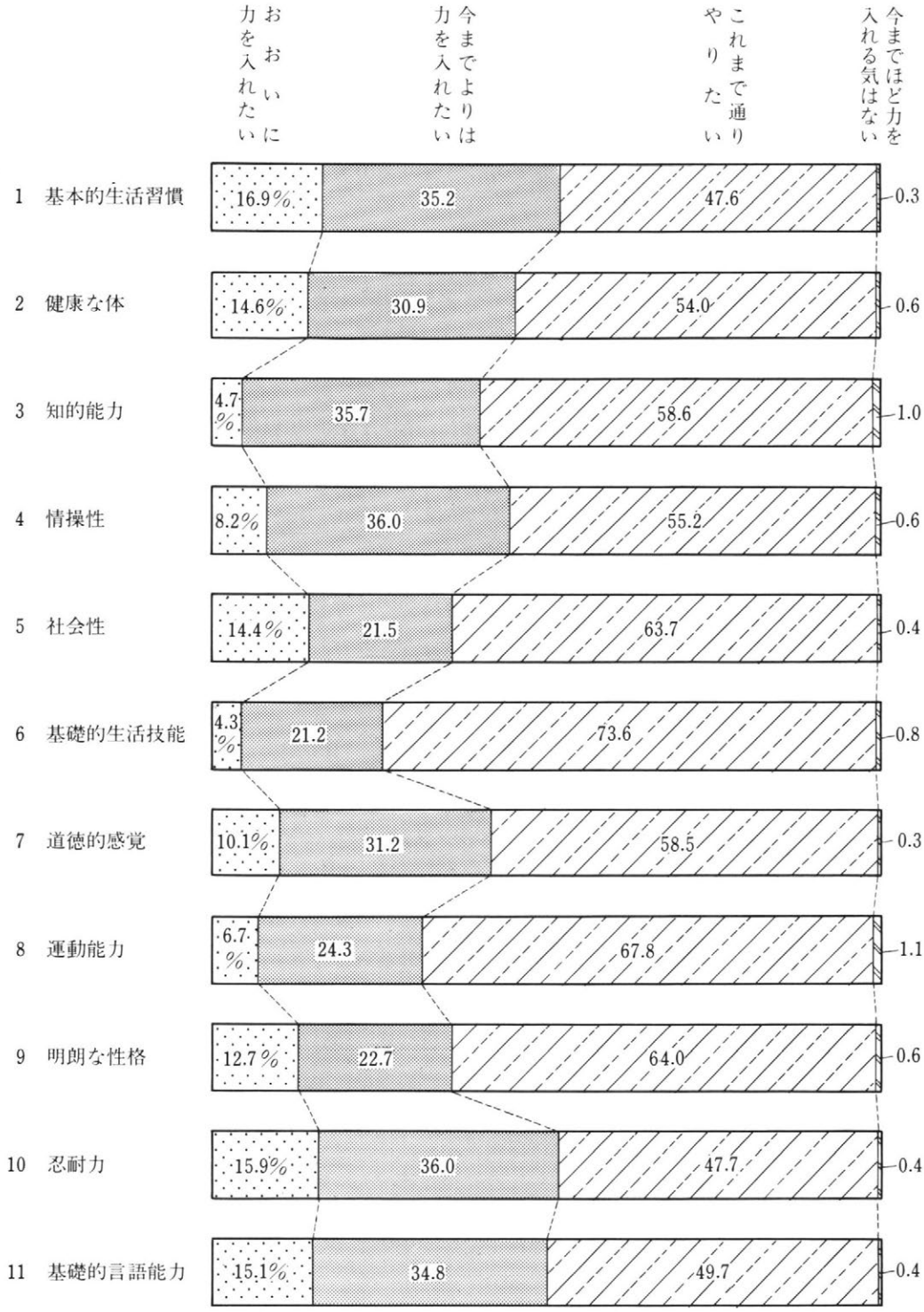
①　11項目についての親の今後の意向

今度は，同じ11項目について，これからどのくらい力を入れていきたいかという，親の今後の意向を尋ねてみた。スケールはそれぞれ「おおいに力を入れたい」「今までよりは力を入れたい」「これまで通りやりたい」「今までほど力を入れる気はない」の4段階評定である。

図Ⅲ④—A—2は，その結果である。1—基本的生活習慣，2—健康な体，3—知的能力，4—情操性，7—道徳的感覚，10—忍耐力，11—基礎的言語能力，の項目においては，40～53％の者が「今までよりは」或いは「おおいに」力を入れていきたいとしている。

また，5—社会性，6—基礎的生活技能，8—運動能力，9—明朗な性格，の項目は，25～36％の者は力を入れたいとしているが，あとの者は，せいぜい「これまで通りに」としている。

図Ⅲ4-A-2　親の今後の意向(これからどのくらい,力を入れていきたいか)



この結果を，先にあげた，家庭での指導の自己評価の結果と関連させてみてみると，親のそれぞれの項目での意識の違いが少し明らかになってくる。自己評価の結果と，これからの意向の結果の比較から次の４つのグループに分けて，項目検討をしてみた。図Ⅲ④－Ａ－３は，そのまとめである。

a.　家庭ではわりとよく指導しており，これからも力を入れていきたいもの
b.　家庭ではまあまあに指導していたが，これからもそう力を入れず，せいぜいこれまで通りにとするもの
c.　家庭ではあまりよく指導していなかったが，これからは力を入れていきたいもの
d.　家庭ではまあまあの指導であったが，これからもそう力を入れずせいぜいこれまで通りにとするもの

ａグループには，１－基本的生活習慣，２－健康な体，７－道徳的感覚，10－忍耐力，11－基礎的言語能力，の項目が含まれる。これらは，今の時点でも，そして今後も大切なものであると認識されているものである。

ｂグループには，５－社会性，９－明朗な性格，の２項目が含まれている。これからはあまり力を入れるつもりのない項目にあげられているものである。特に社会性については，子供の年齢が高くなり，集団での動きも多くなるはずであるにもかかわらず，親が重要視していないことは，少々気になるものがある。社会性とは，友達と仲よく遊んだりすることばかりを指すのではないであろう。けんかをしたり，自己主張をしたりすることも大切である。しかしそこにはやはり集団の中での上手なやり方というものがあるはずであり，それをこれから学んでいくべき年齢であろう。力を入れなくともよい項目でもないような気もするのである。

それとも親は，それを教えるのは，学校という所であり，自分たちの役割ではないとしているのかもしれない。しかし，親の社会生活の中での「みんなのためになるのなら」という心持ちや，逆に,「自分たちさえよければ」の感覚は，自然に子供に伝わるものであろう。この社会性については，今後も親ももう少し大切にみていって欲しいもののように思われるのである。

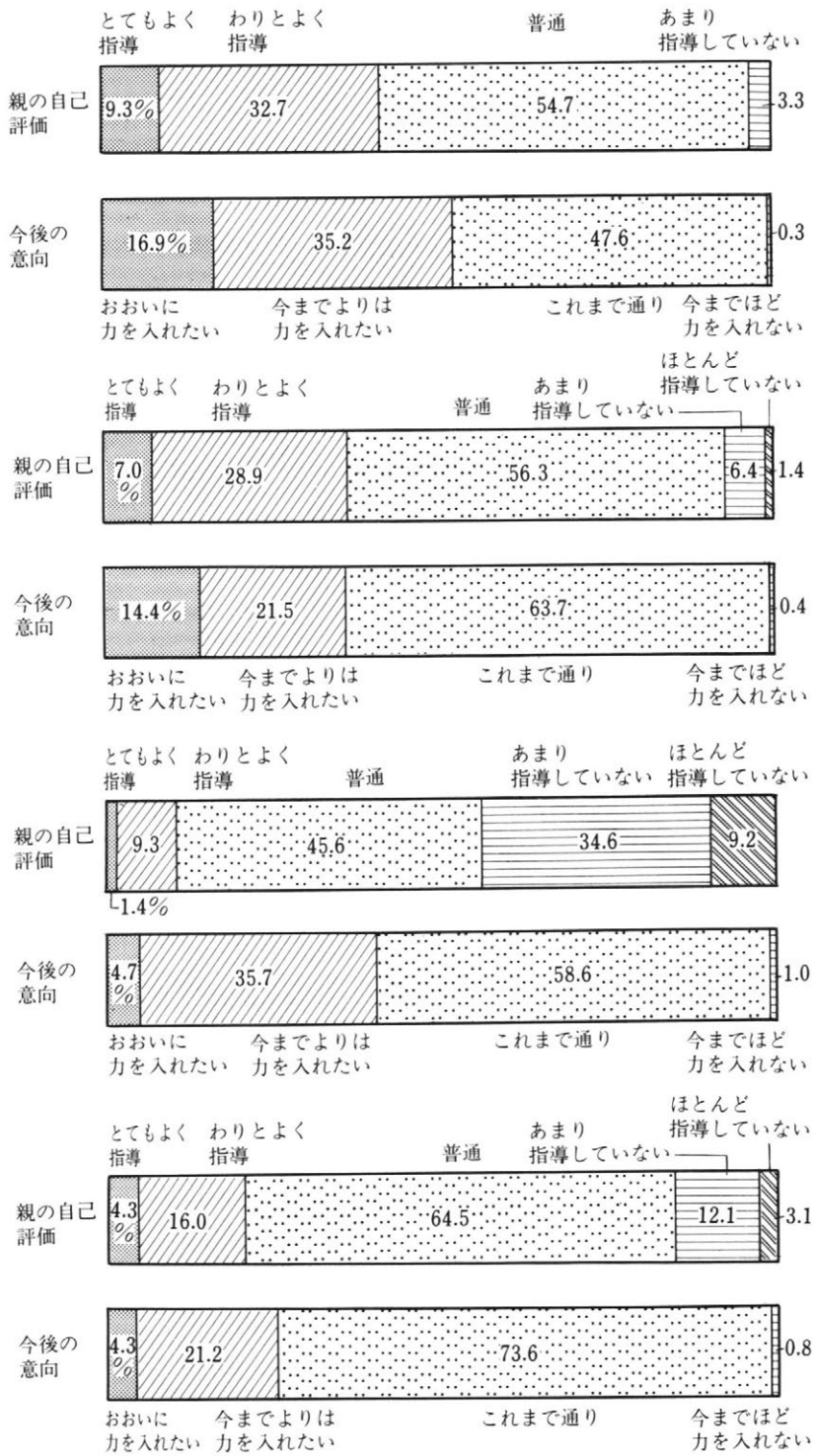
ｃグループには，３－知的能力，４－情操性，の項目が含まれる。今まではあまり指導していなかったが，これからは力を入れていきたいとする項目である。やはり,「ひらがなや簡単な計算など，基礎的な知的能力を身につけさせること」が入ってきている。「これから」というのが，一体いつからなのか定かではないが，当然と言えば当然かもしれない。親の本音と言えるであろう。

ｄグループには，６－基礎的生活技能，８－運動能力，の項目が含まれている。今まではま

あまあの指導であったし，これからもせいぜいこの程度で，という項目である。この中では，基礎的生活技能の項目が重要視されていないことが気になってくる。大きくなっても，卵が割れない，りんごの皮がむけない，ぞうきんがしぼれない，などの問題が，あちらこちらで指摘されているが，幼稚園の段階からもうあまり意識されないとなれば，この後，子供が練習をする段階などないであろうことは予想がつくようである。

運動することも，あまり重要視されていないもののようである。運動能力をつけるのは，幼稚園で，或いは小学校で，という役割分担の意識かもしれない。しかし，子供の運動能力が以前に比べて伸びていないこと，子供が外遊びをしたくとも，する場所も時間も友人もないことなどを考えると，ここにも大きな問題がひそんでいるように思われるのである。

図III4-A-3　親の自己評価と今後の意向についての項目検討



② 「この時期の指導の必要性」を感じている親の今後の意向

11項目がそれぞれこの時期にどのくらい必要と思うかの前出のデータと，これからの親の意向とをクロス集計してみた。3―知的能力，4―情操性，7―道徳的感覚，の項目で,「この時期こそ必要」とする者が，今後もおおいに力を入れたいとする結果であった。

表Ⅲ④―A―6は，3―知的能力についての，この時期の指導の必要性と今後の意向についてのクロス結果である。

知的能力の指導を,「この時期にこそ」または「この時期にかなり」必要と答えた者は，全体の16%にすぎなかったが，この少数派に属する者が，今後おおいに力を入れたいとしていたわけである。そして，前述2―(1)によると，その者たちが学習教材を使わせたり,「＊＊教室」へ通わせたりするのかもしれない。就学前教育の声が高いといっても，それは子供を持つ親全体の声ではなく，一部の親たちの声が高く聞こえているのかもしれない。その辺の見きわめも大切であろう。

表Ⅲ④―A―6　この時期の必要性×今後の親の意向

3―知的能力

%

		今後の意向				
		おおいに力を入れたい	今までよりは力を入れたい	これまで通り	今までほど力を入れる気はない	合計 (N)
必要性	この時期こそ	13.6	31.8	54.6	0	100.0 (44)
	この時期かなり	12.9	52.9	34.3	0	100.0 (70)
	この時期ある程度	4.3	38.6	56.6	0.5	100.0 (396)
	もう少し後の時期	1.0	25.1	71.5	2.4	100.0 (207)

DF＝9
P≦.01

表Ⅲ④－A－7の情操性の項目も,「この時期こそ必要—24.7%」「この時期にかなり必要—33.9%」「ある程度は必要—36.0%」と，答えにばらつきがあったものの1つである。つまり，この時期に情操性を養う必要性を高く認めている層が，今後力を入れていきたいとしているわけであり，これ以後，家庭差が大きく出るものの1つであると言えるかもしれない。

表Ⅲ④－A－7　この時期の必要性×今後の親の意向

4－情操性

%

		今後の意向				
		おおいに力を入れたい	今までよりは力を入れたい	これまで通り	今までほど力を入れる気はない	合計 (N)
必要性	この時期こそ	16.4	32.8	50.9	0	100.0 (177)
	この時期かなり	10.4	38.6	51.0	0	100.0 (241)
	この時期ある程度	2.0	36.6	59.9	1.6	100.0 (257)
	もう少し後の時期	0	28.2	71.8	0	100.0 (39)

DF＝9
P≦.01

③「家庭で指導すべき」とする親の今後の意向

11項目を家庭と園のどちらで指導すべきかの前出の結果と，親の今後の意向をクロス集計してみた。表Ⅲ④－A－8は，3－知的能力のクロス結果であるが,この他には,7－道徳的感覚の項目で，家庭ですべきとする者が，今後もおおいに力を入れていきたいとする，有意差が出ていた。

前述の②での「この時期の必要性」ほどクリアな結果とはなっていないが，このクロス結果

とも合わせてみてみると，例えば道徳的感覚というものは，この時期にとても必要であり，また，家庭で指導すべきものであるとする層が，今後も家庭でおおいに力を入れていきたいと思っているわけである。そうではないとする者も当然いるわけであり，家庭による違いが大きいことをうかがわせる結果である。また，表のように，知的能力も同様の項目である。この時期に必要と思い，また，家庭ですべきと思っている層が，知的能力を高めることに特に力を入れることになるようである。

表Ⅲ④－A－8　家庭か園か×今後の親の意向

3－知的能力

%

		今後の意向				
		おおいに力を入れたい	今までよりは力を入れたい	これまで通り	今までほど力を入れる気はない	合計 (N)
家庭か園か	主に家庭で	12.7	38.0	49.3	0	100.0 (71)
	どちらかといえば家庭	3.9	32.9	62.9	0.3	100.0 (310)
	どちらかといえば園	4.0	38.4	56.9	0.7	100.0 (297)
	主に園で	3.1	34.4	53.1	9.4	100.0 (32)

DF＝9
P≦.01

(3)　親の指導の自己評価と今後の意向

親の家庭での指導に対する自己評価の結果と，今後の意向との関連を見てみた。表Ⅲ④－A－9は，1－基本的生活習慣の指導についての両者のクロス表である。

基本的生活習慣の指導を，現在「とてもよく」「わりとよく」していると自己評価している親

は，今後は,「これまで通り」くらいによく指導をしていきたいとする層と，今後，もっとおおいに力を入れたいとする層に分かれている。それに対して,「あまり」「ほとんど」指導してこなかったとする親たちは，今までよりは少しは力を入れていきましょうと反省をこめて語っているようである。

以上，さまざまな観点から分析をすすめてきたが，家庭教育の指導の親の自己評価という意識の面からみても，家庭をいくつかの層に分けて考えていくことが可能のようにも思えるのである。声高に叫ぶ一部の親たちばかりではなく，いろいろな意識をもつ親がいるのだということを，忘れてはならないように思われる。

表Ⅲ④―A―9　親の自己評価×今後の意向

1―基本的生活習慣の指導

%

		今後の意向				
		おおいに力を入れたい	今までよりは力を入れたい	これまで通り	今までほど力を入れる気はない	合計 (N)
親の自己評価	わりと・とてもよく指導	26.6	17.3	55.5	0.7	100.0 (301)
	普通	9.4	46.3	44.3	0	100.0 (393)
	ほとんど・あまり指導していない	16.7	79.2	4.2	0	100.0 (24)

3.　保育者の意識

(1)　保育者の家庭での子育てに対する評価（熱心な指導をしている家庭が多いか）

①　11項目についての家庭での子育てに対する保育者の評価

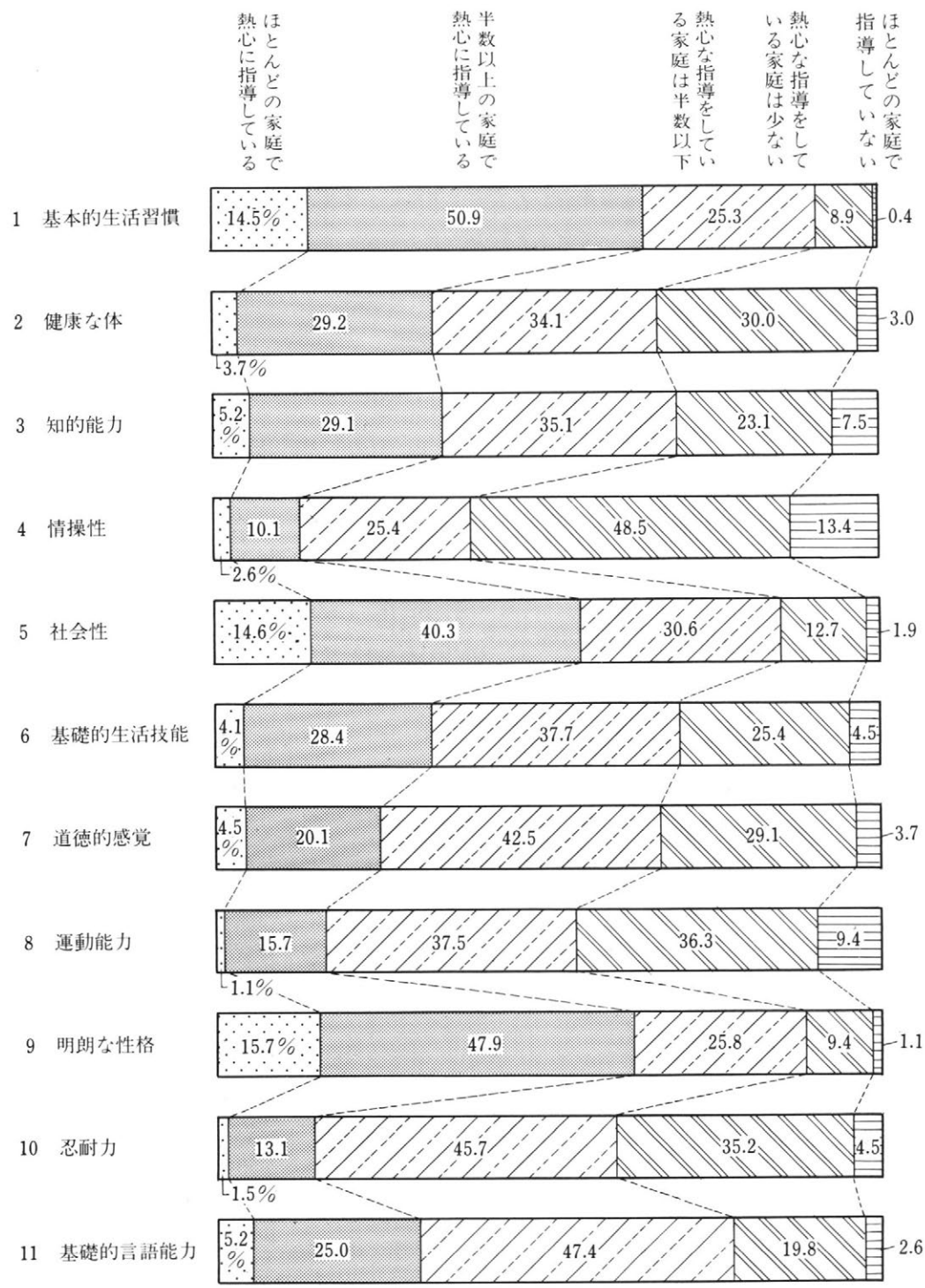
次に，保育者の家庭での子育てに対する評価をみてみたい。幼稚園などの保育職にある先生

方は，家庭の親たちの子育てをどうみて，どう評価をしているのであろうか。親たちと同じ11項目について，熱心な指導をしている家庭が多いかどうかを,「ほとんどの家庭で熱心」「半数以上の家庭で熱心」「熱心なのは半数以下」「熱心な家庭は少ない」「ほとんどの家庭でしていない」の5段階評価で答えてもらった結果が，図Ⅲ④－A－4である。

1－基本的生活習慣，5－社会性，9－明朗な性格，の各項目で，54～66％の者が半数或いはほとんどの家庭で熱心であるとしている。その他の項目では，熱心な家庭とそうでない家庭がまあ半々くらい。そして，4－情操性，7－道徳的感覚，8－運動能力，10－忍耐力，の項目では，75～88％の者が，熱心な家庭は半数以下，或いは，それ以上に少ない，としている。

特に，3－知的能力の項目では，熱心な家庭が多いと答える先生は，34％あり，熱心な家庭は少ないとする先生は，66％という数値になっている。親の自己評価との比較が問題になってくるが，この点については，次の節でみていきたい。

図Ⅲ4-A-4　保育者の家庭での子育てに対する評価(熱心な指導をしている家庭が多いか)



② 保育者の年齢と親の子育てに対する評価との関係

保育者の年齢は，20歳未満から50歳以上までさまざまであったが，この保育者の年齢と親の子育てに対する評価をクロス集計してみた。

表Ⅲ④－A－10にあるように，この両者に関連が認められたのは，1－基本的生活習慣の1項目のみである。

つまり，保育者の年齢が高くなる程，親の基本的生活習慣の指導が熱心ではないとして，家庭の子育てへの評価が低くなる傾向がある。保育職にある先生方は，基本的生活習慣の形成をとても大事にすることが多いようである。保育者の年齢が高くなるに従い，親がなっていないとする者が多いことは，親にとってみれば，頭の上がらないところであろうか。

表Ⅲ④－A－10　保育者の年齢×親の生活習慣指導への評価

%

		生活習慣指導への評価			
		ほとんど・半数以上が熱心	熱心な家庭は半数以下・少ない	ほとんどの家庭で指導していない	合計(N)
保育者の年齢	24歳以下	73.7	14.9	11.7	100.0 (95)
	25～29	74.7	22.8	2.5	100.0 (79)
	30～34	62.5	25.0	12.5	100.0 (32)
	35～39	16.7	66.7	16.7	100.0 (12)
	40～49	50.0	34.6	15.4	100.0 (26)
	50歳以上	47.8	43.5	8.7	100.0 (23)

DF＝10
P＜.05

(2)　保育者の親への今後の期待（今後家庭で力を入れてほしいか）

①　11項目についての親への今後の期待

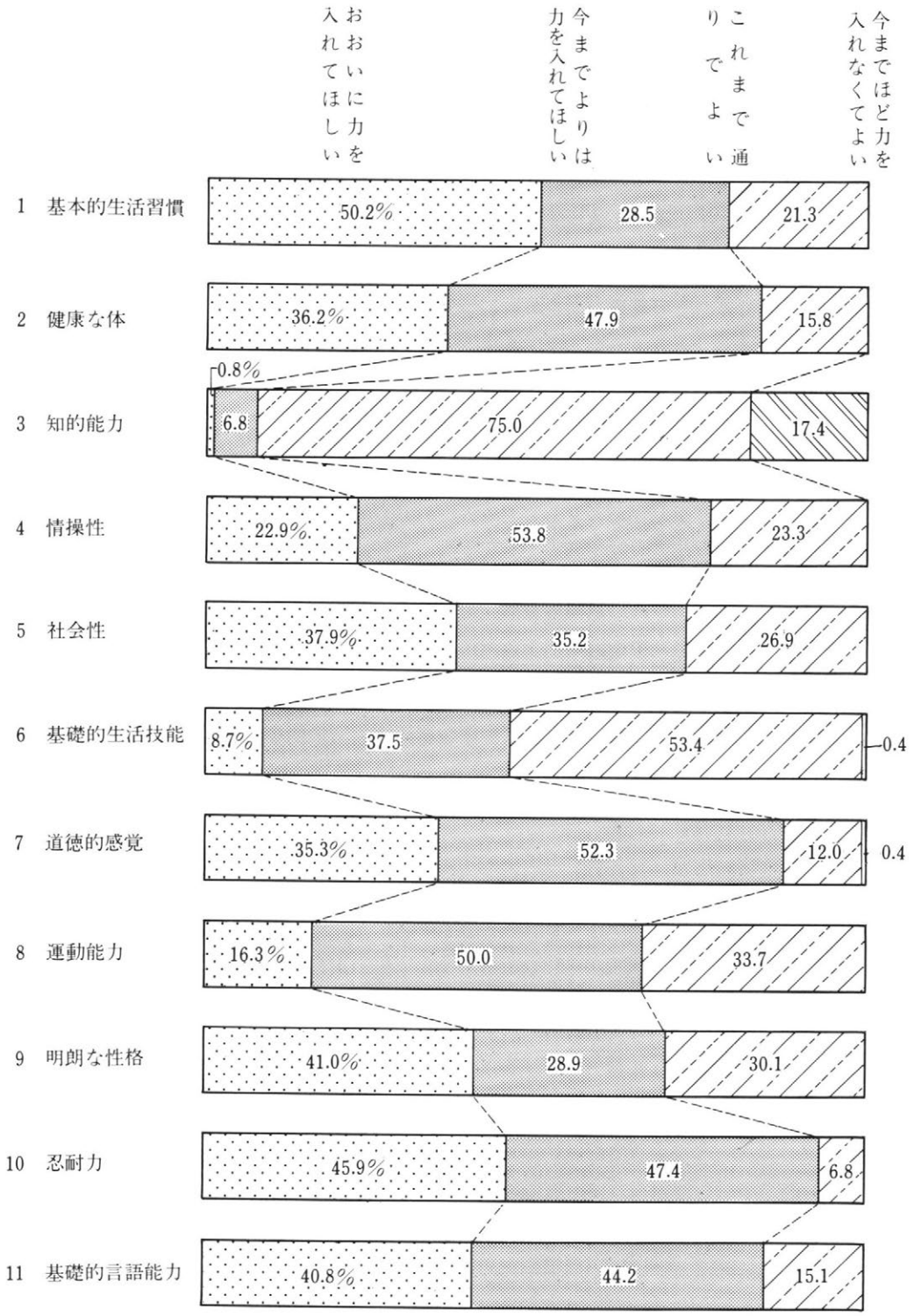
保育者の，家庭での子育てへの今後の期待はどうであろうか。11項目について，それぞれ「おおいに力を入れてほしい」「今までよりは力を入れてほしい」「これまで通りでよいと思う」「今までほど力を入れなくてよい」の4段階の評定で答えてもらったものが，図Ⅲ④－A－5である。全体的にみると，項目間で大分差がある結果となっている。

3－知的能力，6－基礎的生活技能，の2項目では，「これまで通りでよい」或いは「今までほど力を入れなくともよい」とする者が，合わせてそれぞれ，92%，54%となっている。特に，知的能力に関しては，その数値の高さが目につくところである。また，基礎的生活技能は，親のところでも述べたが，親も保育者も，「これまで通りの指導で」としている点が目につく。生活技能とは，エンピツやおはしを正しく持ったりすることだけで，これができればもうあまり力を入れなくともよいのであろうか。生活全体が便利になってきているので，あまり必要性は感じないところかもしれないが，生活をするための技能としては，もう少し高度なさまざまなものもあるように思われるところである。

その他の項目では，今までよりは，或いは今後おおいに力を入れてほしい，とするものがほとんどであり，66～94%の高い数値となっていた。

この数値を，前節で述べた家庭での子育てへの評価の数値と比較してみると，全体的には，家庭での子育てをまあまあであると認めている以上に，もっと，力を入れてほしいと望む項目が多くなっていることがわかる。特に，4－情操性，7－道徳的感覚，8－運動能力，10－忍耐力，の項目で，家庭に対する評価が低かっただけに，その親への期待の高さが目につく結果となっている。

図Ⅲ4-A-5　保育者の親への今後の期待(今後家庭で力を入れてほしいか)



② 保育者がみる「この時期の必要性」と親への今後の希望

保育者にも各11項目がこの時期に必要かを尋ねているが，その結果と親への今後の期待の結果をクロス集計してみた。

11項目中，3―知的能力の1項目のみは,「この時期にある程度は必要」と答えた者が，48%で,「もう少し後で」と答えた者が，49%と，その答えが半々となっていたが，他の項目はほとんどが,「この時期こそ」或いは「この時期にかなり」必要と，その時期的な重要性を訴えていた。

そして,この結果と,親への今後の期待とのクロスで関連が認められたものは，1―基本的生活習慣，2―健康な体，4―情操性，11―基礎的言語能力の各項目である。つまりこれらの項目においては，保育者は，その時期的な必要性を感じており，だからこそ今後も家庭に力を入れてほしいとしているわけである。

表Ⅲ④―A―11は，基礎的言語能力の結果である。基礎的言語能力の指導がこの時期こそ必要，と思っている者の，63%が，親へ今後おおいに力を入れてほしいとしている。

表Ⅲ④―A―11　この時期必要か×家庭への今後の期待

11―基礎的言語能力

%

		家庭への今後の希望			
		おおいに力を入れてほしい	今までよりは力を入れてほしい	これまで通り	合計(N)
必要性	この時期こそ	63.0	26.0	11.0	100.0 (100)
	この時期かなり	30.0	55.7	14.3	100.0 (140)
	この時期ある程度	13.0	56.5	30.4	100.0 (23)
	もう少し後の時期	0	0	100.0	100.0 (1)

DF＝6
P≦.01

知的能力に関しても，他の項目と同様である。この時期に知的能力を養うことを，ある程度認めた者と，そうではない者は，48%，49%と大体半々に分かれていたが，ある程度その必要性を認めた者は，それを今後家庭でしてほしいと言っている。数の上では少数であるが，保育者の１つの意見としてみておくべきもののように思われる。

③ 「家庭で指導すべき」と考えている保育者の親への今後の期待

保育者にも，各11項目を家庭と園のどちらですべきかを尋ねたが，その結果と親への今後の期待とのクロス集計をしてみた。

３―知的能力，７―道徳的感覚，９―明朗な性格，の項目で，家庭で指導すべきとする者に，今後も親は，おおいに力を入れてほしいとしている。表Ⅲ④―Ａ―12は，明朗な性格の項目のクロス表である。５%水準の差であるが，この傾向は読みとれるであろう。

表Ⅲ④―Ａ―12　家庭と園のどちらで×今後の家庭への期待

９―明朗な性格

%

		今後の家庭への希望			
		おおいに力を入れてほしい	今までよりは力を入れてほしい	これまで通り	合計 (N)
家庭と園のどちらで	主に家庭で	52.7	24.6	22.7	100.0 (110)
	どちらかといえば家庭	31.7	32.4	36.0	100.0 (139)
	どちらかといえば園で	11.1	44.4	44.4	100.0 (9)

DF＝4
P＜.05

④　家庭の「知的教育」に対する親への今後の期待と,「知能教室」に対する考え

家庭の知的教育に対する考えと，知能教室や学習塾に対する考えのクロス集計の結果が，表

Ⅲ④－A－13である。家庭での知的教育に対して，「おおいに」「今までよりは」力を入れてほしいとする保育者は，全体の中からみれば，7.6%と少ない数値になっている。

しかし，その者の45%は，子供に興味・関心があれば，知能教室や学習塾へ通わせてもよいとしている。知的教育に対して「今までほど力を入れなくてよい」とするものの65%が，それは幼稚園で十分としているのと比べれば，その意識の違いが明らかになるであろう。有意差は出ていないが，この傾向を考えれば，経営者の方針も含めて，保育者の間でも数は少ないながら，知的教育に対してその考えが二分されていることが言えるようである。

表Ⅲ④－A－13　家庭の知的教育に対する今後の期待×知能教室に対する考え

%

		知能教室・学習塾					(N) (%)
		子供に興味・関心があれば	やった方がよい	父母がやらせたいのなら	幼稚園で十分	害になる	
家庭での知的教育に対する期待	おおいに・今までよりは力を入れてほしい	45.0	5.0	20.0	15.0	15.0	(20) (7.6)
	これまで通り	39.6	2.0	6.6	41.1	10.7	(197) (74.9)
	今までほど力を入れなくてよい	13.0	0	4.3	65.2	17.4	(46) (17.5)
	(N) (%)	(93) (35.4)	(5) (1.9)	(19) (7.2)	(114) (43.4)	(32) (12.1)	(263) (100.0)

4.　親と保育者の意識のずれ

最後に家庭での教育（子育て）の指導について，親と保育者の間に何らかの意識のずれはあるのかをみていきたい。親と保育者に対する調査項目のそれぞれのスケールが異なっているの

で，一概に比較はできないのであるが，おおよその傾向を知るために両者の結果を並べてみた。

まず，現在の家庭の教育（子育て）の指導についてみてみたい。図Ⅲ④－A－6は，知的能力についての，親と保育者の意識の比較である。親は，現在，知的能力を「とてもよく」「わりとよく」指導しているとする者があまりなく，「あまり」「ほとんど」指導していないとする者が，44％もいる結果である。これに対して，保育者の方は，「ほとんどの家庭で熱心」「半数以上の家庭で熱心」とする者が合わせて34％もいた。親が意識している以上に，保育者は，親の知的教育に対する熱意を感じとっているようである。

その他の項目においては，親と保育者の意識にそう大きな違いはみられなかった。

次に，今後の家庭教育への親の意向と保育者の希望の比較をみてみたい。図Ⅲ④－A－7は，知的教育と忍耐力の項目での比較の図である。

まず，知的教育に関しては，親の方は，今後「おおいに」或いは「今までよりは」力を入れたいとする者が，合わせて，40％にのぼる。これに対して，保育者の方は，「おおいに」「今までよりは」力を入れてほしいとする者は，7.6％にすぎない。その他の保育者たちは，せいぜいこれまで通りか今までほど力を入れなくともよいとしていることになる。このあたりで，今後，親と保育者の間にギャップが生じる可能性もあるかもしれない。

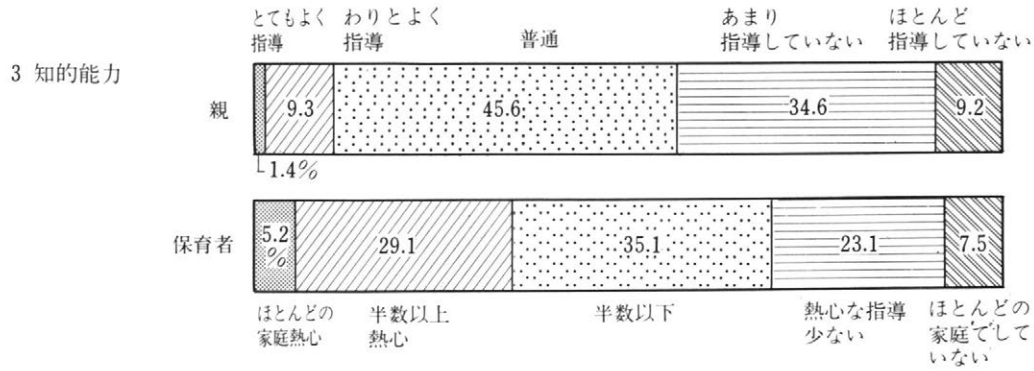
その他の項目では，多くが，親が「おおいに」或いは「今までよりは」力を入れたいとする以上に，保育者は，もっと力を入れていってほしいとする結果となっている。

例えば図のように，忍耐力に関しても，親が「おおいに」「今までよりは」力を入れたいとする者が，52％なのに対して，保育者が「おおいに」「今までよりは」力を入れてほしいとする者は，93％にのぼっている。保育者の親に対する期待が大きいことを，親はあまり知らないのではないだろうか。

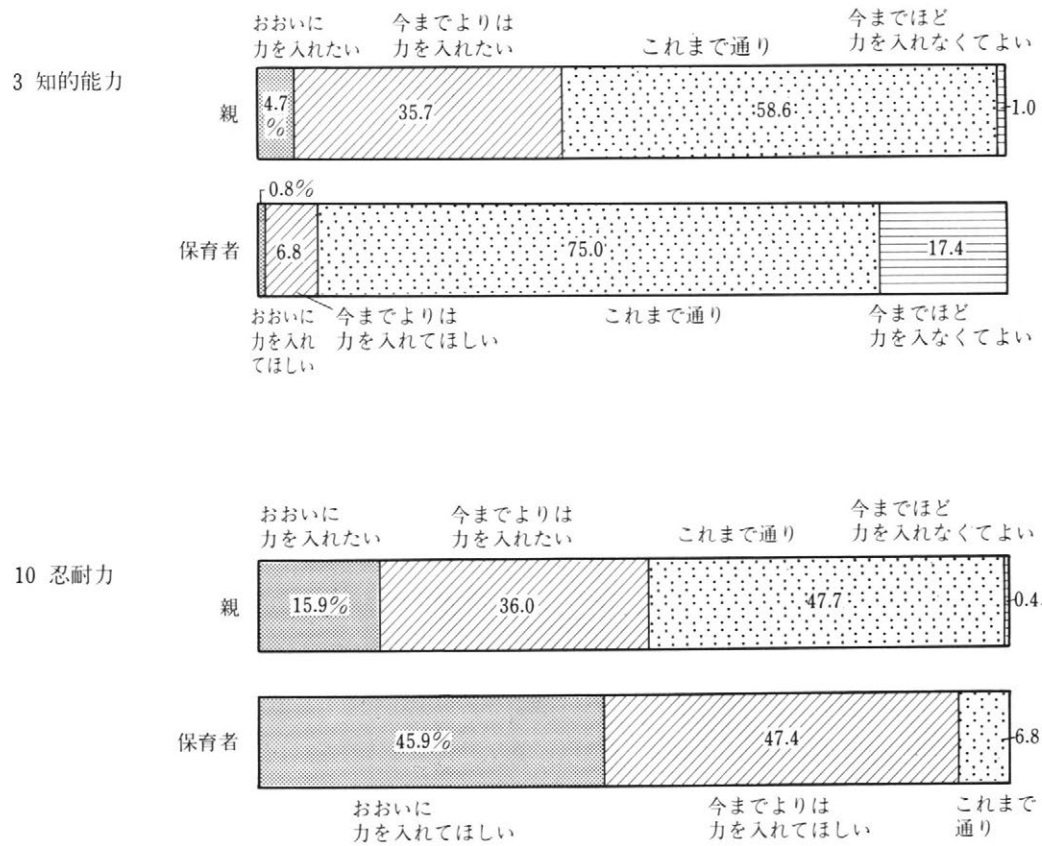
この「ずれ」の結果をみると，親と保育者はもう少しお互いに心を開いて話し合い，互いの意向を聞き合ったほうがよいように思われてならない。親はつい，自分の子育てをよしとしがちであるが，保育者を含めたいろいろな目で子供をみることのプラスの面を，忘れないようにしたいものである。また，保育者の方も，親とは，その子供の幼児期のみではく，その子の一生の責任を負っている者なのだということを忘れずに，その本音を聞く耳を持つことが大切なのではないだろうか。

（東京成徳短期大学助教授　石川洋子）

図III4-A-6　現在の家庭での指導について―親と保育者の見方の違い



図III4-A-7　今後の子育てへの意向・希望―親と保育者の見方の違い



B　園での教育に対する評価と期待

この節では，幼稚園・保育所での現在の教育に対する評価と今後の期待・意向を，保護者・保育者双方の回答をもとに記述していく。本節で参照するクロス集計表はごく一部を除いてカイ二乗検定の結果，５％の危険率で統計的に有意であったものである。

1.　保護者の評価と期待

表Ⅲ④－Ｂ－１に幼稚園・保育所での教育に対する保護者の評価を示す。この表によれば,「とても熱心に指導してくれている」から「ほとんど指導はしてくれていない」の５つの選択肢のうち,「普通だと思う」という回答がどの項目についても最も多いことが第一の特徴である。少ないものでも約40％(基本的生活習慣),多いものでは70％近く(忍耐力・基礎的言語能力)が「普通」と答えている。第二に,「普通」を除いて良い評価(とても熱心・わりとよく)と悪い評価(あまり熱心でない・ほとんど指導しない)に分けて見てみると，良い評価が断然多く，悪い評価は５～６％と非常に少ないことが分かる。中でも特に好ましく評価されているのは,「基本的生活習慣」「健康な体」「社会性」「運動能力」で，全体の40％ ～ 50％が良い方向の評価を受けている。ただし知的能力のみは例外で，他の項目とは逆の傾向にある。つまり良い評価が10％足らずと少なく，悪い評価が圧倒的である。知的能力を除く幼稚園・保育所での教育に対して，保護者は概ね好意的に評価していると言える。

表Ⅲ④－Ｂ－２は幼稚園・保育所での教育の今後に対する期待を示している。どの項目に関しても「これまで通りでよい」とする現状維持派が60～80％と大部分である。そして残りも「今までほど力を入れなくてよい」という意見はほとんど見られず,「おおいに力を入れてほしい」「今までよりは力を入れてほしい」という一層の前進を望む声が大多数を占めている。特に「言語能力」「情操性」「忍耐力」については「力を入れてほしい」という意見が比較的多い。この傾向は知的能力に関しても例外でなく，現状維持派が約70％，残る約30％が今後力を入れていくことを望んでいる。現状肯定派が大部分を占めるものの，どの項目についても一様に今後の指導の強化を望むことが少なくないことなどは，我が子に少しでも良い教育を望む親の心理が表れたものと考えられる。

次に評価と期待の関係を見てみる。表Ⅲ④－Ｂ－３に「運動能力」の項目について現在の幼稚園・保育所での教育への評価と今後への期待をクロス集計したものを示す。これによると「あまり熱心でない」「ほとんど指導はしてくれない」と否定的に評価している人には「おおいに力を入れて」「今までよりは力を入れて」という強化を望む声が多く,「普通」以上の評価をしている人には「これまで通りでよい」という声が大部分である。やはり常識的な期待通り，悪く評価する人は改善を求め，良く評価する人は現状維持でよいとしているのである。ただ,「とても熱心に

表Ⅲ④－Ｂ－Ⅰ　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保護者

	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
基本的生活習慣	113 (15.8)	281 (39.4)	295 (41.4)	21 (2.9)	3 (0.4)	713 (100)
健康な体	86 (12.0)	253 (35.4)	345 (48.3)	29 (4.1)	1 (0.1)	714 (100)
知的能力	11 (1.5)	51 (7.2)	344 (48.5)	166 (23.4)	138 (19.4)	710 (100)
情操性	48 (6.8)	190 (26.8)	381 (53.7)	85 (12.0)	6 (0.8)	710 (100)
社会性	86 (12.1)	297 (41.8)	311 (43.8)	14 (2.0)	2 (0.3)	710 (100)
基礎的技能	55 (7.7)	258 (36.1)	384 (53.8)	15 (2.1)	2 (0.3)	714 (100)
道徳的感覚	41 (5.7)	173 (24.2)	457 (64.0)	36 (5.0)	7 (1.0)	714 (100)
運動能力	83 (11.6)	219 (30.7)	373 (52.2)	33 (4.6)	6 (0.8)	714 (100)
明朗な性格	63 (8.8)	181 (25.4)	454 (63.7)	12 (1.7)	3 (0.4)	713 (100)
忍耐力	39 (5.5)	158 (22.2)	483 (67.9)	27 (3.8)	4 (0.6)	711 (100)
基礎的言語能力	48 (6.7)	147 (20.6)	478 (67.0)	38 (5.3)	2 (0.3)	713 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—2　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
基本的生活習慣	64 (9.0)	110 (15.4)	538 (75.5)	1 (0.1)	713 (100)
健康な体	64 (9.0)	137 (19.2)	513 (71.8)	0 (0.0)	714 (100)
知的能力	33 (4.6)	190 (26.7)	483 (67.8)	6 (0.8)	712 (100)
情操性	59 (8.3)	185 (26.1)	465 (65.5)	1 (0.1)	710 (100)
社会性	68 (9.6)	115 (16.2)	528 (74.3)	0 (0.0)	711 (100)
基礎的技能	43 (6.0)	90 (12.6)	580 (81.3)	0 (0.0)	713 (100)
道徳的感覚	52 (7.3)	144 (20.2)	517 (72.5)	0 (0.0)	713 (100)
運動能力	55 (7.7)	145 (20.3)	513 (72.0)	0 (0.0)	713 (100)
明朗な性格	54 (7.6)	108 (15.2)	550 (77.2)	0 (0.0)	712 (100)
忍耐力	64 (9.0)	162 (22.8)	485 (68.2)	0 (0.0)	711 (100)
基礎的言語能力	73 (10.2)	175 (24.5)	465 (65.2)	0 (0.0)	713 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

指導してくれている」という最高の評価をした人の中に，今後も「おおいに力を入れてほしい」という意見の人が少なくないことも注目される。このことは現状に満足することなく，より良い教育をどこまでも追及したいという気持ちの表れと解釈できる。表には「運動能力」のデータを掲げたが，すべての項目でこれらの点，即ち否定的評価と改善を求める声の結び付きと，最高の評価を下してもなおより良いものを求める傾向は同じであった。ただし表Ⅲ④－B－4に示すように，「知的能力」についてはこれらの傾向が他の項目に比べて弱い。このことは否定的な評価の人であっても今後については「これまで通りでよい」とすることが多いこと（55%程度）によるものである。

表Ⅲ④－B－3　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

運動能力

現在の指導の様子	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
とても熱心	20 (24.1)	3 (3.6)	60 (72.3)	0 (0.0)	83 (100)
わりとよく	15 (6.9)	23 (10.6)	180 (82.6)	0 (0.0)	218 (100)
普通	13 (3.5)	92 (24.7)	268 (71.9)	0 (0.0)	373 (100)
あまり熱心でない	4 (12.1)	25 (75.8)	4 (12.1)	0 (0.0)	33 (100)
ほとんど指導しない	3 (50.0)	2 (33.3)	1 (16.7)	0 (0.0)	6 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—4　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

知的能力

現在の指導の様子	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
とても熱心	3 (27.3)	1 (9.1)	6 (54.6)	1 (9.1)	11 (100)
わりとよく	2 (3.9)	7 (13.7)	41 (80.4)	1 (2.0)	51 (100)
普通	8 (2.3)	70 (20.4)	265 (77.0)	1 (0.3)	344 (100)
あまり熱心でない	7 (4.2)	64 (38.6)	94 (56.6)	1 (0.6)	166 (100)
ほとんど指導しない	13 (9.4)	48 (34.8)	75 (54.4)	2 (1.5)	138 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

2.　保育者の評価と今後の意向

表Ⅲ④－B－5は保育者自身が幼稚園・保育所で行っている教育を評価したものである。これによると，否定的な評価がごく僅かである点は保護者による評価の場合と同様であるが,「普通」というあい昧な評価がどの項目でも常に多かった保護者に比べて,「とてもよく指導している」「わりとよく指導している」という積極的な評価が明瞭に見て取れる。特に「基本的生活習慣」「社会性」「明朗な性格」「忍耐力」「基礎的言語能力」については肯定的評価が70％程度を占め,「普通だと思う」という評価はむしろ少数派である。これらの項目について幼稚園・保育所では現在力を入れて指導していることが伺われる。一方,「知的能力」は保護者の場合と同様否定的な評価に傾いており,「あまり指導していない」「ほとんど指導していない」が60％近くを占めている点から見ると，保護者より否定的な度合いは一層高い。その他の項目,「健康な体」「情操性」「基礎的技能」「道徳的感覚」「運動能力」については「普通だと思う」の評価が最も多いが,「わりとよく指導している」がそれに次いで多く，際立ってはいないが肯定的に評価していることが分かる。全体に保育者の評価は肯定的であり，また保護者に比べて項目毎の差は大きいことが特徴である。

表Ⅲ④－B－6は保育者が考える今後の教育の意向である。どの項目についても「これまで通りやりたいと思う」が多いが,「知的能力」と「基礎的技能」を除けば各項目ともその割合は約40％であり,保護者の場合に比べて少ない。「今までほど力を入れる気はない」という否定的な意向は殆ど見られないから,残りは「おおいに力を入れたいと思う」「今までよりは力を入れたい」という積極的な意向ということになるが,その程度は項目によって微妙に異なる。「基本的生活習慣」「社会性」「明朗な性格」「言語能力」といった,現在の指導に対する評価が特に高かった項目については,「おおいに力を入れたい」という極めて積極的な意向が多い。その他の項目では「おおいに力を入れたい」よりも「今までよりは力を入れたい」が多く，積極的な意向ではあるが，それほど際立ってはいない。

現在の教育の評価と今後の意向との関係は，やはり「知的能力」とその他の項目とで異なる。「知的能力」以外の項目の代表として表Ⅲ④－B－7に「基本的生活習慣」,表Ⅲ④－B－8に「情操性」のクロス表,表Ⅲ④－B－9に「知的能力」のクロス表を示す。まず,「知的能力」以外の項目に関しては,「普通だと思う」と評価をした人は「これまで通りやりたいと思う」「今までよりは力を入れたい」という意向であるのに対して,「わりとよく指導している」「とてもよく指導している」と肯定的な評価が強くなるにつれ「これまで通り」「今までよりは」が減り,「おおいに力を入れたいと思う」という意向が多くなっていく。即ち表Ⅲ④－B－7によれば,「基本的生活習慣」について「普通」の評価を下した人の60％が「これまで通り」の意向であるのに対して,「とてもよく指導」と評価している人の65％は今後も「おおいに力を入れたい」としている。

表Ⅲ④—B—5　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保育者

	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
基本的生活習慣	72 (26.8)	135 (50.2)	60 (22.3)	1 (0.4)	1 (0.4)	269 (100)
健康な体	35 (13.1)	84 (31.3)	136 (50.7)	12 (4.5)	1 (0.4)	268 (100)
知的能力	4 (1.5)	16 (5.9)	94 (34.9)	89 (33.1)	66 (24.5)	269 (100)
情操性	19 (7.1)	75 (27.9)	150 (55.8)	23 (8.6)	2 (0.7)	269 (100)
社会性	97 (36.2)	130 (48.5)	41 (15.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	268 (100)
基礎的技能	25 (9.3)	107 (39.9)	130 (48.5)	6 (2.2)	0 (0.0)	268 (100)
道徳的感覚	39 (14.5)	85 (31.6)	131 (48.7)	12 (4.5)	2 (0.7)	269 (100)
運動能力	29 (10.8)	103 (38.3)	120 (44.6)	15 (5.6)	2 (0.7)	269 (100)
明朗な性格	58 (21.6)	104 (38.7)	99 (36.8)	8 (3.0)	0 (0.0)	269 (100)
忍耐力	40 (14.9)	126 (46.8)	97 (36.1)	5 (1.9)	1 (0.4)	269 (100)
基礎的言語能力	64 (23.9)	124 (46.3)	75 (28.0)	4 (1.5)	1 (0.4)	268 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④－Ｂ－６　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保育者

	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合　計
基本的生活習慣	101 (37.7)	41 (15.3)	126 (47.0)	0 (0.0)	268 (100)
健康な体	55 (20.5)	95 (35.4)	118 (44.0)	0 (0.0)	268 (100)
知的能力	3 (1.1)	24 (9.0)	228 (85.4)	12 (4.5)	267 (100)
情操性	49 (18.4)	107 (40.2)	109 (41.0)	1 (0.4)	266 (100)
社会性	112 (42.3)	47 (17.7)	106 (40.0)	0 (0.0)	265 (100)
基礎的技能	28 (10.5)	61 (22.9)	177 (66.5)	0 (0.0)	266 (100)
道徳的感覚	67 (25.1)	95 (35.6)	105 (39.3)	0 (0.0)	267 (100)
運動能力	44 (16.5)	100 (37.6)	122 (45.9)	0 (0.0)	266 (100)
明朗な性格	92 (34.3)	63 (23.5)	113 (42.2)	0 (0.0)	268 (100)
忍耐力	78 (29.1)	80 (29.9)	108 (40.3)	2 (0.7)	268 (100)
基礎的言語能力	85 (31.8)	73 (27.3)	109 (40.8)	0 (0.0)	267 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④－B－7　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保育者

基本的生活習慣

現在の指導の様子	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合　計
とてもよく	47 (65.3)	0 (0.0)	25 (34.7)	0 (0.0)	72 (100)
わりとよく	48 (35.6)	23 (17.0)	64 (47.4)	0 (0.0)	135 (100)
普　　通	6 (10.0)	18 (30.0)	36 (60.0)	0 (0.0)	60 (100)
あまりしない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (100)
ほとんどしない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

また，表Ⅲ④－B－8の「情操性」のように否定的な評価があるような場合には「今までよりは」という意向が多い。これに対して，表Ⅲ④－B－9の「知的能力」は現在の評価がどうであれ，「これまで通りやりたいと思う」という現状維持の意向が常に多い。「知的能力」を除けば，保護者の場合と同様に現在の教育を肯定的に評価していてもなお，より良い教育を追及したいという気持ちが表れているのではないかと思われる。

表Ⅲ④―Ｂ―８　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保育者

情操性

現在の指導の様子	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合　計
とてもよく	12 (63.2)	2 (10.5)	5 (26.3)	0 (0.0)	19 (100)
わりとよく	18 (24.7)	19 (26.0)	36 (49.3)	0 (0.0)	73 (100)
普　　通	16 (10.7)	71 (47.3)	62 (41.3)	1 (0.7)	150 (100)
あまりしない	3 (13.0)	15 (65.2)	5 (21.7)	0 (0.0)	23 (100)
ほとんどしない	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100)	0 (0.0)	1 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④―Ｂ―９　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保育者

知的能力

現在の指導の様子	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合　計
とてもよく	1 (25.0)	0 (0.0)	2 (50.0)	1 (25.0)	4 (100)
わりとよく	1 (6.3)	5 (31.3)	9 (56.3)	1 (6.3)	16 (100)
普　　通	1 (1.1)	10 (10.8)	81 (87.1)	1 (1.1)	93 (100)
あまりしない	0 (0.0)	5 (5.6)	83 (93.3)	1 (1.1)	89 (100)
ほとんどしない	0 (0.0)	4 (6.2)	53 (81.5)	8 (12.3)	65 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

3. 保護者の属性(フェイス項目)と幼稚園・保育所教育への評価・期待の関係

現在の幼稚園・保育所教育への評価に関わりのあった保護者の属性は「年齢」「幼稚園教諭免許の有無」「保母資格の有無」の3種であった。

「年齢」の影響のある評価は「知的能力」及び「明朗な性格」の2項目であった。表Ⅲ④－B－10に示すように,「知的能力」の教育については,サンプルの少ない50代を除けば年代が上昇するにつれ「あまり熱心な指導はしてくれていない」「ほとんど指導はしてくれていない」という否定的評価が減り(20代で50%だったものが40代では22%),「普通」以上の評価が増えてきている(「とても熱心」「わりとよく」の評価は20代では6%に過ぎないが,40代では17%ある)。「明朗な性格」については表Ⅲ④－B－11に示すように,20代では26%程度だった「とても熱心」「わりとよく」の肯定的評価が40代では52%を超えており,それに伴って「普通」以下の評価が減少している。「知的能力」と「明朗な性格」の教育については保護者の年齢が上がる程,幼稚園・保育所での教育に満足していることが分かる。

「幼稚園教諭免許の有無」に関連のある項目は「基礎的技能」「明朗な性格」の2つであった。表Ⅲ④－B－12に示すように,「基礎的技能」では幼稚園教諭免許を持っていない人の方が免許所持者よりも僅かに評価が良い。この点については,主に「とても熱心に指導してくれている」という最も積極的な評価の人がおよそ2%から9%へと増えている点が指摘される。

また,これとは逆に,表Ⅲ④－B－13に示すように,「明朗な性格」については免許所持者の方が評価が高い。この場合は「とても熱心」という最高の評価の割合は変わらないが,所持者の方が「わりとよく指導してくれている」の割合が高く,「普通」以下の評価が少ないことが差の内容である。

「保母資格の有無」に関連のある項目は「知的能力」と「基礎的言語能力」であった。「保母資格の有無」と「知的能力」の関係は表Ⅲ④－B－14の通りである。肯定的な評価はどちらも僅かであるが,保母資格のない人に「ほとんど指導はしてくれていない」という最も否定的な評価の割合が高く(3%対20%),大部分(70%以上)が「普通」と評価している保母資格所持者より全体的に悪い評価となっている。「基礎的言語能力」に関しては,表Ⅲ④－B－15に示すように,資格所持者の「とても熱心」「わりとよく指導」という評価の割合は資格のない人のそれぞれ2倍程度あり,また「普通」を下回る評価が全くないことから,保母資格所持者の方が満足度が高いと言うことができる。

幼稚園教諭の免許と保母資格については,「基礎的技能」の項目を除いて,関連のあった「知的能力」「明朗な性格」「基礎的言語能力」のどれもが資格所持者の方の評価が高かった。

次に,幼稚園・保育所での今後の教育に対する期待に関連のあった保護者の属性は「父親の職業」「(母親の)学歴」「幼稚園教諭免許の有無」「保母資格の有無」の4つであった。

表III④－B－10　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保護者

知的能力

年　　齢	とてもよく指　導	わりとよく指　導	普　通	あ　ま　り指導しない	ほとんど指導しない	合　計
20　　代	1 (1.3)	4 (5.1)	34 (43.0)	28 (35.4)	12 (15.2)	79 (100)
30代前半	6 (1.7)	29 (8.1)	169 (47.2)	85 (23.7)	69 (19.3)	358 (100)
30代後半	3 (1.3)	12 (5.2)	117 (50.4)	48 (20.7)	52 (22.4)	232 (100)
40　　代	1 (2.8)	5 (13.9)	22 (61.1)	5 (13.9)	3 (8.3)	36 (100)
50代以上	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100)	2 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表III④－B－11　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保護者

明朗な性格

年　　齢	とてもよく指　導	わりとよく指　導	普　通	あ　ま　り指導しない	ほとんど指導しない	合　計
20　　代	7 (8.8)	14 (17.5)	55 (68.8)	3 (3.8)	1 (1.3)	80 (100)
30代前半	27 (7.5)	90 (24.9)	236 (65.4)	8 (2.2)	0 (0.0)	361 (100)
30代後半	25 (10.8)	59 (25.5)	144 (62.3)	1 (0.4)	2 (0.9)	231 (100)
40　　代	4 (11.1)	15 (41.7)	17 (47.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	36 (100)
50代以上	0 (0.0)	2 (100)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④－Ｂ－12　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保護者

基礎的技能

幼稚園教諭免許	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
あり	2 (1.8)	42 (38.5)	61 (56.0)	3 (2.8)	1 (0.9)	109 (100)
なし	51 (8.7)	212 (36.0)	314 (53.3)	11 (1.9)	1 (0.2)	589 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④－Ｂ－13　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保護者

明朗な性格

幼稚園教諭免許	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
あり	9 (8.3)	40 (37.0)	59 (54.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	108 (100)
なし	52 (8.8)	138 (23.4)	384 (65.2)	12 (2.0)	3 (0.5)	589 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表III④—B—14　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保護者

知的能力

保母資格	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
あり	0 (0.0)	1 (2.9)	25 (73.5)	7 (20.6)	1 (2.9)	34 (100)
なし	10 (1.6)	45 (7.2)	294 (47.2)	148 (23.8)	126 (20.2)	623 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表III④—B—15　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保護者

基礎的言語能力

保母資格	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
あり	4 (11.8)	12 (35.3)	18 (52.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	34 (100)
なし	40 (6.4)	122 (19.5)	425 (67.9)	37 (5.9)	2 (0.3)	626 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

「父親の職業」に関連のあったのは「基本的生活習慣」であった。表Ⅲ④－B－16にその関係を示すが，この表には農林漁業，無職，死亡などの少数であった職業は省いてある。これによると，専門職と教員を除く各職業では「おおいに力を入れてほしい」「今までよりは力を入れてほしい」という今後に期待する声が20％ ～ 40％程度あるのに対して，専門職と教員の今後に期待する声は10％内外でしかない。回答者は母親であるから，回答と父親の職業を一概に結び付ける訳にはいかないが，一般的に他の職業より知的水準が高いと思われる専門職・教員において「基本的生活習慣」を重視する傾向が弱いことが注目される。

表Ⅲ④－B－16　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

基本的生活習慣

父親の職業	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
労務職	17 (11.6)	25 (17.0)	105 (71.4)	0 (0.0)	147 (100)
サービス業	13 (14.6)	14 (15.7)	62 (69.7)	0 (0.0)	89 (100)
事務職	17 (6.0)	42 (14.8)	225 (79.2)	0 (0.0)	284 (100)
専門職	0 (0.0)	2 (9.5)	18 (85.7)	1 (4.8)	21 (100)
教員	2 (6.9)	2 (6.9)	25 (86.2)	0 (0.0)	29 (100)
自営業	4 (10.3)	6 (15.4)	29 (74.4)	0 (0.0)	39 (100)
役員	6 (12.2)	8 (16.3)	35 (71.4)	0 (0.0)	49 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

「(母親の)学歴」に関連のあったのは「知的能力」の教育に対する今後の期待であった。表Ⅲ④—B—17の「おおいに力を入れてほしい」「今までよりは力を入れてほしい」という積極的な期待の声の割合を学歴別に比較すると，概ね学歴が高くなるにつれてその割合が減少してくることが分かる。即ち，中学・高校卒では40%近くある積極的な期待が短大・大学卒では20%程度しかなく，その分「これまで通りでよいと思う」という現状肯定の意見が増加している。

表Ⅲ④—B—17　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

知的能力

学歴（母）	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
中学	1 (3.7)	9 (33.3)	17 (63.0)	0 (0.0)	27 (100)
高校	19 (5.3)	111 (30.8)	228 (63.2)	3 (0.8)	361 (100)
専門学校	4 (4.4)	26 (28.3)	62 (67.4)	0 (0.0)	92 (100)
短大	4 (3.1)	28 (21.4)	98 (74.8)	1 (0.8)	131 (100)
大学	5 (5.6)	12 (13.5)	70 (78.7)	2 (2.3)	89 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

「幼稚園教諭免許の有無」と「保母資格の有無」に関連のあった項目は「知的能力」「社会性」「基礎的技能」(「保母資格の有無」のみ)「道徳的感覚」「運動能力」(「保母資格の有無」のみ)「基礎的言語能力」(統計的には有意でない)の6項目である。これらの関係を表Ⅲ④—B—18～27までに示す。これらの表からは，いずれの資格であれ資格のない人はそれぞれの項目について「おおいに力を入れてほしい」「今までよりは力を入れてほしい」という積極的な期待が約30%前後と多いのに対して，資格のある人で積極的な期待を持つ人は20%程度以下であり，最も少ない「社会性」「基礎的技能」では6%に過ぎないことが読み取れる。

今後の教育に関しては，多くの項目において幼稚園教諭免許や保母資格のない人の期待が高いこと，一部の項目において学歴の高い人及び父親の職業が専門職・教員である人の期待が相対的に低いことが分かった。

表Ⅲ④—B—18　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

知的能力

幼稚園教諭免許	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
あり	4 (3.7)	21 (19.3)	82 (75.2)	2 (1.8)	109 (100)
なし	29 (4.9)	163 (27.8)	391 (66.6)	4 (0.7)	587 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—19　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

知的能力

保母資格	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
あり	0 (0.0)	6 (17.7)	28 (82.4)	0 (0.0)	34 (100)
なし	31 (5.0)	171 (27.4)	418 (66.9)	5 (0.8)	625 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—20　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

社会性

幼稚園教諭免許	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
あり	5 (4.6)	15 (13.8)	89 (81.7)	0 (0.0)	109 (100)
なし	62 (10.6)	99 (16.9)	425 (72.5)	0 (0.0)	586 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④―Ｂ―21　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

社会性

保母資格	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
あり	1 (2.9)	1 (2.9)	32 (94.1)	0 (0.0)	34 (100)
なし	62 (9.9)	106 (17.0)	456 (73.1)	0 (0.0)	624 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④―Ｂ―22　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

基礎的技能

保母資格	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
あり	1 (2.9)	1 (2.9)	32 (94.1)	0 (0.0)	34 (100)
なし	39 (6.2)	81 (12.9)	506 (80.8)	0 (0.0)	626 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④―Ｂ―23　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

道徳的感覚

幼稚園教諭免許	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
あり	4 (3.7)	17 (15.7)	87 (80.6)	0 (0.0)	108 (100)
なし	47 (8.0)	125 (21.2)	417 (70.8)	0 (0.0)	589 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④－Ｂ－24　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

道徳的感覚

保母資格	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
あり	0 (0.0)	2 (5.9)	32 (94.1)	0 (0.0)	34 (100)
なし	49 (7.8)	130 (20.8)	447 (71.4)	0 (0.0)	626 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④－Ｂ－25　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

運動能力

保母資格	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
あり	0 (0.0)	6 (17.7)	28 (82.4)	0 (0.0)	34 (100)
なし	50 (8.0)	124 (19.8)	452 (72.2)	0 (0.0)	626 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④－Ｂ－26　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

基礎的言語能力

幼稚園教諭免許	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
あり	7 (6.4)	23 (21.1)	79 (72.5)	0 (0.0)	109 (100)
なし	65 (11.1)	147 (25.0)	376 (64.0)	0 (0.0)	588 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④―Ｂ―27　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

基礎的言語能力

保母資格	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
あり	4 (11.8)	3 (8.8)	27 (79.4)	0 (0.0)	34 (100)
なし	65 (10.4)	157 (25.1)	404 (64.5)	0 (0.0)	626 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

4. 保育者の属性(フェイス項目)と幼稚園・保育所教育への評価・意向の関係

保育者の属性のうち，幼稚園・保育所教育の評価と関連のあった項目は「子供の有無」「年齢」「所属する園の公立・私立の別」であった。

「子供の有無」と関連があったのは「健康な体」である。表Ⅲ④－B－28からは子供のある保育者の「とてもよく指導している」「わりとよく指導している」という肯定的な評価が60%近くと高く，子供のない人では40%程度であることが読み取れる。子供を持つ保育者の方が健康な体をつくる教育に自信を持っていることが分かる。

表Ⅲ④－B－28　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保育者

健康な体

子　　供	とてもよく指導	わりとよく指導	普　通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合　計
あ　　り	12 (15.8)	32 (42.1)	31 (40.8)	1 (1.3)	0 (0.0)	76 (100)
な　　し	23 (12.3)	51 (27.3)	101 (54.0)	11 (5.9)	1 (0.5)	187 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

「年齢」と関連のあった項目は「知的能力」である。「知的能力」の教育については全体に評価が低く(本節の2.参照のこと)，表Ⅲ④－B－29においても，若い年齢層では「あまり指導していない」「ほとんど指導していない」が合わせて60%以上をしめているが，年齢が上がるにつれてその割合は減っていき，40代では30%足らずまで下がっている。そしてその分「普通だと思う」という評価の割合が増えている。50代以上ではまた傾向がやや異なるが，「知的能力」の教育についての評価は若い保育者ほど否定的であることが分かる。なお，「保育者としての経験年数」も「年齢」と同様，年数の短い保育者ほど「知的能力」の教育への評価が厳しい傾向があったが，年齢と経験年数はほぼ同じ意味を持っていると思われるので経験年数に関してのクロス表は割愛した。

表Ⅲ④－Ｂ－29　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保育者

知的能力

年　　齢	とてもよく指　導	わりとよく指　導	普　通	あ　ま　り指導しない	ほとんど指導しない	合　計
20代前半	3 (3.2)	3 (3.2)	24 (25.5)	29 (30.9)	35 (37.2)	94 (100)
20代後半	0 (0.0)	6 (7.6)	28 (35.4)	29 (36.7)	16 (20.3)	79 (100)
30代前半	1 (3.1)	0 (0.0)	11 (34.4)	11 (34.4)	9 (28.1)	32 (100)
30代後半	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (58.3)	4 (33.3)	1 (8.3)	12 (100)
40　　代	0 (0.0)	5 (18.5)	14 (51.9)	5 (18.5)	3 (11.1)	27 (100)
50代以上	0 (0.0)	2 (9.1)	9 (40.9)	10 (45.5)	1 (4.6)	22 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

「園の公立・私立の別」には「知的能力」「社会性」「基礎的言語能力」の３項目の評価が関連していた。これらのクロス表を表Ⅲ④－Ｂ－30～32に掲げる。「知的能力」の教育については，私立の園の先生に「普通」以上の評価が52％と多く，公立の園の先生には「あまり指導しない」「ほとんど指導しない」という否定的評価が70％以上を占めている。また，「基礎的技能」の教育への評価も統計的に有意でこそなかったが，「知的能力」同様私立の園の先生の評価が高い傾向にあった。これに対して，「社会性」と「基礎的言語能力」の教育については差は僅かであるが公立の先生の方が「とてもよく」「わりとよく」指導しているとする度合いが強い。「知的能力」「基礎的技能」という個人的な能力開発には私立の方が自信を持ち，「社会性」「基礎的言語能力」というコミュニケーションの面では公立の方が自信を持っていると言うことができるであろう。

今後の教育の意向に関係のある幼稚園・保育所教師の属性は「園の公立・私立の別」「年齢」「子供の有無」であった。

表Ⅲ④—B—30　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保育者

知的能力

公立・私立	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
公立	0 (0.0)	3 (3.3)	18 (20.0)	40 (44.4)	29 (32.2)	90 (100)
私立	4 (2.3)	13 (7.4)	74 (42.3)	48 (27.4)	36 (20.6)	175 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—31　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保育者

社会性

公立・私立	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
公立	42 (46.7)	38 (42.2)	10 (11.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	90 (100)
私立	54 (31.0)	89 (51.2)	31 (17.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	174 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—32　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保育者

基礎的言語能力

公立・私立	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
公立	25 (27.8)	47 (52.2)	15 (16.7)	2 (2.2)	1 (1.1)	90 (100)
私立	38 (21.8)	76 (43.7)	58 (33.3)	2 (1.2)	0 (0.0)	174 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

「園の公立・私立の別」については「健康な体」「情操性」「明朗な性格」「基礎的言語能力」の４つの項目について差が認められた。それぞれのクロス集計表は表Ⅲ④－Ｂ－33～38までに示されている。「健康な体」については表Ⅲ④－Ｂ－33に示すように，「これまで通りやりたいと思う」が公立の園の先生では約60％に達するのに対して，私立の園の先生では約40％である。「おおいに力を入れたいと思う」という非常に積極的な意向は公立の園に多いが，今後力を入れていきたいとする前進的な意向は全体として私立の園の先生により多いと言える。「情操性」「明朗な性格」「基礎的言語能力」については，表Ⅲ④－Ｂ－36～38に示すように「おおいに力を入れたいと思う」「今までよりは力を入れたいと思う」という意向は私立の園の先生の約65％を占め，公立の園の先生の約45％より多い。「年齢」「子供の有無」に関係のあった項目は「情操性」であった。表Ⅲ④－Ｂ－34及び表Ⅲ④－Ｂ－35にそれぞれのクロス集計表を掲げる。表Ⅲ④－Ｂ－34によれば，年齢が上昇するにつれて「おおいに力を」「今までよりは力を」という積極的な意向は減少し（20代前半で70％近くあったのに対して30代後半以降は40％程度である），代わりに「これまで通りやりたいと思う」という現状維持の意向が増加する。「子供の有無」については表Ⅲ④－Ｂ－35に示す通り，子供のない保育者の方が今後「情操性」の教育に力を入れたいとする割合が高い。一般に若い世代ほど子供のいない人が多いと思われるので，「年齢」と「子供の有無」に関する傾向は共通するものがあると思われる。

表Ⅲ④－Ｂ－33　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保育者

健康な体

公立・私立	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
公立	23 (25.6)	16 (17.8)	51 (56.7)	0 (0.0)	90 (100)
私立	32 (18.4)	76 (43.7)	66 (37.9)	0 (0.0)	174 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—34　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保育者

情操性

年　　齢	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
20代前半	25 (26.9)	37 (39.8)	31 (33.3)	0 (0.0)	93 (100)
20代後半	10 (12.7)	40 (50.6)	28 (35.4)	1 (1.3)	79 (100)
30代前半	6 (19.4)	13 (41.9)	12 (38.7)	0 (0.0)	31 (100)
30代後半	1 (8.3)	4 (33.3)	7 (58.3)	0 (0.0)	12 (100)
40　　代	5 (19.2)	6 (23.1)	15 (57.7)	0 (0.0)	26 (100)
50代以上	2 (9.1)	6 (27.3)	14 (63.6)	0 (0.0)	22 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—35　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保育者

情操性

子　　供	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
あ　　り	9 (12.0)	24 (32.0)	42 (56.0)	0 (0.0)	75 (100)
な　　し	38 (20.4)	81 (43.5)	66 (35.5)	1 (0.5)	186 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—36　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保育者

情操性

公立・私立	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
公立	11 (12.5)	30 (34.1)	46 (52.3)	1 (1.1)	88 (100)
私立	37 (21.3)	75 (43.1)	62 (35.6)	0 (0.0)	174 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—37　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保育者

明朗な性格

公立・私立	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
公立	28 (31.1)	14 (15.6)	48 (53.3)	0 (0.0)	90 (100)
私立	64 (36.8)	47 (27.0)	63 (36.2)	0 (0.0)	174 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—38　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保育者

基礎的言語能力

公立・私立	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
公立	27 (30.3)	15 (16.9)	47 (52.8)	0 (0.0)	89 (100)
私立	57 (32.8)	57 (32.8)	60 (34.5)	0 (0.0)	174 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

5. 就学前教育への基本的態度と幼稚園・保育所教育への評価・期待

ここでは保護者・保育者どちらの調査でも最初の質問であった，子供の能力の伸ばし方に対する基本的考えかたとの関連で，保護者・保育者双方の幼稚園・保育所教育への評価・期待を見ていく。

基本的態度の選択肢は5つあるが,「いろいろなことをとにかく一通り一度は経験させてみて，子供の能力・才能を引き出してやりたい」と答えた者を「何でも派」,「子供自身が興味や関心を示しているならば，それについての能力や才能を伸ばしてやるのがいい」と答えた者を「子供本位派」,「親の目からみて『必要だ』『むいている』と思われるならば，そのことについての能力や才能を伸ばしてやるのがいい」と答えた者を「親主導派」,「子供の能力や才能は自然に育ってくるものであるから，それを無理に伸ばしてやろうとは思わない」と答えた者を「自然派」と命名し，以後この名前を使って結果を記述することにする。なお，5番目の選択肢である「その他」と答えた者は保護者・保育者ともごく少数であったので，考察の対象から除くこととし，保育者調査の「親主導派」も同様の理由から無視する。

(1) 保護者の場合

保護者の調査では就学前教育への基本的態度と幼稚園・保育所教育への評価・期待について，何か一貫した傾向は見られず，有意なクロス表を得たのは「社会性」の評価と期待，及び「運動能力」の教育の評価の期待のみであった。

「社会性」の教育の評価に関しては表Ⅲ④－B－39に示すように「とても熱心に指導してくれている」と「わりとよく指導してくれている」の合計の割合が自然派・親主導派で約60%，子供本位派で約55%，何でも派で約45%と，この順で肯定的評価が減少している。また,「社会性」の教育の今後への期待については表Ⅲ④－B－40に示すように，何でも派の期待が最も強く(「力を入れて」が約40%),次いで親主導派と自然派(共に約30%),子供本位派(約20%)の順となっている。

「運動能力」教育の今後については表Ⅲ④－B－41に示すように親主導派に積極的態度を持っている人が多く，約50%にのぼる。これに対して子供本位派と自然派には積極的な人が少なく，20数%に過ぎない。何でも派はこの中間に位置する。

(2) 保育者の場合

保育者の就学前教育に対する基本的態度と幼稚園・保育所教育の評価及び今後の意向については，基本的態度のサンプルが偏っており，自然派・親主導派が少ないので，その関係が必ずしも明確でない。

ただ，サンプルの偏りの問題をひとまず置いて，得られた割合だけで考えると，いくつかの教育の側面について，自然派の評価ないしは今後の意向が高くなっている。

表Ⅲ④—B—39　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保護者

社会性

子育てへの基本的考え	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
何でも	12 (10.8)	37 (33.3)	57 (51.4)	4 (3.6)	1 (0.9)	111 (100)
子供本位	49 (10.7)	204 (44.4)	198 (43.1)	8 (1.7)	0 (0.0)	459 (100)
親主導	3 (6.8)	23 (52.3)	16 (36.4)	2 (4.6)	0 (0.0)	44 (100)
自然	14 (23.0)	23 (37.8)	23 (37.8)	0 (0.0)	1 (1.6)	61 (100)
その他	1 (20.0)	1 (20.0)	3 (60.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—40　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

社会性

子育てへの基本的考え	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
何でも	16 (14.4)	26 (23.4)	69 (62.2)	0 (0.0)	111 (100)
子供本位	37 (8.0)	61 (13.2)	363 (78.7)	0 (0.0)	461 (100)
親主導	4 (9.3)	9 (20.9)	30 (69.8)	0 (0.0)	43 (100)
自然	7 (11.5)	9 (14.8)	45 (73.8)	0 (0.0)	61 (100)
その他	0 (0.0)	2 (40.0)	3 (60.0)	0 (0.0)	5 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④－Ｂ－41　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

運動能力

子育てへの基本的考え	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
何でも	13 (11.7)	23 (20.7)	75 (67.6)	0 (0.0)	111 (100)
子供本位	27 (5.8)	89 (19.3)	346 (74.9)	0 (0.0)	462 (100)
親主導	4 (9.1)	17 (38.6)	23 (52.3)	0 (0.0)	44 (100)
自然	5 (8.2)	9 (14.8)	47 (77.1)	0 (0.0)	61 (100)
その他	0 (0.0)	2 (40.0)	3 (60.0)	0 (0.0)	5 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④－Ｂ－42～44にそれぞれ「運動能力」教育の評価,「知的能力」教育の今後の意向,「社会性」教育の今後の意向の表を示す。これらの表によると，パーセンテージの大きさは異なるものの，いずれの場合も自然派に属する人の評価ないしは今後の意向が高いことが分かる。「運動能力」評価では肯定的評価が自然派で90%，何でも派と子供本位派で40～60%程度，「知的能力」の意向では積極的意向が自然派で45%,他では10%以下,「社会性」の意向では自然派で80%，他で60%程度である。統計的に有意なクロス集計表はこれら３つのみであるが,「健康な体」の評価と意向,「基礎的技能」の評価,「明朗な性格」の評価についてもやはり自然派の評価・意向が高い傾向にあった。

表III④—B—42　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保育者

運動能力

子育てへの基本的考え	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
何でも	10 (9.4)	51 (48.1)	39 (36.8)	6 (5.7)	0 (0.0)	106 (100)
子供本位	15 (11.3)	35 (26.3)	73 (54.9)	9 (6.8)	1 (0.8)	133 (100)
親主導	0 (0.0)	1 (100)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100)
自然	1 (8.3)	10 (83.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (8.3)	12 (100)
その他	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表III④—B—43　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保育者

知的能力

子育てへの基本的考え	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
何でも	1 (0.9)	7 (6.6)	92 (86.8)	6 (5.7)	106 (100)
子供本位	1 (0.8)	8 (6.1)	118 (89.4)	5 (3.8)	132 (100)
親主導	0 (0.0)	1 (100)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100)
自然	1 (9.1)	4 (36.4)	6 (54.6)	0 (0.0)	11 (100)
その他	1 (100)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④－Ｂ－44　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保育者

社会性

子育てへの基本的考え	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
何でも	41 (39.8)	16 (15.5)	46 (44.7)	0 (0.0)	103 (100)
子供本位	56 (42.4)	26 (19.7)	50 (37.9)	0 (0.0)	132 (100)
親主導	1 (100)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100)
自然	10 (83.3)	0 (0.0)	2 (16.7)	0 (0.0)	12 (100)
その他	0 (0.0)	1 (100)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

6.　この時期の必要性と幼稚園・保育所教育への評価・期待

それぞれの側面の教育がこの時期どれほど必要性があると思うかという質問への回答は，保護者調査でも保育者調査でも幼稚園・保育所教育への評価及び期待・意向の多くの項目と関連が認められた。

(1)保護者の場合

現在の幼稚園・保育所教育への評価に関しては「基本的生活習慣」と「知的能力」を除く各項目で，この時期の必要性の大きさと相関関係にあった。即ち，表Ⅲ④－B－45・46にその代表として「健康な体」と「情操性」の表を示すが，いずれの場合も「この時期にこそ必要である」「この時期にかなり必要である」と必要性を高く感じている人ほど「普通」という評価が減少し，「とても熱心に指導してくれている」「わりとよく指導してくれている」という肯定的評価が増加していることが分かる。

また，表Ⅲ④－B－47～49に示すように，「知的能力」「情操性」「忍耐力」の教育に対する今後の期待も評価と同様に，「この時期こそ」「この時期にかなり」とこの時期の必要性を高く感じる保護者は「おおいに力を入れてほしい」「今までよりは力を入れてほしい」の比率が「この時期にもある程度は必要である」「もう少し後の時期でもよい」と思っている者よりも高くなる。有意ではなかったが，「道徳的感覚」も同様の傾向であった。

(2)　保育者の場合

ほとんどの項目で，必要性を高く感じている程，評価が高く，また今後の教育への意向が強い。表Ⅲ④－B－50・51には評価の代表として「基本的生活習慣」と「知的能力」の表を掲げた。このうち表Ⅲ④－B－50の「基本的生活習慣」の教育への評価は「知的能力」を除く他の項目の教育への評価をよく代表している。即ち，「ある程度は必要」といった程度では「普通」かせいぜい「わりとよく」という評価であるが，「この時期にかなり」「この時期こそ」と必要性を強く感じる人ほど回答の中心が「普通」から「わりとよい」に移り，同時に「とてもよく」が増えてくる。一方，「知的能力」の教育の評価では，この時期の必要性を強く感じている人自体がそもそも少ないので断定できないが，パーセンテージで見る限り，やはり必要性を感じる程，評価は良くなる傾向にある。「もう少し後の時期でも」と考えている保育者では「あまり指導しない」「ほとんど指導しない」が中心であるが，「ある程度」という人達になると「普通」が中心となる。

この時期の必要性と現在の幼稚園・保育所教育の評価についてはすべての項目で同様の傾向が見られた。しかし，「健康な体」「運動能力」の２項目については統計的に有意なカイ二乗値は得られなかった。

表Ⅲ④—B—45　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保護者

健康な体

この時期の必要性	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
この時期こそ	45 (15.3)	120 (40.8)	121 (41.2)	8 (2.7)	0 (0.0)	294 (100)
かなり	28 (10.7)	87 (33.2)	131 (50.0)	15 (5.7)	1 (0.4)	262 (100)
ある程度は	10 (7.1)	41 (29.1)	84 (59.6)	6 (4.3)	0 (0.0)	141 (100)
もう少し後でも	3 (21.4)	4 (28.6)	7 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	14 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—46　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保護者

情操性

この時期の必要性	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
この時期こそ	15 (8.7)	52 (30.1)	82 (47.4)	20 (11.6)	4 (2.3)	173 (100)
かなり	14 (5.8)	67 (27.9)	122 (50.8)	37 (15.4)	0 (0.0)	240 (100)
ある程度は	18 (7.0)	63 (24.5)	154 (59.9)	20 (7.8)	2 (0.8)	257 (100)
もう少し後でも	1 (2.6)	7 (18.4)	22 (57.9)	8 (21.1)	0 (0.0)	38 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—47　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

知的能力

この時期の必要性	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
この時期こそ	6 (13.6)	16 (36.4)	22 (50.0)	0 (0.0)	44 (100)
かなり	7 (10.3)	30 (44.1)	31 (45.6)	0 (0.0)	68 (100)
ある程度は	15 (3.8)	112 (28.5)	265 (67.4)	1 (0.3)	393 (100)
もう少し後でも	5 (2.4)	31 (15.1)	164 (80.0)	5 (2.4)	205 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—48　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

情操性

この時期の必要性	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
この時期こそ	20 (11.6)	50 (28.9)	102 (59.0)	1 (0.6)	173 (100)
かなり	22 (9.2)	73 (30.4)	145 (60.4)	0 (0.0)	240 (100)
ある程度は	16 (6.3)	53 (20.7)	187 (73.1)	0 (0.0)	256 (100)
もう少し後でも	1 (2.6)	8 (20.5)	30 (76.9)	0 (0.0)	39 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—49　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

忍耐力

この時期の必要性	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
この時期こそ	24 (13.6)	40 (22.6)	113 (63.8)	0 (0.0)	177 (100)
かなり	24 (9.3)	64 (24.7)	171 (66.0)	0 (0.0)	259 (100)
ある程度は	15 (6.3)	51 (21.3)	174 (72.5)	0 (0.0)	240 (100)
もう少し後でも	0 (0.0)	7 (26.9)	19 (73.1)	0 (0.0)	26 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—50　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保育者

基本的生活習慣

この時期の必要性	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
この時期こそ	61 (28.9)	112 (53.1)	36 (17.1)	1 (0.5)	1 (0.5)	211 (100)
かなり	11 (22.0)	20 (40.0)	19 (38.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	50 (100)
ある程度は	0 (0.0)	3 (42.9)	4 (57.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (100)
もう少し後でも	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—51　幼稚園・保育所での「現在の指導の様子」

保育者

知的能力

この時期の必要性	とてもよく指導	わりとよく指導	普通	あまり指導しない	ほとんど指導しない	合計
この時期こそ	1 (50.0)	0 (0.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100)
かなり	0 (0.0)	1 (20.0)	3 (60.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	5 (100)
ある程度は	3 (2.3)	7 (5.4)	66 (51.2)	36 (27.9)	17 (13.2)	129 (100)
もう少し後でも	0 (0.0)	8 (6.1)	23 (17.4)	53 (40.2)	48 (36.4)	132 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

今後の教育の意向に関しても現在の教育への評価と全く同じ傾向で，この時期の必要性が高いと感じる程，今後力を入れていきたいとする意向が強くなる。

表Ⅲ④—B—52・53には「基本的生活習慣」と「道徳的感覚」の表を掲げたが，全部の項目で傾向はこれらと同じであった。表Ⅲ④—B—52によれば，「ある程度」の必要性を感じている人の場合大部分が「これまで通り」と現状を維持する意向を示しているのに対して，「この時期かなり」「この時期こそ」と必要性を高く感じる程「今までよりは」「おおいに」という積極的な意向が強くなっていく。表Ⅲ④—B—53の「道徳的感覚」も数字の大きさこそ違え同じ傾向で，「ある程度は」という人では「これまで通り」が約半数であるのに対して，「この時期こそ」では「おおいに」が半数を占めている。「知的能力」については，この時期の必要性，今後の意向とも他の項目と分布が異なる傾向としては同様で，「もう少し後でも」という人よりも「ある程度必要」という人の方が「今までより力を入れたい」という意向を多く持っている。

表Ⅲ④—B—52　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保育者

基本的生活習慣

この時期の必要性	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
この時期こそ	90 (43.1)	28 (13.4)	91 (43.5)	0 (0.0)	209 (100)
かなり	9 (17.7)	13 (25.5)	29 (56.9)	0 (0.0)	51 (100)
ある程度は	2 (28.6)	0 (0.0)	5 (71.4)	0 (0.0)	7 (100)
もう少し後でも	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—53　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保育者

道徳的感覚

この時期の必要性	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
この時期こそ	34 (50.0)	15 (22.1)	19 (27.9)	0 (0.0)	68 (100)
かなり	30 (21.7)	52 (37.7)	56 (40.6)	0 (0.0)	138 (100)
ある程度は	3 (5.4)	26 (46.4)	27 (48.2)	0 (0.0)	56 (100)
もう少し後でも	0 (0.0)	2 (66.7)	1 (33.3)	0 (0.0)	3 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

7.「園・家庭のどちらで教育すべきか」と幼稚園・保育所教育への評価・期待

次に，それぞれの教育項目は幼稚園・保育所で行った方がよいか家庭で行った方がよいかという質問への回答と幼稚園・保育所教育への評価・期待(意向)の関係を見てみる。

(1)　保護者の場合

保護者調査ではどちらで行うべきかと園での教育の今後への期待との間に，関係の認められる項目がいくつかあったが，評価との間には関係が見いだせなかった。

表Ⅲ④－B－54～57にそれぞれ「知的能力」「情操性」「基礎的技能」「道徳的感覚」の各項目に対するクロス集計表を掲げる。表Ⅲ④－B－54によれば，「知的能力」の教育を園で行う方がよいとする人には「おおいに力を入れてほしい」「今までよりは力を入れてほしい」という積極的な期待の声が約40％あるのに対して，家庭で行う方がよいとする人には積極的な園への期待は30％未満である。表Ⅲ④－B－55～57ではいずれも「主に幼稚園・保育所で指導すべきである」と考えている人の期待が他の人の期待と異なっていることが特徴である。即ち，表Ⅲ④－B－55の「情操性」では「主に園で」という人の約60％が積極的な期待を持っているが，それ以外の人で積極的な期待は30～40％に過ぎない。同じように「主に園で」という人とそうでない人の積極的期待を対比してみると，表Ⅲ④－B－56の「基礎的技能」では40％対20％，表Ⅲ④－B－57の「道徳的感覚」では40％対30％である。また統計的には有意ではなかったが，「明朗な性格」「忍耐力」も同様の傾向にあった。

はっきりと園での教育の重要性を認識している人ほど園に対する期待の声が大きいと考えられるだろう。

(2)　保育者の場合

保育者の調査では園と家庭のどちらで行うべきかという質問への回答と，園での教育への評価及び今後の意向の間に特に関連はなかった。それぞれの教育項目によって「家庭で」「園で」という判断は異なるものの(Ⅲ章参照)，現実の教育に対する意向はそれによる影響を受けていない。園の教師たちは家庭でやるべきだから園では指導しないというドライな態度ではなく，どちらでの教育が望ましいとしても，自分のできる範囲内で頑張っていこうという姿勢でいると考えられる。

表Ⅲ④—B—54　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

知的能力

どちらで行うべきか	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
主に家庭で	3 (4.3)	16 (22.9)	51 (72.9)	0 (0.0)	70 (100)
どちらかといえば家庭で	7 (2.3)	66 (21.6)	232 (75.8)	1 (0.3)	306 (100)
どちらかといえば園で	20 (6.8)	96 (32.5)	175 (59.3)	4 (1.4)	295 (100)
主に園で	3 (9.4)	9 (28.1)	19 (59.4)	1 (3.1)	32 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—55　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

情操性

どちらで行うべきか	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
主に家庭で	8 (10.8)	19 (25.7)	46 (62.2)	1 (1.4)	74 (100)
どちらかといえば家庭で	21 (7.9)	72 (27.2)	172 (64.9)	0 (0.0)	265 (100)
どちらかといえば園で	21 (6.2)	87 (25.6)	232 (68.2)	0 (0.0)	340 (100)
主に園で	9 (34.6)	6 (23.1)	11 (42.3)	0 (0.0)	26 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④－Ｂ－56　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

基礎的技能

どちらで行うべきか	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
主に家庭で	7 (8.2)	8 (9.4)	70 (82.4)	0 (0.0)	85 (100)
どちらかといえば家庭で	11 (4.3)	33 (12.8)	214 (83.0)	0 (0.0)	258 (100)
どちらかといえば園で	19 (5.7)	40 (12.1)	272 (82.2)	0 (0.0)	331 (100)
主に園で	6 (17.7)	8 (23.5)	20 (58.8)	0 (0.0)	34 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④－Ｂ－57　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

道徳的感覚

どちらで行うべきか	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
主に家庭で	26 (10.0)	56 (21.5)	179 (68.6)	0 (0.0)	261 (100)
どちらかといえば家庭で	19 (5.1)	71 (18.9)	286 (76.1)	0 (0.0)	376 (100)
どちらかといえば園で	4 (6.4)	15 (23.8)	44 (69.8)	0 (0.0)	63 (100)
主に園で	3 (42.9)	0 (0.0)	4 (57.1)	0 (0.0)	7 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

8. 習いごとと幼稚園・保育所での教育の評価・期待

(1) 保護者の場合

現在様々な習いごとに子供を通わせているかどうかと幼稚園・保育所教育への評価と今後の期待の関連を見るために，習いごとと関係のありそうな項目の評価・期待のクロス集計を行ってみた(例えば，スイミングスクールへ通わせているかどうかと園での「健康な体」の教育についての評価・期待，絵画教室やオルガン・ピアノ教室と「情操性」教育への評価・期待などである)。

その結果，関連の見られたものを表Ⅲ④—B—58・59に掲げる。これらによれば，「家庭用学習教材」を使用させている保護者には園でも「知的能力」の教育に力を入れてほしいと思っている人が多く，「習字」を習わせている保護者には「基礎的技能」に力を入れてほしいと思っている人が多いことが分かる。しかし大部分の項目で習いごとと園での教育の評価・期待には関連は見られなかった。

(2) 保育者の場合

保育者の習いごとや家庭用学習教材への態度と幼稚園・保育所教育への評価や今後の意向との関係も殆ど見られなかった。

表Ⅲ④—B—58　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

知的能力

家庭用学習教材	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
現在使っている	12 (6.9)	56 (32.0)	107 (61.1)	0 (0.0)	175 (100)
以前使ったがやめた	3 (8.1)	9 (24.3)	25 (67.6)	0 (0.0)	37 (100)
使ったことない	16 (3.4)	112 (24.0)	333 (71.3)	6 (1.3)	467 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

表Ⅲ④—B—59　幼稚園・保育所での（指導に対する）「感想・これから」

保護者

基礎的技能

習　　字	おおいに力を	今までよりは力を	これまで通りで	今までほど力を入れずに	合計
現在通わせている	6 (9.1)	14 (21.2)	46 (69.7)	0 (0.0)	66 (100)
以前通わせたがやめた	0 (0.0)	2 (50.0)	2 (50.0)	0 (0.0)	4 (100)
通わせたことない	34 (5.6)	73 (12.0)	504 (82.5)	0 (0.0)	611 (100)

カッコ内は各行ごとのパーセンテージ

（尚美学園短期大学講師　倉沢寿之）

Ⅳ　まとめと今後の課題

以上，わが国における就学前教育の現状，および，それに関わっている幼稚園児の父母や幼稚園教諭たちの就学前教育をめぐる様々な意識について，それらの一端を明らかにすることを目的として，今次の調査結果を紹介し，必要に応じた論議をなしてきた。

本紀要は客観性を求められる調査結果に関するデータを紹介するための調査報告書である以上，ここで筆者個人が，今回の研究プロジェクトを代表し，わが国における就学前教育のあるべき姿で将来像について述べるべきでないことは言うまでもないし，また，その資格や能力ももちあわせてはいない。したがって以下の文章は，あくまで幼稚園児をもつ一人の父親としての，筆者の個人的な感慨であることを，まずお断わりしておきたい。

「子どもは子どもらしく」というのは，どの時代の親にも共通してもたれている願いであるようだ。だがしかし，今回のプロジェクト研究に参加させてもらいながら，筆者はその「子どもらしく」という部分をめぐる考え方の相違という問題を，常に考えていた。

報告書の文中にも何度かでてきたことではあるが，子どもにとっての「遊び」を事のほか強調する人たちがいる。それはそれで，確かにいいのだろうし，筆者自身，その考え方を否定するつもりは毛頭ない。だが，現在の学校教育界における知的教育重視の風潮を目にする時，その考え方は，果たして普遍性をもつことができるのであろうか。

同じように，幼稚園では「遊び」を中心とした教育がおこなわれるべきだ，とか，家庭ではこういう指導がおこなわれるべきだ，といったような一種伝統的な考え方もわれわれの間に存在しているが，それとてどこまで絶対的な位置づけを確保できるというのであろうか。就学前教育も，やはり時代の流れとともに変っていく。あるいは，変っていかなければならない，というのが，筆者の基本的な考え方である。

当の子どもたちは，時代の，社会の，そして文化の変化に応じて，したたかに変化を続けている。筆者の時代，幼稚園で「ひらがな」の読み書きができる子どもなぞ数えるほどしかいなかった。今では，自分の子どもが「ひらがな」の読み書きができないとなると，親としては非常に焦り必死になってそれを教え込もうとする。テレビ・ラジオはもち論，ビデオですら幼稚園児にとっは，既に「おっかなビックリ触るべきすごい機械」ではない。既に彼らは「コンピュータ」などという言葉を口にするし，事実，キーボード世代に足を踏み込んでいる。

このような変化の中で，われわれは一体いつまで「べき」論や「理想」論で子どものための教育を語り続けられるというのだろうか。時代や社会は，われわれのわかったようでわからない「子どもらしさ」論議をはるかに超えたスピードで，どこかに向かってつき進んでいるので

はないか。「子どもは表で元気に走り回って遊んでいるのが一番」という言い分はわかる。しかし，その遊び場を奪ってしまったのは，われわれ大人ではなかったか。ファミコンは子どもの目に「毒」だと言われながらも，子どもにそれほど廉価でもないファミコンを買い与えているのは誰だというのであろうか。

繰り返すが，「べき論」や「理想論」で就学前教育を語れる時代は，既に終っているのだ。子どもを変えている当の大人が，いつまでも「昔の子ども」をイメージ・アップしているのでは，それこそつまらないノスタルジーだとの謗りを免れないだろう。

いいとか悪いとか，善とか悪とかの価値的判断はともかく，これからの就学前教育を変えていくのは，まずもってしたたかに変化しながら時代に適応しようとしている子どもであり，父母たちの教育要求であろう。就学前教育に携わる者には，それをしっかりと把握し理解できるだけの感覚的鋭さが必要なのであろう。そういう意味では，今回の調査データは父母にとっても幼稚園教諭にとっても，これからの就学前教育の方向性を考える上での，少なからぬ価値をもち得るのではないかと思うのである。父母にとっては，自分たちの世代が就学前教育をどう動かそうとしているのかについての，保育職にとっては，園児たちがどのような教育要求を園に突きつけてこようとしているのかについての，それぞれ貴重な情報を含んでいると筆者は思う。

調査研究としては，もち論，やり残している部分も多い。例えば，「なぜ」という問いに答えられるようなデータはほとんど得られていない。「なぜ，『子ども中心』的な考え方が多いのか」「なぜ，家庭で指導すべきだと思う人が多いのか」「なぜ，知的側面に関する教育・指導については父母・保育職ともに抵抗感が強いのか」など，興味はあるが手つかずで残してしまった問題が数多い。これらについては，いずれまた別の研究機会が与えられることがあったならば，是非とも手をつけてみたいと思っている。

（帝京大学講師　久保田力）

V　資料・基礎データ表

1 父母編

I．ここではまず，「子育て」に関するあなたの基本的なお考えをお聞かせください。

(1) この時期（3～5歳）の子どもの能力や才能の伸ばし方については，いろいろな考え方があります。あなたのお考えに最も近いと思われるのは，次の意見のうちどれでしょうか。1つだけ選んで番号に○印をおつけください。〔**ひとつだけ**〕

%
(n＝　)

1．いろいろな事をとにかく1通り1度は経験させてみて，子どもの能力・才能を引き出してやりたい。	16.2 (112)
2．子ども自身が興味や関心を示しているならば，それについての能力や才能を伸ばしてやるのがいい。	67.5 (466)
3．親の目からみて「必要だ」「むいている」と思われるならば，そのことについての能力や才能を伸ばしてやるのがいい。	6.7 (46)
4．子どもの能力や才能は自然に育ってくるものであるから，それを無理に伸ばしてやろうとは思わない。	8.8 (61)
5．その他（　　）	0.7 (5)

N＝690

(2) 次にあげたような能力・技能あるいは態度などを育てることは，一般的に考えてこの時期の子どもにとってどれほど必要なことだとお考えでしょうか。あるいはまた，「育てた方がいいとは思うが，小学校に入学してからでも遅くない」などとお考えでしょうか。あてはまる意見のところ（数字）に１つだけ○印をおつけください。〔**それぞれひとつだけ**〕

%
(n＝　)

	この時期にこそ必要である	この時期にかなり必要である	この時期にもある程度は必要である	もう少し後の時期でもよいと思う	
① 基本的生活習慣	65.6 (472)	26.0 (187)	8.2 (59)	0.3 (2)	N＝720
② 健康な体	41.2 (296)	37.1 (267)	19.8 (142)	2.0 (14)	N＝719
③ 知的能力	6.3 (45)	9.7 (70)	55.3 (398)	28.8 (207)	N＝720
④ 情操性	24.7 (178)	33.9 (244)	36.0 (259)	5.4 (39)	N＝720
⑤ 社会性	51.3 (369)	36.5 (263)	12.1 (87)	0.1 (1)	N＝720
⑥ 基礎的生活技能	26.7 (192)	37.4 (269)	34.2 (246)	1.8 (13)	N＝720
⑦ 道徳的感覚	30.6 (220)	39.3 (282)	26.9 (193)	3.2 (23)	N＝718
⑧ 運動能力	30.4 (219)	40.8 (294)	27.2 (196)	1.5 (11)	N＝720
⑨ 明朗な性格	47.9 (342)	35.2 (251)	15.7 (112)	1.3 (9)	N＝714
⑩ 忍耐力	25.0 (178)	37.2 (265)	34.1 (243)	3.7 (26)	N＝712
⑪ 基礎的言語能力	38.3 (276)	40.4 (291)	19.0 (137)	2.2 (16)	N＝720

(3)　左の質問でとりあげたような能力・技能あるいは態度などを育てるための指導は，しいていえば家庭および幼稚園・保育所のどちらが主になっておこなうべきだとお考えでしょうか。あてはまる意見のところ（数字）に1つだけ○印をおつけください。なお，上で「もう少し後の時期でもよいと思う」と答えた方も，「もし指導するとすれば…」という立場からお答えください。〔**それぞれひとつだけ**〕

%
(n＝　)

	主に家庭で指導をするべきだと思う	どちらかというと主に家庭で指導をするべきだと思う	どちらかというと幼稚園・保育所で指導すべきである	主に幼稚園・保育所で指導すべきである	
①　基本的生活習慣	69.7 (502)	29.6 (213)	0.7 (5)	0.0 (0)	N＝720
②　健康な体	37.9 (272)	49.8 (357)	11.4 (82)	0.8 (6)	N＝717
③　知的能力	10.1 (72)	43.5 (310)	41.9 (298)	4.5 (32)	N＝712
④　情操性	10.6 (76)	37.7 (270)	48.0 (344)	3.6 (26)	N＝716
⑤　社会性	4.9 (35)	12.0 (86)	63.2 (453)	19.9 (143)	N＝717
⑥　基礎的生活技能	12.3 (88)	36.7 (263)	46.3 (332)	4.7 (34)	N＝717
⑦　道徳的感覚	36.9 (264)	53.3 (381)	8.8 (63)	1.0 (7)	N＝715
⑧　運動能力	5.9 (42)	17.1 (122)	65.0 (465)	12.0 (86)	N＝715
⑨　明朗な性格	52.8 (377)	44.0 (314)	2.7 (19)	0.6 (4)	N＝714
⑩　忍耐力	25.5 (181)	52.2 (371)	20.4 (145)	2.0 (14)	N＝711
⑪　基礎的言語能力	32.7 (235)	48.6 (349)	15.6 (112)	3.1 (22)	N＝718

II．次に，あなたのご家庭での「子育て」の実際についてお聞かせください。

(1) お子さんの「子育て（教育・保育）」のために，以下の各項目についてどの程度の出費・金額であれば「負担に感じない」とお感じになりますか。あてはまるところ（番号）に1つだけ○印をおつけください。

① 定期的な出費や支出について（月額でお考えください）

ア．幼稚園・保育所の保育料（給食費等含む） %

（n＝　）

5000円まで	5000円～10000円	10000円～20000円	20000円～30000円	30000円以上
14.7 (106)	44.8 (323)	36.6 (264)	3.6 (26)	0.3 (2)

N＝721

イ．ならいごと（ピアノ・そろばん等）の謝礼 %

（n＝　）

3000円まで	3000円～5000円	5000円～10000円	10000円～20000円	20000円以上
26.4 (183)	53.0 (367)	16.5 (114)	3.9 (27)	0.3 (2)

N＝693

ウ．定期購読の本や雑誌代金（1か月あたり） %

（n＝　）

500円まで	500円～1000円	1000円～3000円	3000円～5000円	5000円以上
29.0 (206)	50.6 (359)	18.3 (130)	1.7 (12)	0.4 (3)

N＝710

エ．定期的な家庭用学習教材（1か月あたり） %

（n＝　）

500円まで	500円～1000円	1000円～3000円	3000円～5000円	5000円以上
29.5 (203)	48.8 (336)	19.0 (131)	2.6 (18)	0.0 (0)

N＝688

② ①以外のものの出費や支出について

ア．洋服などの代金（1着について）

%
（n＝　）

1000円まで	1000円～3000円	3000円～5000円	5000円～10000円	10000円以上
8.4 (60)	52.9 (378)	31.1 (222)	7.1 (51)	0.4 (3)

N＝714

イ．おもちゃの代金（1品について）

%
（n＝　）

1000円まで	1000円～3000円	3000円～5000円	5000円～10000円	10000円以上
37.0 (265)	48.0 (344)	14.1 (101)	1.0 (7)	0.0 (0)

N＝717

ウ．本・絵本の代金（1冊について）

%
（n＝　）

500円まで	500円～1000円	1000円～2000円	2000円～3000円	3000円以上
29.3 (211)	56.9 (409)	12.7 (91)	0.8 (6)	0.3 (2)

N＝719

エ．家庭用の学習教材（1セット）

%
（n＝　）

3000円まで	3000円～5000円	5000円～10000円	10000円～20000円	20000円以上
71.7 (484)	19.0 (128)	6.8 (46)	1.9 (13)	0.6 (4)

N＝675

(2) おたくでは，次のような「子どものふれあいの時間や機会」を普段どれくらいおもちでしょうか。また，そのことについてどのようなご感想・ご意見をおもちでしょうか。あてはまるところにそれぞれ１つずつ○印をおつけください。お父さんのことであっても，ご感想・ご意見はお母さんの立場からお答えください。〔**それぞれひとつだけ**〕

時間や機会をどれくらいおもちですか？

%

① 一緒にお風呂に入る　(n＝　)

	ほとんど毎日	2・3日に1度	1週間に1度位	1か月に1度位	ほとんどない
お母さんは N＝715	47.3 (338)	29.4 (210)	14.7 (105)	5.7 (41)	2.9 (21)
お父さんは N＝715	19.6 (140)	25.2 (180)	35.9 (257)	12.6 (90)	6.7 (48)

② 一緒に朝食を食べる

お母さんは N＝714	81.7 (583)	7.8 (56)	7.4 (53)	0.1 (1)	2.9 (21)
お父さんは N＝714	42.3 (302)	16.2 (116)	25.5 (182)	2.8 (20)	13.2 (94)

③ 一緒に夕食を食べる

お母さんは N＝715	95.7 (684)	2.7 (19)	1.5 (11)	0.0 (0)	0.1 (1)
お父さんは N＝715	39.7 (284)	26.3 (188)	29.2 (209)	2.7 (19)	2.1 (15)

④ 一緒に遊ぶ

お母さんは N＝716	39.8 (285)	32.5 (233)	21.1 (151)	2.7 (19)	3.9 (28)
お父さんは N＝715	9.7 (69)	19.7 (141)	51.5 (368)	10.8 (77)	8.4 (60)

そのことについてのお母さんの感想は？

%

(n＝　)

十分だと思う	十分ではないが満足している	もう少し多いとよいと思う	足りないと思う	
61.9 (440)	21.2 (151)	12.1 (86)	4.8 (34)	N＝711
38.3 (272)	20.7 (147)	28.3 (201)	12.8 (91)	N＝711
77.1 (545)	9.2 (65)	7.4 (52)	6.4 (45)	N＝707
44.0 (311)	18.8 (133)	17.0 (120)	20.2 (143)	N＝707
88.2 (625)	7.2 (51)	2.3 (16)	2.4 (17)	N＝709
42.5 (301)	22.3 (158)	20.3 (144)	15.0 (106)	N＝709
38.0 (271)	28.9 (206)	24.5 (175)	8.6 (61)	N＝713
17.5 (125)	29.5 (210)	31.7 (226)	21.3 (152)	N＝713

時間や機会をどれくらいおもちですか？

⑤ 本（絵本）を読んであげる

お母さんは N＝713	25.7 (183)	31.4 (224)	27.3 (195)	10.0 (71)	5.6 (40)
お父さんは N＝713	3.5 (25)	6.7 (48)	21.5 (153)	24.1 (172)	44.2 (315)

⑥ 一緒に音楽を聴く・歌う

お母さんは N＝709	21.0 (149)	32.3 (229)	27.2 (193)	11.1 (79)	8.3 (59)
お父さんは N＝709	2.1 (15)	7.3 (52)	24.5 (174)	18.6 (132)	47.4 (336)

⑦ 一緒に買い物に行く

お母さんは N＝712	19.9 (142)	36.8 (262)	36.7 (261)	6.3 (45)	0.3 (2)
お父さんは N＝712	1.3 (9)	3.1 (22)	51.4 (366)	29.8 (212)	14.5 (103)

そのことについてのお母さんの感想は？

26.4 (187)	23.7 (168)	33.8 (239)	16.1 (114)	N＝708
9.2 (65)	19.6 (139)	30.9 (219)	40.3 (285)	N＝708

25.1 (177)	30.4 (214)	30.3 (213)	14.2 (100)	N＝704
7.2 (51)	20.7 (146)	34.4 (242)	37.6 (265)	N＝704

57.6 (409)	33.4 (237)	7.2 (51)	1.8 (13)	N＝710
30.1 (214)	38.9 (276)	20.7 (147)	10.3 (73)	N＝710

(3) おたくでは，幼稚園・保育所以外に，お子さんを何かの「おけいこごと（習字・ピアノ・学習塾・スイミングスクール等）」に通わせていますか。通わせている方・通わせていない方ともに，以下の各問いにお答えください（お手数ですが，矢印の指示にしたがってお進みください）。

①［絵画教室］ （n＝ ） %

1．現在通わせている	8.1 (55)
2．以前通わせていたが，やめた	1.3 (9)
3．通わせたことはない	90.6 (618)

N＝682

ア．1週間に何回ですか（でしたか）？ 数字は実数

1回	2回	3回	4回
47	10	5	1

N＝63

イ．通わせている（いた）時期は？ 数字は実数

3か月以内	4か月～6か月	7か月～12か月	1年1か月～2年	2年をこえる
8	5	22	18	7

N＝60

ウ．通わせようとお考えになった主な理由は何ですか？（○印はいくつでも）

数字は実数

1．子どもが通いたいと言いだしたから	24
2．子どもの才能や能力を伸ばそうと思ったから	33
3．子どもの友だちが通っていたから	7
4．子どものしつけのことを考えて	2
5．子どもの健康づくりや体力のことを考えて	16
6．友だちを見つけるため	2
7．その他	8

N＝66

エ．お子さんの反応はいかがですか（でしたか）？（○印は1つだけ）　数字は実数

1．とても楽しんで通っている（いた）ように思う	36
2．とりわけ楽しいようでもつまらないようでもない（なかった）	23
3．とてもつまらなそう・やめたがっている（いた）ように思えた	2
4．実際に「つまらない」などと口にしている（いた）	3
5．その他	1

N＝65

現在通わせている方

やめた方

オ．今後，どうされようとお考えですか？（○印は１つだけ）　数字は実数

1．今後もひき続けて通わせたい	55

N＝55

カ．おやめになった理由は何でしょうか？（○印はいくつでも）　数字は実数

1．通わせる必要がないと思ったから	1
2．家から遠かったので	10
3．子どもが「やめたい」と言ったから	4
4．経済的負担が大きかったので	0
5．その他	5

N＝20

通わせたことがない方

キ．通わせないのはどういう理由からでしょうか？（○印はいくつでも）　数字は実数

1．通わせる必要がないと思うから	374
2．家の近くに適当なところがみつからないから	102

3．子どもが「通いたくない」と言うので	83
4．経済的な負担が大きくなるので	116
5．その他	60

N＝615

ク．今後どうしようとお考えでしょうか？　　数字は実数

1．今のところ通わせる予定はない	338
2．もう少し子どもが大きくなったら通わせたいと思う	48
3．子どもが「通いたい」と言いだしたら通わせたいと思う	188
4．家の近くに適当なところが見つかったら通わせたいと思う	21
5．経済的な余裕ができれば通わせたいと思う	16
6．その他	2

N＝613

② [習　字]　　%
(n＝　)

1．現在通わせている	9.6 (66)
2．以前通わせていたが，やめた	0.7 (5)
3．通わせたことはない	89.7 (617)

N＝688

ア．1週間に何回ですか（でしたか）？　　数字は実数

1回	3回
72	1

N＝73

イ．通わせている（いた）時期は？　　数字は実数

3か月以内	4か月～6か月	7か月～12か月	1年1か月～2年	2年をこえる
16	11	23	14	4

N＝68

ウ．通わせようとお考えになった主な理由は何ですか？（○印はいくつでも）

数字は実数

1．子どもが通いたいと言いだしたから	45
2．子どもの才能や能力を伸ばそうと思ったから	18

3．子どもの友だちが通っていたから	12
4．子どものしつけのことを考えて	13
5．子どもの健康づくりや体力のことを考えて	0
6．友だちを見つけるため	2
7．その他	11

N＝66

エ．お子さんの反応はいかがですか（でしたか）？（○印は１つだけ）　　数字は実数

1．とても楽しんで通っている（いた）ように思う	50
2．とりわけ楽しいようでもつまらないようでもない（なかった）	15
3．とてもつまらなそう・やめたがっている（いた）ように思えた	3
4．実際に「つまらない」などと口にしている（いた）	2
5．その他	0

N＝70

現在通わせている方　　やめた方

オ．今後，どうされようとお考えですか？（○印は１つだけ）　　数字は実数

1．今後もひき続いて通わせたい	64

2．やめさせたい	1

N＝65

カ．おやめになった理由は何でしょうか？（○印はいくつでも）　数字は実数

1．通わせる必要がないと思ったから	0
2．家から遠かったので	0
3．子どもが「やめたい」と言ったから	3
4．経済的負担が大きかったので	1
5．その他	1

N＝5

通わせたことがない方

キ．通わせないのはどういう理由からでしょうか？（○印はいくつでも）　数字は実数

1．通わせる必要がないと思うから	341
2．家の近くに適当なところがみつからないから	82
3．子どもが「通いたくない」と言うので	89

4．経済的な負担が大きくなるので	74
5．その他	73

N＝601

ク．今後どうしようとお考えでしょうか？　　数字は実数

1．今のところ通わせる予定はない	198
2．もう少し子どもが大きくなったら通わせたいと思う	191
3．子どもが「通いたい」と言いだしたら通わせたいと思う	177
4．家の近くに適当なところが見つかったら通わせたいと思う	24
5．経済的な余裕ができれば通わせたいと思う	13
6．その他	8

N＝611

③［オルガン・ピアノ（音楽関係）］　（n＝　）

	%
1．現在通わせている	29.6 (206)
2．以前通わせていたが，やめた	2.4 (17)
3．通わせたことはない	68.0 (473)

N＝696

ア．1週間に何回ですか（でしたか）？　　数字は実数

1回	3回
220	5

N＝225

イ．通わせている（いた）時期は？　　数字は実数

3か月以内	4か月～6か月	7か月～12か月	1年1か月～2年	2年をこえる
27	26	64	79	24

N＝220

ウ．通わせようとお考えになった主な理由は何ですか？（○印はいくつでも）

数字は実数

1．子どもが通いたいと言いだしたから	130
2．子どもの才能や能力を伸ばそうと思ったから	118

3．子どもの友だちが通っていたから	13
4．子どものしつけのことを考えて	7
5．子どもの健康づくりや体力のことを考えて	0
6．友だちを見つけるため	9
7．その他	26

N＝225

エ．お子さんの反応はいかがですか（でしたか）？（○印は１つだけ）　数字は実数

1．とても楽しんで通っている（いた）ように思う	159
2．とりわけ楽しいようでもつまらないようでもない（なかった）	49
3．とてもつまらなそう・やめたがっている（いた）ように思えた	7
4．実際に「つまらない」などと口にしている（いた）	1
5．その他	7

N＝223

現在通わせている方　　やめた方

オ．今後，どうされようとお考えですか？（○印は１つだけ）　数字は実数

1．今後もひき続いて通わせたい	201

2．やめさせたい	1

N＝202

カ．おやめになった理由は何でしょうか？（○印はいくつでも）　数字は実数

1．通わせる必要がないと思ったから	1
2．家から遠かったので	0
3．子どもが「やめたい」と言ったから	5
4．経済的負担が大きかったので	1
5．その他	5

N＝12

通わせたことがない方

キ．通わせないのはどういう理由からでしょうか？（○印はいくつでも）　数字は実数

1．通わせる必要がないと思うから	191
2．家の近くに適当なところがみつからないから	58
3．子どもが「通いたくない」と言うので	99

4．経済的な負担が大きくなるので	108
5．その他	47

N＝459

ク．今後どうしようとお考えでしょうか？　　数字は実数

1．今のところ通わせる予定はない	189
2．もう少し子どもが大きくなったら通わせたいと思う	68
3．子どもが「通いたい」と言いだしたら通わせたいと思う	157
4．家の近くに適当なところが見つかったら通わせたいと思う	19
5．経済的な余裕ができれば通わせたいと思う	25
6．その他	9

N＝467

④［知能教室・学習塾（知的教育関係）］（n＝　）

	%
1．現在通わせている	6.8 (47)
2．以前通わせていたが，やめた	1.7 (12)
3．通わせたことはない	91.4 (630)

N＝689

ア．1週間に何回ですか（でしたか）？　　数字は実数

1回	2回	3回	4回
35	23	1	1

N＝60

イ．通わせている（いた）時期は？　　数字は実数

3か月以内	4か月～6か月	7か月～12か月	1年1か月～2年	2年をこえる
13	4	25	13	5

N＝60

ウ．通わせようとお考えになった主な理由は何ですか？（○印はいくつでも）

数字は実数

1．子どもが通いたいと言いだしたから	24
2．子どもの才能や能力を伸ばそうと思ったから	36

3．子どもの友だちが通っていたから	3
4．子どものしつけのことを考えて	6
5．子どもの健康づくりや体力のことを考えて	0
6．友だちを見つけるため	4
7．その他	10

N＝60

エ．お子さんの反応はいかがですか（でしたか）？（○印は１つだけ）　数字は実数

1．とても楽しんで通っている（いた）ように思う	34
2．とりわけ楽しいようでもつまらないようでもない（なかった）	16
3．とてもつまらなそう・やめたがっている（いた）ように思えた	2
4．実際に「つまらない」などと口にしている（いた）	3
5．その他	5

N＝60

現在通わせている方　　やめた方

オ．今後，どうされようとお考えですか？（○印は１つだけ）　数字は実数

1．今後もひき続いて通わせたい	44

2．やめさせたい	1

N＝45

カ．おやめになった理由は何でしょうか？（○印はいくつでも）　数字は実数

1．通わせる必要がないと思ったから	4
2．家から遠かったので	0
3．子どもが「やめたい」と言ったから	3
4．経済的負担が大きかったので	1
5．その他	6

N＝13

通わせたことがない方

キ．通わせないのはどういう理由からでしょうか？（○印はいくつでも）　数字は実数

1．通わせる必要がないと思うから	496
2．家の近くに適当なところがみつからないから	44
3．子どもが「通いたくない」と言うので	40

4．経済的な負担が大きくなるので	72
5．その他	21

N＝619

ク．今後どうしようとお考えでしょうか？　　数字は実数

1．今のところ通わせる予定はない	424
2．もう少し子どもが大きくなったら通わせたいと思う	75
3．子どもが「通いたい」と言いだしたら通わせたいと思う	103
4．家の近くに適当なところが見つかったら通わせたいと思う	6
5．経済的な余裕ができれば通わせたいと思う	10
6．その他	2

N＝620

⑤［スイミングスクール・体操教室（体育関係）］　（n＝　）　%

1．現在通わせている	28.8 (202)
2．以前通わせていたが，やめた	5.8 (41)
3．通わせたことはない	65.4 (459)

N＝702

ア．1週間に何回ですか（でしたか）？　数字は実数

1回	2回	3回	4回	5回
164	69	3	2	1

N＝239

イ．通わせている（いた）時期は？　数字は実数

3か月以内	4か月～6か月	7か月～12か月	1年1か月～2年	2年をこえる
37	49	59	55	35

N＝235

ウ．通わせようとお考えになった主な理由は何ですか？（○印はいくつでも）

数字は実数

1．子どもが通いたいと言いだしたから	83
2．子どもの才能や能力を伸ばそうと思ったから	28

3．子どもの友だちが通っていたから	17
4．子どものしつけのことを考えて	7
5．子どもの健康づくりや体力のことを考えて	200
6．友だちを見つけるため	12
7．その他	21

N＝241

エ．お子さんの反応はいかがですか（でしたか）？（○印は１つだけ）　数字は実数

1．とても楽しんで通っている（いた）ように思う	149
2．とりわけ楽しいようでもつまらないようでもない（なかった）	58
3．とてもつまらなそう・やめたがっている（いた）ように思えた	17
4．実際に「つまらない」などと口にしている（いた）	6
5．その他	9

N＝239

現在通わせている方　　やめた方

オ．今後，どうされようとお考えですか？（○印は１つだけ）　数字は実数

1．今後もひき続いて通わせたい	187

2．やめさせたい	6

N＝193

カ．おやめになった理由は何でしょうか？（○印はいくつでも）　数字は実数

1．通わせる必要がないと思ったから	4
2．家から遠かったので	4
3．子どもが「やめたい」と言ったから	18
4．経済的負担が大きかったので	1
5．その他	18

N＝37

通わせたことがない方

キ．通わせないのはどういう理由からでしょうか？（○印はいくつでも）　数字は実数

1．通わせる必要がないと思うから	157
2．家の近くに適当なところがみつからないから	71
3．子どもが「通いたくない」と言うので	114

4．経済的な負担が大きくなるので	94
5．その他	47

N＝446

ク．今後どうしようとお考えでしょうか？　　数字は実数

1．今のところ通わせる予定はない	133
2．もう少し子どもが大きくなったら通わせたいと思う	94
3．子どもが「通いたい」と言いだしたら通わせたいと思う	161
4．家の近くに適当なところが見つかったら通わせたいと思う	22
5．経済的な余裕ができれば通わせたいと思う	35
6．その他	8

N＝453

⑥［家庭用学習教材］　　%
（n＝　）

1．現在使っている	25.8 (177)
2．以前使っていたが，やめた	5.5 (38)
3．使ったことはない	68.7 (472)

N＝687

ア．使い始めてどの位になりますか？　　数字は実数

3か月以内	4か月～6か月	7か月～12か月	1年1か月～2年	2年をこえる
14	20	71	58	40

N＝203

イ．お始めになった主な理由は次のうちのどれですか？（○印はいくつでも）

数字は実数

1．子どもが「やりたい」と言いだしたから	86
2．子どもの才能や能力を伸ばそうと思ったから	94
3．子どもの友だちが使っていたから	23
4．子どものしつけのことを考えて	19
5．その他	32

N＝209

ウ．お子さんの反応はいかがですか（でしたか）？（○印は１つだけ）　数字は実数

1．とても楽しんでやっている（いた）ように思う	134
2．とりわけ楽しいようでもつまらないようでもない（なかった）	68
3．とてもつまらなそう・やめたがっている（いた）ように思えた	3
4．実際に「つまらない」などと口にしている（いた）	1
5．その他	2

N＝208

現在使っている方

オ．今後，どうされようとお考えですか？（○印は１つだけ）　数字は実数

1．今後もひき続いて使いたい	162
2．やめたい	10

N＝172

やめた方

カ．おやめになった理由は何でしょうか？（○印はいくつでも）　数字は実数

1．使う必要がないと思ったから	10
2．教材が適当でないと思ったから	7

3．子どもが「やめたい」と言ったから	8
4．経済的負担が大きかったので	2
5．その他	8

N＝34

使ったことがない方

キ．お使いにならないのはどうしてでしょうか？（○印はいくつでも）　数字は実数

1．使う必要がないと思うから	347
2．適当な教材がみつからないから	79
3．子どもが「やりたくない」と言うので	17
4．経済的な負担が大きくなるので	45
5．その他	20

N＝463

ク．今後どうしようとお考えでしょうか？　　数字は実数

1．今のところ使う予定はない	296
2．もう少し子どもが大きくなったら始めたいと思う	70
3．子どもが「やりたい」と言いだしたら始めたいと思う	70
4．適当な教材が見つかったらやらせたいと思う	37
5．経済的な余裕ができればやらせたいと思う	5
6．その他	2

N＝480

⑦［その他］　　%
（n＝　）

1．現在通わせている	39
2．以前通わせていたが，やめた	5
3．通わせたことはない	5

N＝49

ア．1週間に何回ですか（でしたか）？　　数字は実数

1回	2回
37	6

N＝43

イ．通わせている（いた）時期は？　　数字は実数

3か月以内	4か月～6か月	7か月～12か月	1年1か月～2年	2年をこえる
9	8	13	10	3

N＝43

ウ．通わせようとお考えになった主な理由は何ですか？（○印はいくつでも）

数字は実数

1．子どもが通いたいと言いだしたから	18
2．子どもの才能や能力を伸ばそうと思ったから	8

3．子どもの友だちが通っていたから	4
4．子どものしつけのことを考えて	6
5．子どもの健康づくりや体力のことを考えて	16
6．友だちを見つけるため	5
7．その他	7

N＝44

エ．お子さんの反応はいかがですか（でしたか）？（○印は1つだけ）　数字は実数

1．とても楽しんで通っている（いた）ように思う	35
2．とりわけ楽しいようでもつまらないようでもない（なかった）	6
3．とてもつまらなそう・やめたがっている（いた）ように思えた	0
4．実際に「つまらない」などと口にしている（いた）	1
5．その他	0

N＝42

現在通わせている方　　やめた方

オ．今後，どうされようとお考えですか？（○印は1つだけ）　数字は実数

1．今後もひき続いて通わせたい	38

2．やめさせたい	0

N＝38

カ．おやめになった理由は何でしょうか？（○印はいくつでも）　数字は実数

1．通わせる必要がないと思ったから	1
2．家から遠かったので	1
3．子どもが「やめたい」と言ったから	1
4．経済的負担が大きかったので	0
5．その他	3

N＝5

(4)　あなたのご家庭では，以下にあげたようなお子さんに対する指導や注意がどのくらいおこなわれているでしょうか。また，そのことについて今後どうしたらよいとお考えでしょうか。あてはまるところ(評価・感想)に１つだけ○印をおつけください。〔**それぞれひとつだけ**〕

現在の指導の様子について

%
(n＝　)

	とてもよく指導している	わりとよく指導している	普通だと思う	あまり指導していない	ほとんど指導していない
①　基本的生活習慣 N＝719	9.3 (67)	32.7 (235)	54.7 (393)	3.3 (24)	0.0 (0)
②　健康な体 N＝720	4.9 (35)	22.4 (161)	59.3 (427)	12.6 (91)	0.8 (6)
③　知的能力 N＝720	1.4 (10)	9.3 (67)	45.6 (328)	34.6 (249)	9.2 (66)
④　情操性 N＝716	2.1 (15)	15.9 (114)	48.7 (349)	27.4 (196)	5.9 (42)
⑤　社会性 N＝719	7.0 (50)	28.9 (208)	56.3 (405)	6.4 (46)	1.4 (10)
⑥　基礎的生活技能 N＝718	4.3 (31)	16.0 (115)	64.5 (463)	12.1 (87)	3.1 (22)
⑦　道徳的感覚 N＝718	5.9 (42)	26.7 (192)	56.7 (407)	9.7 (70)	1.0 (7)
⑧　運動能力 N＝718	2.6 (19)	12.1 (87)	57.8 (415)	22.0 (158)	5.4 (39)
⑨　明朗な性格 N＝718	6.1 (44)	21.6 (155)	64.5 (463)	6.5 (47)	1.3 (9)
⑩　忍耐力 N＝718	5.7 (41)	26.2 (188)	55.4 (398)	11.8 (85)	0.8 (6)
⑪　基礎的言語能力 N＝719	5.6 (40)	26.4 (190)	59.4 (427)	7.5 (54)	1.1 (8)

そのことについての感想・これからは？

%
(n＝　)

	おおいに力をいれたいと思う	今までよりは力を入れたい	これまで通りやりたいと思う	今までほど力を入れる気はない	
① 基本的生活習慣	16.9 (121)	35.2 (253)	47.6 (342)	0.3 (2)	N＝718
② 健康な体	14.6 (105)	30.9 (222)	54.0 (388)	0.6 (4)	N＝719
③ 知的能力	4.7 (34)	35.7 (257)	58.6 (421)	1.0 (7)	N＝719
④ 情操性	8.2 (59)	36.0 (258)	55.2 (395)	0.6 (4)	N＝716
⑤ 社会性	14.4 (103)	21.5 (154)	63.7 (457)	0.4 (3)	N＝717
⑥ 基礎的生活技能	4.3 (31)	21.2 (152)	73.6 (527)	0.8 (6)	N＝716
⑦ 道徳的感覚	10.1 (72)	31.2 (223)	58.5 (418)	0.3 (2)	N＝715
⑧ 運動能力	6.7 (48)	24.3 (174)	67.8 (485)	1.1 (8)	N＝715
⑨ 明朗な性格	12.7 (91)	22.7 (162)	64.0 (457)	0.6 (4)	N＝714
⑩ 忍耐力	15.9 (114)	36.0 (258)	47.7 (342)	0.4 (3)	N＝717
⑪ 基礎的言語能力	15.1 (108)	34.8 (249)	49.7 (356)	0.4 (3)	N＝716

Ⅲ．今度は，お子さんの幼稚園・保育所での「教育・保育」についてお聞かせください。

あなたは，お子さんがかよっている幼稚園や保育所で，以下にあげたような指導や注意がどのくらいおこなわれているとお考えになりますか。また，そこでの今後における指導のあり方についてどのようなご感想をおもちですか。あてはまるところ（評価・感想）に1つだけ○印をおつけください。〔**それぞれひとつだけ**〕

① 歯磨・洗顔・後かたづけ・挨拶など，基本的な生活習慣を身につけさせること。
(基本的生活習慣)

② 風邪をひきにくい・骨を折りにくいなど，健康で丈夫な体をつくること。
(健康な体)

③ ひらがなや簡単な計算など，基礎的な知的能力を身につけさせること。
(知的能力)

④ 絵や音楽などを見聞きして，美しいとか楽しいと感じられるような心をもたせること。
(情操性)

⑤ 友だちと仲よく遊べるというような社会性を身につけさせること。
(社会性)

⑥ はさみ・糊・鉛筆などが使えるなど，日常生活上の基礎的な技能を身につけさせること。
(基礎的生活技能)

⑦ 年少者やお年寄りをいたわるなど，道徳的感覚の基礎を身につけさせること。
(道徳的感覚)

⑧ 走る・とびおりる・ジャンプするなど，基本的な運動能力を身につけさせること。
(運動能力)

⑨ 明るくて素直な性格を育むこと。
(明朗な性格)

⑩ 少々のことではへこたれないというような「がまんづよさ」を身につけさせること。
(忍耐力)

⑪ したいこと・してほしいこと等をきちんと言えるなど，基本的な言語能力を身につけさせること。
(基礎的言語能力)

現在の指導の様子について

%
(n＝　)

	とても熱心に指導してくれている	わりとよく指導してくれている	普通だと思う	あまり熱心な指導はしてくれていない	ほとんど指導はしてくれていない
① 基本的生活習慣 N＝713	15.8 (113)	39.4 (281)	41.4 (295)	2.9 (21)	0.4 (3)
② 健康な体 N＝714	12.0 (86)	35.4 (253)	48.3 (345)	4.1 (29)	0.1 (1)
③ 知的能力 N＝710	1.5 (11)	7.2 (51)	48.5 (344)	23.4 (166)	19.4 (138)
④ 情操性 N＝710	6.8 (48)	26.8 (190)	53.7 (381)	12.0 (85)	0.8 (6)
⑤ 社会性 N＝710	12.1 (86)	41.8 (297)	43.8 (311)	2.0 (14)	0.3 (2)
⑥ 基礎的生活技能 N＝714	7.7 (55)	36.1 (258)	53.8 (384)	2.1 (15)	0.3 (2)
⑦ 道徳的感覚 N＝714	5.7 (41)	24.2 (173)	64.0 (457)	5.0 (36)	1.0 (7)
⑧ 運動能力 N＝714	11.6 (83)	30.7 (219)	52.2 (373)	4.6 (33)	0.8 (6)
⑨ 明朗な性格 N＝713	8.8 (63)	25.4 (181)	63.7 (454)	1.7 (12)	0.4 (3)
⑩ 忍耐力 N＝711	5.5 (39)	22.2 (158)	67.9 (483)	3.8 (27)	0.6 (4)
⑪ 基礎的言語能力 N＝713	6.7 (48)	20.6 (147)	67.0 (478)	5.3 (38)	0.3 (2)

そのことについての感想・これからは？

%
(n＝　)

	おおいに力をいれてほしい	今までよりは力を入れてほしい	これまで通りでよいと思う	今までほど力を入れる気はない	
① 基本的生活習慣	9.0 (64)	15.4 (110)	75.5 (538)	0.1 (1)	N＝713
② 健康な体	9.0 (64)	19.2 (137)	71.8 (513)	0.0 (0)	N＝714
③ 知的能力	4.6 (33)	26.7 (190)	67.8 (483)	0.8 (6)	N＝712
④ 情操性	8.3 (59)	26.1 (185)	65.5 (465)	0.1 (1)	N＝710
⑤ 社会性	9.6 (68)	16.2 (115)	74.3 (528)	0.0 (0)	N＝711
⑥ 基礎的生活技能	6.0 (43)	12.6 (90)	81.3 (580)	0.0 (0)	N＝713
⑦ 道徳的感覚	7.3 (52)	20.2 (144)	72.5 (517)	0.0 (0)	N＝713
⑧ 運動能力	7.7 (55)	20.3 (145)	72.0 (513)	0.0 (0)	N＝713
⑨ 明朗な性格	7.6 (54)	15.2 (108)	77.2 (550)	0.0 (0)	N＝712
⑩ 忍耐力	9.0 (64)	22.8 (162)	68.2 (485)	0.0 (0)	N＝711
⑪ 基礎的言語能力	10.2 (73)	24.5 (175)	65.2 (465)	0.0 (0)	N＝713

Ⅳ．最後に，あなたご自身とあなたのご家族について簡単にお聞かせ願います。

(1) ご回答いただきましたあなたは，この調査の対象であるお子さんからみて……。

%
(n＝　)

母	父	祖父母
98.3 (705)	1.5 (11)	0.1 (1)

N＝717

(2) あなたのおとしをお教えください。

%
(n＝　)

20～29歳	30～34歳	35～39歳	40～49歳	50歳以上
11.1 (80)	50.7 (364)	32.6 (234)	5.3 (38)	0.3 (2)

N＝718

(3) もしよろしければ，あなたが最後に卒業された学校をお教えください。

%
(n＝　)

中学校	高等学校	短大	大学(4年制)	専門学校	その他
3.9 (28)	51.2 (366)	18.6 (133)	12.4 (89)	13.0 (93)	0.8 (6)

N＝715

(4) あなたご自身は，教員免許状や保母資格をおもちではありませんか？

%
(n＝　)

① 教員免許状（幼稚園教諭免許状を含む）

もっている	もっていない
15.7 (111)	84.3 (594)

N＝705

② 保母資格

もっている	もっていない
5.1 (34)	94.9 (632)

N＝666

(5) お子さんの「お母さん」は，何かお仕事をおもちでしょうか？　%

(n＝　)

1．パートタイム・内職をもっている	16.9 (121)
2．家業（お店など）に就いている	7.4 (53)
3．家庭外に正規の職場をもっている	6.7 (48)
4．とくにない	69.0 (493)

N＝715

(6) お子さんの「お父さん」のお仕事は，次のうちのどれにあたりますか？　%

(n＝　)

1．農業・漁業・林業	0.8 (6)
2．運転手・大工・工場作業員・現場作業員などの技能工・労務作業員	20.5 (147)
3．店員・セールスマン・警官などの販売・サービス・保安職	12.4 (89)
4．一般事務職の会社員・公務員（管理職を含む）	40.2 (288)
5．医師・弁護士・会計士などの専門職的自由業	2.9 (21)
6．学校・大学などの教員	4.2 (30)
7．商店・飲食店などの自営業	5.6 (40)
8．会社や団体の役員	7.0 (50)
9．無職	0.1 (1)
10．死亡その他により不在または別居	0.8 (6)
11．その他	5.4 (39)

N＝717

(7) あなたのお子さん全員についてお教えください。

1．1人めの子ども

数字は実数

① 年 齢

3歳	4歳	5歳	6～10歳	11～19歳	20歳以上
5	54	119	248	30	1

N＝457

数字は実数

② 性 別

男	女
228	243

N＝471

数字は実数

③ 園 別

幼稚園
312

N＝312

2．2人めの子ども

数字は実数

① 年 齢

0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6～10歳	11～19歳
8	12	32	41	51	115	160	7

N＝426

数字は実数

② 性 別

男	女
222	229

N＝451

数字は実数

③ 園 別

幼稚園	保育所
308	1

N＝309

3．3人めの子ども

数字は実数

① 年 齢

0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6～10歳
9	10	14	15	15	39	37

N＝139

数字は実数

② 性　別

男	女
74	74

N＝148

数字は実数

③ 園　別

幼稚園
94

N＝94

4．4人めの子ども

数字は実数

① 年　齢

1歳	3歳	5歳	6～10歳
1	1	4	4

N＝10

数字は実数

② 性　別

男	女
6	4

N＝10

数字は実数

③ 園　別

幼稚園
9

N＝9

5．5人めの子ども

数字は実数

① 年　齢

5歳
1

N＝1

数字は実数

② 性　別

女
1

N＝1

数字は実数

③ 園　別

幼稚園
1

N＝1

2 保育職編

Ⅰ．まず，保育職のお立場からの子どもの教育・保育に関する基本的なお考えをお聞きします。

(1) この時期（3～5歳）の子どもの能力や才能の伸ばし方については，いろいろな考え方があります。先生のお考えに最も近いと思われるのは，次の意見のうちどれでしょうか。1つだけ選んで番号に○印をおつけください。〔**ひとつだけ**〕

%
(n＝　)

1．いろいろな事をとにかく1通り1度は経験させてみて，子どもの能力・才能を引き出してやるのがいい。	42.2 (108)
2．子ども自身が興味や関心を示しているならば，それについての能力や才能を伸ばしてやるのがいい。	52.3 (134)
3．親の目からみて「必要だ」「むいている」と思われるならば，そのことについての能力や才能を伸ばしてやるのがいい。	0.4 (1)
4．子どもの能力や才能は自然に育ってくるものであるから，それを無理に伸ばしてやろうとは思わない。	4.7 (12)
5．その他	0.4 (1)

N＝256

(2) 次にあげたような能力・技能あるいは態度などを育てることは，一般的に考えてこの時期の子どもにとってどれほど必要なことだとお考えでしょうか。あるいはまた，「育てた方がいいとは思うが，小学校に入学してからでも遅くない」などとお考えでしょうか。あてはまる意見のところ（数字）に1つだけ○印をおつけください。〔**それぞれひとつだけ**〕

%
(n＝　)

	この時期にこそ必要である	この時期にかなり必要である	この時期にもある程度は必要である	もう少し後の時期でもよいと思う	
① 基本的生活習慣	77.9 (211)	19.6 (53)	2.6 (7)	0.0 (0)	N＝271
② 健康な体	35.6 (96)	46.7 (126)	17.0 (46)	0.7 (2)	N＝270
③ 知的能力	0.7 (2)	1.8 (5)	48.0 (130)	49.4 (134)	N＝271
④ 情操性	35.1 (95)	45.4 (123)	18.8 (51)	0.7 (2)	N＝271
⑤ 社会性	68.3 (185)	28.4 (77)	3.3 (9)	0.0 (0)	N＝271
⑥ 基礎的生活技能	11.5 (31)	46.7 (126)	40.7 (110)	1.1 (3)	N＝270
⑦ 道徳的感覚	25.6 (69)	51.9 (140)	21.5 (58)	1.1 (3)	N＝270
⑧ 運動能力	29.1 (78)	53.0 (142)	17.9 (48)	0.0 (0)	N＝268
⑨ 明朗な性格	63.7 (172)	32.6 (88)	3.7 (10)	0.0 (0)	N＝270
⑩ 忍耐力	25.5 (68)	46.1 (123)	28.1 (75)	0.4 (1)	N＝267
⑪ 基礎的言語能力	37.8 (102)	53.0 (143)	8.9 (24)	0.4 (1)	N＝270

(3) 上の質問でとりあげたような能力・技能あるいは態度などを育てるための指導は，しいていえば家庭および幼稚園・保育所のどちらが主になっておこなうべきだとお考えでしょうか。あてはまる意見のところ（数字）に１つだけ○印をおつけください。なお，上で「もう少し後の時期でもよいと思う」と答えた方も，「もし指導するとすれば」という立場からお答えください。〔**それぞれひとつだけ**〕

%
（n＝　）

	主に家庭で指導をするべきだと思う	どちらかというと主に家庭で指導をするべきだと思う	どちらかというと幼稚園・保育所で指導すべきである	主に幼稚園・保育所で指導すべきである	
① 基本的生活習慣	53.9 (145)	43.1 (116)	3.0 (8)	0.0 (0)	N＝269
② 健康な体	21.1 (56)	59.6 (158)	18.5 (49)	0.8 (2)	N＝265
③ 知的能力	13.2 (34)	50.0 (129)	33.7 (87)	3.1 (8)	N＝258
④ 情操性	4.9 (13)	28.0 (74)	61.7 (163)	5.3 (14)	N＝264
⑤ 社会性	1.1 (3)	3.0 (8)	56.2 (150)	39.7 (106)	N＝267
⑥ 基礎的生活技能	1.9 (5)	29.3 (77)	60.8 (160)	8.0 (21)	N＝263
⑦ 道徳的感覚	21.2 (56)	62.1 (164)	15.2 (40)	1.5 (4)	N＝264
⑧ 運動能力	1.9 (5)	13.9 (37)	64.7 (172)	19.5 (52)	N＝266
⑨ 明朗な性格	43.3 (114)	53.2 (140)	3.4 (9)	0.0 (0)	N＝263
⑩ 忍耐力	16.4 (43)	41.8 (110)	38.8 (102)	3.0 (8)	N＝263
⑪ 基礎的言語能力	17.1 (45)	39.9 (105)	38.4 (101)	4.6 (12)	N＝263

(4)　先生は，この時期の子どもたちの「おけいこごと」や「ならいごと」等についてどのように思われますか。以下にあげた例について，あてはまるところの番号に○印を１つおつけください。〔それぞれひとつだけ〕

%

①　お習字　（n＝　）

1．子どもが興味や関心をもっているのならばやらせてもよいと思う	50.9 (137)
2．やらないよりはやった方がよいのではないかと思う	0.0 (0)
3．父母がやらせようと思っているのならば，やらせればよいと思う	3.7 (10)
4．この時期の子どもにとっては，幼稚園や保育所での活動で十分であると思う	43.1 (116)
5．是非ともやらせておくべきものだと思う	0.0 (0)
6．やらせることによって害になる部分が多いと思う	2.2 (6)

N＝269

%

②　オルガン・ピアノ等（音楽関係）　（n＝　）

1．子どもが興味や関心をもっているのならばやらせてもよいと思う	88.5 (238)
2．やらないよりはやった方がよいのではないかと思う	3.3 (9)
3．父母がやらせようと思っているのならば，やらせればよいと思う	2.6 (7)
4．この時期の子どもにとっては，幼稚園や保育所での活動で十分であると思う	3.7 (10)
5．是非ともやらせておくべきものだと思う	1.9 (5)
6．やらせることによって害になる部分が多いと思う	0.0 (0)

N＝269

%

③ 絵画教室など（芸術関係） （n＝ ）

1．子どもが興味や関心をもっているのならばやらせてもよいと思う	62.2 (168)
2．やらないよりはやった方がよいのではないかと思う	1.9 (5)
3．父母がやらせようと思っているのならば，やらせればよいと思う	2.2 (6)
4．この時期の子どもにとっては，幼稚園や保育所での活動で十分であると思う	30.4 (82)
5．是非ともやらせておくべきものだと思う	0.4 (1)
6．やらせることによって害になる部分が多いと思う	3.0 (8)

N＝270

%

④ 知能教室・学習塾（知的教育関係） （n＝ ）

1．子どもが興味や関心をもっているのならばやらせてもよいと思う	17.1 (46)
2．やらないよりはやった方がよいのではないかと思う	0.7 (2)
3．父母がやらせようと思っているのならば，やらせればよいと思う	3.7 (10)
4．この時期の子どもにとっては，幼稚園や保育所での活動で十分であると思う	62.1 (167)
5．是非ともやらせておくべきものだと思う	0.0 (0)
6．やらせることによって害になる部分が多いと思う	16.4 (44)

N＝269

%

⑤　スイミングスクール等（体育関係）　（n＝　）

1．子どもが興味や関心をもっているのならばやらせてもよいと思う	81.3 (218)
2．やらないよりはやった方がよいのではないかと思う	4.1 (11)
3．父母がやらせようと思っているのならば，やらせればよいと思う	6.0 (16)
4．この時期の子どもにとっては，幼稚園や保育所での活動で十分であると思う	6.7 (18)
5．是非ともやらせておくべきものだと思う	1.1 (3)
6．やらせることによって害になる部分が多いと思う	0.7 (2)

N＝268

%

⑥　家庭での個人学習教材　（n＝　）

1．子どもが興味や関心をもっているのならばやらせてもよいと思う	34.6 (93)
2．やらないよりはやった方がよいのではないかと思う	1.9 (5)
3．父母がやらせようと思っているのならば，やらせればよいと思う	7.1 (19)
4．この時期の子どもにとっては，幼稚園や保育所での活動で十分であると思う	43.9 (118)
5．是非ともやらせておくべきものだと思う	0.0 (0)
6．やらせることによって害になる部分が多いと思う	12.6 (34)

N＝269

II．次に，子どもたちの家庭での「子育て」について意見をお聞かせください。

先生は，園での子どもたちの様子をみて，以下にあげたような指導や注意が家庭においてどの程度おこなわれているとお感じになっていますか。また，そのことについて，どのようなご感想なりご意見をおもちですか。あてはまるところ（評価・感想）に1つだけ○印をおつけください。〔**それぞれひとつだけ**〕

① 歯磨・洗顔・後かたづけ・挨拶など，基本的な生活習慣を身につけさせること。
(基本的生活習慣)

② 風邪をひきにくい・骨を折りにくいなど，健康で丈夫な体をつくること。
(健康な体)

③ ひらがなや簡単な計算など，基礎的な知的能力を身につけさせること。
(知的能力)

④ 絵や音楽などを見聞きして，美しいとか楽しいと感じられるような心をもたせること。
(情操性)

⑤ 友だちと仲よく遊べるというような社会性を身につけさせること。
(社会性)

⑥ はさみ・糊・鉛筆などが使えるなど，日常生活上の基礎的な技能を身につけさせること。
(基礎的生活技能)

⑦ 年少者やお年寄りをいたわるなど，道徳的感覚の基礎を身につけさせること。
(道徳的感覚)

⑧ 走る・とびおりる・ジャンプするなど，基本的な運動能力を身につけさせること。
(運動能力)

⑨ 明るくて素直な性格を育むこと。
(明朗な性格)

⑩ 少々のことではへこたれないというような「がまんづよさ」を身につけさせること。
(忍耐力)

⑪ したいこと・してほしいこと等をきちんと言えるなど，基本的な言語能力を身につけさせること。
(基礎的言語能力)

現在の指導の様子について

%
(n＝　)

	ほとんどの家庭で熱心に指導している	半数以上の家庭で熱心に指導している	熱心な指導をしている家庭は半数以下である	熱心な指導をしている家庭は少ない	ほとんどの家庭では指導をしていない
① 基本的生活習慣 N＝269	14.5 (39)	50.9 (137)	25.3 (68)	8.9 (24)	0.4 (1)
② 健康な体 N＝267	3.7 (10)	29.2 (78)	34.1 (91)	30.0 (80)	3.0 (8)
③ 知的能力 N＝268	5.2 (14)	29.1 (78)	35.1 (94)	23.1 (62)	7.5 (20)
④ 情操性 N＝268	2.6 (7)	10.1 (27)	25.4 (68)	48.5 (130)	13.4 (36)
⑤ 社会性 N＝268	14.6 (39)	40.3 (108)	30.6 (82)	12.7 (34)	1.9 (5)
⑥ 基礎的生活技能 N＝268	4.1 (11)	28.4 (76)	37.7 (101)	25.4 (68)	4.5 (12)
⑦ 道徳的感覚 N＝268	4.5 (12)	20.1 (54)	42.5 (114)	29.1 (78)	3.7 (10)
⑧ 運動能力 N＝267	1.1 (3)	15.7 (42)	37.5 (100)	36.3 (97)	9.4 (25)
⑨ 明朗な性格 N＝267	15.7 (42)	47.9 (128)	25.8 (69)	9.4 (25)	1.1 (3)
⑩ 忍耐力 N＝267	1.5 (4)	13.1 (35)	45.7 (122)	35.2 (94)	4.5 (12)
⑪ 基礎的言語能力 N＝268	5.2 (14)	25.0 (67)	47.4 (127)	19.8 (53)	2.6 (7)

そのことについての感想・これからは？

%
(n＝　)

	おおいに力をいれてほしい	今までよりは力を入れてほしい	これまで通りでよいと思う	今までほど力を入れなくてよい	
① 基本的生活習慣	50.2 (134)	28.5 (76)	21.3 (57)	0.0 (0)	N＝267
② 健康な体	36.2 (96)	47.9 (127)	15.8 (42)	0.0 (0)	N＝265
③ 知的能力	0.8 (2)	6.8 (18)	75.0 (198)	17.4 (46)	N＝264
④ 情操性	22.9 (61)	53.8 (143)	23.3 (62)	0.0 (0)	N＝266
⑤ 社会性	37.9 (100)	35.2 (93)	26.9 (71)	0.0 (0)	N＝264
⑥ 基礎的生活技能	8.7 (23)	37.5 (99)	53.4 (141)	0.4 (1)	N＝264
⑦ 道徳的感覚	35.3 (94)	52.3 (139)	12.0 (32)	0.4 (1)	N＝266
⑧ 運動能力	16.3 (42)	50.0 (129)	33.7 (87)	0.0 (0)	N＝258
⑨ 明朗な性格	41.0 (109)	29.0 (77)	30.1 (80)	0.0 (0)	N＝266
⑩ 忍耐力	45.9 (122)	47.4 (126)	6.8 (18)	0.0 (0)	N＝266
⑪ 基礎的言語能力	40.8 (108)	44.2 (117)	15.1 (40)	0.0 (0)	N＝265

Ⅲ．今度は，先生の園での子どもたちに対する「教育・保育」についてお聞かせください。

先生の園では，以下にあげたような子どもに対する指導や注意がどのくらいおこなわれているでしょうか。また，そのことについて今後どうしたらよいでしょうか。あてはまるところ(評価・感想）に１つだけ○印をおつけください。〔**それぞれひとつだけ**〕

① 歯磨・洗顔・後かたづけ・挨拶など，基本的な生活習慣を身につけさせること。
(基本的生活習慣)

② 風邪をひきにくい・骨を折りにくいなど，健康で丈夫な体をつくること。
(健康な体)

③ ひらがなや簡単な計算など，基礎的な知的能力を身につけさせること。
(知的能力)

④ 絵や音楽などを見聞きして，美しいとか楽しいと感じられるような心をもたせること。
(情操性)

⑤ 友だちと仲よく遊べるというような社会性を身につけさせること。
(社会性)

⑥ はさみ・糊・鉛筆などが使えるなど，日常生活上の基礎的な技能を身につけさせること。
(基礎的生活技能)

⑦ 年少者やお年寄りをいたわるなど，道徳的感覚の基礎を身につけさせること。
(道徳的感覚)

⑧ 走る・とびおりる・ジャンプするなど，基本的な運動能力を身につけさせること。
(運動能力)

⑨ 明るくて素直な性格を育むこと。
(明朗な性格)

⑩ 少々のことではへこたれないというような「がまんづよさ」を身につけさせること。
(忍耐力)

⑪ したいこと・してほしいこと等をきちんと言えるなど，基本的な言語能力を身につけさせること。
(基礎的言語能力)

現在の指導の様子について

%
(n＝　)

	とてもよく指導している	わりとよく指導している	普通だと思う	あまり指導していない	ほとんど指導していない
① 基本的生活習慣 N＝269	26.8 (72)	50.2 (135)	22.3 (60)	0.4 (1)	0.4 (1)
② 健康な体 N＝268	13.1 (35)	31.3 (84)	50.7 (136)	4.5 (12)	0.4 (1)
③ 知的能力 N＝269	1.5 (4)	5.9 (16)	34.9 (94)	33.1 (89)	24.5 (66)
④ 情操性 N＝269	7.1 (19)	27.9 (75)	55.8 (150)	8.6 (23)	0.7 (2)
⑤ 社会性 N＝268	36.2 (97)	48.5 (130)	15.3 (41)	0.0 (0)	0.0 (0)
⑥ 基礎的生活技能 N＝268	9.3 (25)	39.9 (107)	48.5 (130)	2.2 (6)	0.0 (0)
⑦ 道徳的感覚 N＝269	14.5 (39)	31.6 (85)	48.7 (131)	4.5 (12)	0.7 (2)
⑧ 運動能力 N＝269	10.8 (29)	38.3 (103)	44.6 (120)	5.6 (15)	0.7 (2)
⑨ 明朗な性格 N＝269	21.6 (58)	38.7 (104)	36.8 (99)	3.0 (8)	0.0 (0)
⑩ 忍耐力 N＝269	14.9 (40)	46.8 (126)	36.1 (97)	1.9 (5)	0.4 (1)
⑪ 基礎的言語能力 N＝268	23.9 (64)	46.3 (124)	28.0 (75)	1.5 (4)	0.4 (1)

そのことについての感想・これからは？

%
(n＝　)

	おおいに力をいれたいと思う	今までよりは力をいれたい	これまで通りやりたいと思う	今までほど力をいれる気はない	
① 基本的生活習慣	37.7 (101)	15.3 (41)	47.0 (126)	0.0 (0)	N＝268
② 健康な体	20.5 (55)	35.4 (95)	44.0 (118)	0.0 (0)	N＝268
③ 知的能力	1.1 (3)	9.0 (24)	85.4 (228)	4.5 (12)	N＝267
④ 情操性	18.4 (49)	40.2 (107)	41.0 (109)	0.4 (1)	N＝266
⑤ 社会性	42.3 (112)	17.7 (47)	40.0 (106)	0.0 (0)	N＝265
⑥ 基礎的生活技能	10.5 (28)	22.9 (61)	66.5 (177)	0.0 (0)	N＝266
⑦ 道徳的感覚	25.1 (67)	35.6 (95)	39.3 (105)	0.0 (0)	N＝267
⑧ 運動能力	16.5 (44)	37.6 (100)	45.9 (122)	0.0 (0)	N＝266
⑨ 明朗な性格	34.3 (92)	23.5 (63)	42.2 (113)	0.0 (0)	N＝268
⑩ 忍耐力	29.1 (78)	29.9 (80)	40.3 (108)	0.7 (2)	N＝268
⑪ 基礎的言語能力	31.8 (85)	27.3 (73)	40.8 (109)	0.0 (0)	N＝267

Ⅳ. 最後に，先生ご自身と先生がお勤めの園のことについて簡単にお聞きいたします。

(1) 先生のおとしをお教えください。

%
(n＝　)

20歳未満	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～49歳	50歳以上
0.4 (1)	34.9 (94)	29.4 (79)	11.9 (32)	4.5 (12)	10.0 (27)	8.9 (24)

N＝269

(2) 保育職に就かれて何年めですか。

%
(n＝　)

1年未満	3年未満	5年未満	10年未満	20年未満	20年以上
7.4 (20)	18.2 (49)	19.7 (53)	29.4 (79)	16.4 (44)	8.9 (24)

N＝269

(3) 幼稚園・保育所のどちらにお勤めですか。

%
(n＝　)

幼稚園	95.2 (260)	3歳児担当	42名
		4歳児担当	95名
		5歳児担当	82名

(無回答略)

保育所	4.8 (6)	1歳児担当	1名
		2歳児担当	2名
		3歳児担当	2名
		5歳児担当	1名

N＝266

(無回答略)

(4)　先生ご自身にお子さんはおいでですか。

い　る	29.3 (78)
いない	70.7 (188)

N＝266

1人	17名
2人	49名
3人	10名
4人	2名

(無回答略)

(5)　先生は？

%
(n＝　)

女性	男性
93.2 (247)	6.8 (18)

N＝265

(6)　先生の園は公立ですか私立ですか。

%
(n＝　)

公立	私立
34.1 (91)	65.9 (176)

N＝267

(7)　先生の園では，課外教育として「○○教室」のようなものを実施していますか。

%
(n＝　)

い　る
(13.2) 36

N＝273

(8) あなたとご家族がお住まいになっていらっしゃる地域の様子は？

%

(n＝　)

1．農業や漁業や林業などが盛んな地域	11.3 (80)
2．各種の工場が多い工業地域	2.3 (16)
3．商店などが多い商業地域	10.5 (75)
4．会社や事務所などが多い地域	2.5 (18)
5．住宅地や団地（いわゆるベッドタウンなども）	69.9 (497)
6．その他	3.5 (25)

N＝711

＊だいたいの様子で結構です。

(9) この調査につきまして，何かお気付きの点がございましたならば下記にお願いいたします。

%

(n＝　)

なし	あり
93.1 (673)	6.9 (50)

N＝723